

---

# 夜明けの太陽

黎音

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

夜明けの太陽

### 【NZコード】

N5315W

### 【作者名】

黎音

### 【あらすじ】

この世界に太陽が昇る事はない。 破面でありながら孔を持たぬ一護はその為か感情がゆたか。 虚闇きつての実力者でありながら戦いを好み。

ある日たまたま現世に視察・・・という名の散歩に出かけ、 黒髪の死神・朽木ルキアと出会い運命の歯車が動き出す。

## 序　夜（前書き）

オリキヤラ&構造が嫌な方は〇ターン

## 序夜

頭上には一度も太陽が昇った事の無い空が広がっている。  
足元には生の根付く事無い白砂が続いている。

モノクロの世界 それこそが虚圈（ウヨコムンド）

そんな色彩に乏しい世界を陽光を思わせる髪色の少年が歩いていく。  
少年の素顔をかつて覆っていた仮面は割れ、頭の両脇に冠のようなくたちで存在していた。

この世界で万人問わず身体にある孔。しかし彼の身体には孔どころか指一本の欠損すら見当たらない。

背負われた大刀も確かに光をもつ瞳も黑白の中ではひどく映えた。  
その姿はあるでこの夜空に浮かぶ事は無い太陽のようだ。

「いつ」

「一護――！」

「一護ちやーん！」

四者三様の呼び声に少年――一護は振り返る。白砂を蹴散らし近づいてくる仲間に手をあげた。

「よつ」

「「よつ」つじやねえっス！」

若草色の髪をした幼女がブンブンと両手を振る。頭には割れた仮面。

「藍染さまが会議始めるつて怒つてるっス！」

「ずっと笑つてたけどなー」

「でヤンス」

「そこが逆に不気味よねえ」

アリの様な仮面をかぶった男が笑い巨体に巨面の男がうなづく。

その横で頬に手をあて紫色の髪の女が悩ましげに眉を潜めた。纏め上げられた髪をとめる白い簪の群こそ彼女の仮面の名残だ。

「・・・また外出禁止くらうわ」

「「「「「つおつ！？」」」」

突然の声に「彼」と一緒に来たハズの四人が奇声をあげる。声を発した青年は大して気を悪くした素振もみせず、一護に近付き手をとつた。前髪もなにも作らずただ伸ばされた黒髪の下から覗く片目を覆う仮面と奥に光る白黒反転した瞳。

「ほら」

「あの狸め・・・まあ仕方ねえか」

一護は眉間にしわをよせるが引かれる手には素直に従う。

「ネル、ペッシュ、ドンドチャツカ、ルベルゼ、セロ」

全員が一護を見る。

「帰るぞ」

「「「「「はいっ！—」」」」」

砂煙が撒きあがり

はれたとき、そこには誰もいなかつた。

## 序　夜（後書き）

はじめまして　黎音です。  
はじめてなんです、はい。なので読みにくい所があつたらすみません。

こんな駄小説ですが楽しんでいただければ幸いです。  
これからお付き合いよろしくお願ひします。

## 壱 高座

とてもなく高い所。・・・そう、見上げれば首が痛くなつてくるぐらいの高さ。

そんな所に座つて下を見下ろすのには何か訳でもあるのだろうか？

「あー、あれか！馬鹿と煙は高い所が」とつさに取り巻き五人組が一護の口をふさがなければ藍染は口を玉座から立ち上がつただろう。

底冷えするような笑みを顔にはりつけ

「一護。今日はウルキオラの任務報告があると言わなかつたかい？」

「朝、聞いた気がシマス」

「そうか。で、君は一体何処にいた？」

「東の方にちょっと息抜きに・・・」

「どうして戻つてこなかつたのかな？」

一護はおもいつきり目をそらす。が、藍染は容赦なく何度も同じ質問を繰り返す。

七度目で一護が根負けした。

「だーもう！分かつた分かりましたよ。歩いてるうちに報告の事忘れてましたスマセンッ。

これでいいかっ？」

「素直なのはいい事だ。だが規律を破つたとなるとそれ相応の罰を与えなければ下の者にも示しがつかないだろ？」「

その言葉に一護は げつ と露骨に嫌そうな顔をする。

「・・・また外出禁止か？」

外を出歩くのが好きな一護にとっては辛い罰だ。藍染もそれを分かつて一護によくこの罰を科す。

のだが。

「いいや

ああ、首を横にふった藍染が仏に見える。一護は目を輝かせた。

「一週間 自宮謹慎だ」

訂正。仏の微笑をうかべた鬼だ。

壱 高座（後書き）

長いので分けました。  
サブタイトルの読み方は「たかざ」です。

## 武 謹慎

「言ひ方変えただけじゃねーかつ！」

自宮に戻つた一護は怒声を張り上げる。空氣を読めぬペッシュが軽い口調で一護の語中の間違いを正す。

「いやいや。外出禁止は虚夜宮（ラス・ノーチュス）内なら出歩けたが謹慎は廊の中から出ることは許されないから、今の方が处罚としてはおもー」

「うるせえ！ 黙れ！ きざむぞ！」

ギロリッ と夜叉も素足で逃げ出す様な眼光を受け、ペッシュは青ざめドンドチャツカの後ろに隠れる。

「うわあ、きざむつて言つたよこの人

「怖いでヤンス」

「今のは自業自得でしょ」

ルベルゼは呆れ顔だ。いつもペッシュ達と一緒にいるネルにでさえ、「

「デれカシーなさすぎっス」

と冷たい目で見られる。泣き崩れるペッシュの背をドンドチャツカはいたわるよしこにさすつてやる。力加減を間違えつぶしているとも気づかず。

「・・茶が入つた」

「・・・わあ！？」

台車にティーセットを揃えて持ってきたセロに四人は驚く。

一護は近くの椅子に乱暴に腰掛けただけだったが。

セロの淹れる茶はいつもおいしい。本人は湯の温度や時間をはかっているに過ぎないというが、

どう理屈をつけようがおいしいものはおいしい。

一護の眉間のしわも緩んできたところでルベルゼが口を開く。

「ねえ一護ちゃん。一週間もどう過ごしましたようか？」

ネルが元気よく拳手。

「無限追跡ごっこするつス！」

盛り上がる約三名。一護とルベルゼは顔を見合せた。

・・・宮内だけでは猶豫するだな

セロの冷靜な一言にはヨリこの意見は却下

「あせ口は何したいでサン」

かくわ鬼上

「それ、お前維妙見（かみないだ）」

景の薄いせ口が本気になつたと見一叶なれなし との一語の指摘は

続いてルベルゼが不敵に笑う。

「ふふ。  
・・。  
私はいい物見つけちゃつたの」

このほれんばかりの双丘の谷間にから長方形の箱を取り出す

現世の方へ、此處でやうじよ

異論なしで満場一致可決・・・と思われたが、ふと一護が気づいた。

「なあルベルゼ。それどうから持つてきたんだ?」

「ん？ ああ、現世だけど？」

「おれは・・・金はどうした!まさかパクつてきたんじゃ」

悦てる一語は心外とはカリはリヘリセは鼻を鳴らしたが

۹۷

「ああ・・・そうだよな」

「そこのガキからくすねたの」

— それもダメだ！

バンツ  
ヒー護が机を叩いたせいでカタカタとカツブカ音を立てる。  
ヨリザバ、下口を用意する口。

ルベルゼは机の上と床をしつばたかせた。

「ダメなの？」

「当たり前だ！お前だって勝手に自分の物盗られたらやだろ？」「とりあえず犯人には『命を落とす不幸な事故』に遭つてもうつけど」

笑顔での腹黒発言に一同は若干引く。

「ルベルゼがなんかくろーい・・・」

「どす黒いオーラが見えるでヤンス

「怖いっス」

「・・黒いぞ」

「黒いな」

口々に言われルベルゼの米神につつすら青筋がつく。

「・・なんなら表出る？」

「「「「謹慎中なんで結構です」」」」

今が謹慎中でよかつた

謹慎万歳

ルベルゼ以外の五名は心の底からそう思ったのであった。

## 武 謹慎（後書き）

いつも黎音です。最初、高座と謹慎は同じ語で書いつていましたが、長いかな、と思って分けました。そのせいで高座はずいぶん短いですが。これからもよろしくです。

では。

天蓋の下にしか広がらぬ青空。それは宮の窓から見たせいか、ひどく小さく薄っぺらく見えた。

「グリムジョーが十刃（エスパー・ダ）の地位を剥奪…？」

「ああ」

謹慎中の一護に情報を運ぶのはたいていハリベルかウルキオラだ。ハリベルとは従属官（フランクション）を大切にするという姿勢にお互い好感が持てたし、

ウルキオラは意外や意外にも紅茶好きでよくセロの淹れた茶を飲みに一護の宮に寄る。

スタークとも仲は良好だが彼が暇なときいびきをかいていないので見た事がない。

現在来ているのはウルキオラで淹れられた紅茶をすすつていた。

「一体全体何したんだよ？」

「勝手に現世に出向き死神と交戦。結果、従属官を全員亡くし血らも浦原喜助に敗北し帰つて来た」

淡々と事実だけ述べるウルキオラ。かじつていたクッキーをおき一護はたずねる。

「でもよ、実力はあるだろ？なにもそこまでしなくても…」

「問題ない。奴は既に東仙続率官によつて片腕を失い、たいした戦力にもならん」

「ああ、腕をね…って、はあ！？」

あまりにもさうと言わされたのでそのまま流そうとしたが、一護はその意味を理解し素つ頓狂な声をあげる。

ウルキオラの翡翠色の瞳が一護に向けられる。

「相変わらず騒がしい奴だな」

「テメエは落ち着きすぎだつ！腕だぞ腕！お前と違つてアイツ超速

再生できねーんだぞつ！？

「だから最早戦力にならんと言つていいんだ」  
ウルキオラは空になつたカップをおき立ち上がつた。乱れのない硬質な足音が響く。

「また来る」

一護の富は窓が多い。他の富と比べると格段に。

一護は黒ではない空の色が好きだ。地の白砂も明るく見える。  
それなのに今日見る空はひどく色あせて見えた。空色と水浅茅の髪の青年が頭の何処かで結びつくからだろうか。

「グリムジヨー・・・」

仲がよい訳ではなかつた。会う度に「戦おつ」と付き纏つてきて正直、苦手意識も少しあつた。

でも根はまつすぐで。藍染の悪口を一人で隠れて言つていた事もある。

一護はいつの間にか下がつていた視線をあげた。偽物の空が広がつている。

まだ謹慎はとけていない。それが酷くもどかしい。

空がみたかつた。

「」の曇つた気持ちを吹き飛ばすよつた広大で透き通つた現世（ほんもの）の空が。

参 偽空（後書き）

サブタイトルの読み方は「にせだら」です。  
ところで年齢制限つけたほうがいいんでしょうか。これからバトル  
もありますし。

でも十五歳以上ってほどでもないしなあ・・  
なんせ、私がまだ十五じゃないし。

これからも応援よろしくです。

では。

#### 四 視察

「」の白い檻から出たかったんだ。 億万という色を見たかったんだ。

それが始まりにつながるなんて、 思つても見なかつた。

目の前に座るウルキオラの無表情な白い顔を見つめつつ一護は先程彼が言った言葉を繰り返す。

「視察？」

「そうだ。現世での万一一の戦闘に備えよとの藍染様からの「」命令だ」ウルキオラは紅茶の香を楽しむかのように顔の手前でカップをキープしている。

「空座町・・・だつだっけ？」

今回の戦いの、まさに「鍵」となる町の名を言いつつ一護はマフインに手を伸ばす。

そういうえばこれ、何処で作っているんだ？ なんて疑問がわいたが、おいしいのでとりあえず考えるのは保留にする。

「で、誰が行くんだよ」

「そこが問題だ」

ならば困った顔でもすればいいのに、白き鉄仮面は顔色一つ変えない。

「できるだけ少人数に絞り込みたいのだが、相応の実力者となるとな。

スタークとバラガンは動かんだろうし、ハリベルは周りの奴等がうるさい」

「ノイトラは自分から死神探してケンカ売りそつだし、グリムジョーが負けたんならそこら辺しか・・・

お前は？」

「あいにくと別任務だ」

藍染からの信頼が厚いウルキオラはその分、他の十刃よりも多くの任務がまわされる。

それはいい。

いいが、あの狸はウルキオラの都合も考えてやつたらどうなのか。個性が根強い破面達の人選など一苦労なんてものじゃない。

薄く紅のかかつた茶をありつたけの破面達の顔を思い浮かべながら飲み干す。

と、たつた一人 適任がいる事に気づく。

「なあウルキオラ。俺じやダメか？」

「・・・何？」

「だから俺だよ俺。俺でいいじゃん」

どこぞの詐欺のように「俺」を連発し自分を指さす。

ウルキオラは沈黙の後、口を開く。

「一護、お前は謹慎ち

「よし！ そうと決まれば善は急げだ！ ジャあな！」

たてかけていた大刀を引っ掴み一護はそこら辺の空間を素手で切り裂く。

そうして口を開けた黒腔（ガルガンタ）に躊躇なく飛び込む。

閉じていく黒腔を一瞥しウルキオラは今日初めて紅茶を口に含んだ。適任がいなかつたのも事実。一護が実力的にも性格的にも理想的だつたのもまた事実。

後で藍染様に報告しておこう、とウルキオラは一人思つた。

#### 四 視察（後書き）

「ビジぞの詐欺」とは「オレオレ詐欺」の事です。古すぎてネタ分からぬかも。

怖いですね、詐欺。実家の祖母もひっかかりかけた事があります。怪しい人の言う事は信じちゃダメですね、本当。

余談ですが、藍染つて打つとき、「あいぞめ」つて打つと一発で変換されます。

発見したとき、何気に感動しました。

では、これからもよろしくお願いします。

#### 四・伍 心配

「・・一護、菓子の追加を」「バスケットにマフィンを山ほど入れてきたセロはピタリと立ち止まつた。

目をこすり、しばたかせ、長い黒髪の間からもう一度椅子に座っているはずの主を探す。

が、そこには紅茶を飲むウルキオラしか居なかつた。

「ウルキオラ。一護は一体ー」「現世だ」

短い回答。だが、それにセロはぼとりつとバスケットを落としここ数年来の絶叫を喉から迸らせた。

それを一番近くの部屋に居たルベルゼが聞きつけとんでくる。「なに、なんなの！？あんたがそんな声あげるって事は百足事件の再来！？」

「ち、違うつ！一護がー」

言葉の途中で慌てたせいか、むせて咳き込むセロの背をルベルゼはさすつてやる。

落ち着いてきたセロは重大な事実を告白した。

「一護が・・現世に行つた・・」

バシツ、と驚きのあまり力加減を失つたルベルゼの手がさするとは程遠い威力と速度でセロの背にたたきつけられる。床に倒れこむセロ。ルベルゼは助け起こしもせず唇をわななかせる。

「え・・・ええー！？」

こちらも先程のセロと負けず劣らずの大聲だ。

二人の絶叫を一番近くで聞いたというのに眉一つ動かさないウルキオラは流石というべきか。

ルベルゼはおろおろと数メートル歩いてターンを繰り返す。

「ああ、どうしましょ。一護ちゃんが現世に？そんなの……」

ターン

「・・・絶対危ないわ。だって今現世には死神がいっぱい……」

ターン

「・・・居るんですもの。今すぐ迎えに・・・」

立ち止まり。しかし決心がつかないのか、再び歩き出す。

「でもでも、可愛い子には旅をさせろっていつし。一護ちゃんなら

死神の五人や十人・・・」

ターン ちなみにセロの背を踏んづけた。

「・・・返り討ちだらうし。・・・でも、もし具合が悪くなつてその隙になんて事があつたら・・・」

ターン 踏まれたセロが苦悶の声をあげるが、おかまいなし。

「・・・絶対に危ないわ。だって今現世には死神がー」

ターン そして話もループ

延々と自問自答を続けるルベルゼ。

「過保護め」

と、ウルキオラは咳き紅茶を口にする。

ほんの少し、この一人を従属官にまつ一護に「大変そうだ」と同情を向けながら。

#### 四・伍 心配（後書き）

本当は「視察」に書こうかと思ってたんですが、読まなくてもいいし  
番外編にしようかなーっと。オリキャラ一人は一護に基本過保護で  
す。

何気に楽しかった。このシリーズで書いてほしい番外編があつたら  
教えて下さい。  
書けそうだったら、書いていきたいと思います。

では。

## 伍 始動

歯車が動き出す　この物語の核たる歯車が  
　　ゆっくりと  
　　され  
　　ど確實に

きれいに噛み合わさり　　廻りだす

大きく息を吸い、吐く。その動作を一、三度繰り返し、一護は上  
を見上げた。高く広い青い空。

続いて下を見る。しっかりと生が根付く、母なる大地。

「・・・現世（シャバ）はいいな」

ビニヤの監獄から出所してきたかのような口調で伸びをする。

いや、今回の場合脱獄に近いのかもしねないが。

黒腔から出て地を踏みしめる。砂とは違う確かな感覚。頬をなで  
るさわやかな風。

ゆれる縁と色とりどりの花。

「・・現世はいいな」

無意識のうちに口をついてそんな言葉が出た。

出た所は山の中で、なぜか近くに隕石が落下してきた様な大きな  
クレーターがあった。

ヤミーとウルキオラの靈圧の残滓を感じたので、前回に来たときに  
なんらかの意図の下作られた物だらつと推測できる。

「派手だな・・・

一体何をやつたのだらうと一護は首をひねる。唯の登場による無用  
の産物とは知るよしもない。

しばしそのままクレーター創造のわけを考えていたが、ここに来た  
理由を思い出し。一護は顔つきを真剣なものにする。

さて、任務を始めよう。まずは

「散步だな」

人によつてはサボリだと称すかもしれないが、散歩は地形を知るための探索方法。

・・・なんて格好つけてみるが本心は現世を見てみたいという好奇心である。

ゆつたりとした歩調で一護は歩き出す。近くで小鳥のさえずりが聞こえる。枝に止まつてゐるのだらつ。小川のせせらぎ。形を変え流れる雲。

たくさんの生命がはぐくまれてゐるのが感じられる。

「・・虚圈もこんな感じだつたらー」

言いかけ、苦笑し首を振る。あそこは「死後の死した世界」だ。明るさなど求めるほうがおかしい。

歩いているうちに木の数が少なくなり、人工的なくぐもつた音が聞こえてきた。こすれあう木の葉の音が騒音に負け、聞き取りにくい。

どうやら、もうすぐ人の住むところに出でるらしい。

一護は気配を感じ、ふと足を止め、目線を左にずらす。一拍遅れて黒い着物を着た人物が現れた。

響転（ソード）に似ている。だが、死神の使つ歩法は確か「瞬歩」といつたつけ。

「何者だっ！」

刀に手をかけつつ、すごい剣幕で一護を睨む黒髪の少女死神。愚問を一護になげかける。

一護は自分の頭にある割れた仮面の欠片を指さした。

「見てわかんねーのか？」

ほら

動き出した

## 伍 始動（後書き）

ルキアと一護が出会う大切なお話です。  
これでいいのかな、という思いがありますがこれが私の今の精一杯  
という事で。

サブタイトルは「歯車」か「始動」かで悩みましたが、最後の一文  
を考え付いて  
「なら始動だな」と。

これからも「愛読よろしくお願ひします。  
では。

陸  
名乘

「破面か・・・！」

爛々と黒曜の瞳に確かに敵意を燃やす死神の少女。見た目は小柄で華奢な印象を受けるが、この時期・この場所に派遣された事を考えるとそれなりの実力者なのだろう。白くほつそりとした手が刀の柄を強く握りなおす。

藍染の侵攻はまだのはずだが、一体何のようだ？

問い合わせながら殺氣を飛ばされても困る。これでは拷問だ、と一護は心中だけで抗議した。口に圧せつとも一瞬思ったが、少女の陰の中だけに口をつむぐべ。

自分でも情けないと思うが少女にはそれだけの迫力があつた。整った顔が更に淵みを感じさせる。

「死神」と検索する。

何件か過去の雑談がヒットした。

「死神？ 黒くていのとおしくて、 あひでアレみたいー。 口に出すのも嫌！」

い！分かつた？

「…大概弱い」

「肩だ」

・・・皆、結構独自偏見が入つていて碌な情報が一つもない。

一護は己の無知さ加減に泣きたくなつた。

チヤキツ、という小さな音とともに死神が刀の鯉口を切る。脅しかもしれないし、このまま刀を抜くのかもしれない。だが、一護に戦う気はないし、彼女が刀を抜くのを待つてやる義理もない。

結果歩みを再開させた一護。死神はしばらく呆気にとられていたが慌てたように追いかけてくる。

「ま、待て！」

「待つかつ！」

一護は足を動かす速度を速める。背後の死神も負けじ、と早めたようで足音は変わらず聞こえてくる。

相手が諦めるまでお互い意地をはり、諦めない。奇妙な鬼ごっこが始まった。

すこしずつ速度があがつていぐ。何処までついて来るんだと一護はやれやれと眉をよせ。

目の前に広がる住宅街に驚き立ち止まつた。急に立ち止まつたせいか、勢いがころしきれなかつた死神は一護の背中に強かに鼻をぶつけた。

「き、急に止まるでない、たわけつ！」

「え？ お、おう。わりい」

反射的に謝つてから一護は首をひねる。

「・・つておかしくないか、これ

「む

死神もばつが悪そうな顔で咳払い。

「そうだな。仮にも敵同士であるといつにー」

「そつちが勝手に追いかけてきたのに、なんで俺があやまつてんだよー？」

「そこかつー？」

死神がつっこみとともに拳をおとす。一護はつづくまり衝撃を受けた腹をおさえた。

不意打ちだつたためか、ものすごく痛い。

「・・・おれ、戦う気ねえのに」

涙目の声に死神は罪悪感を感じたのか少し気まずそうに手をそらし。  
・・先程までの調子に戻る。

「ならば魂魄でも喰いに来たか」

「あんな不味いもん喰えるかつ」

立ち上がつた一護の発言に死神は怪訝そうな顔をした。

「・・・喰わんのか？」

「あ〜、体质？あの味ダメなんだ」

ダメ、なんて物じやない。以前喰らおうとした時、頭痛と眩暈、嘔吐の感覚、その他もうもうの症状がオンパレードで襲つてきた。

「もともと孔がねえからな。喰つ理由がそもそもなーー」

「孔がない？」

死神が聞き返す。一護は頷き、着物の襟をずらした。

「ほら」

日に焼けていない胸部は鎖も孔も無い。死神は困惑した表情を見せる。

「お前・・本当に破面か？」

「何言ってんだ。あるだろ？リッパなのが」

そう言い、一護は仮面の欠片をつつぐ。

不承不承頷く死神。どうやらむやみやたらに刀を抜く性格ではないらしい。ならば

一護は背の大刀を掴み、眼前の土に突き刺した。そして手を放す。

「なつ・・・

「お前、話通じそだしな。これでこつちは丸腰だ。怖かつたら刀握つてろ死神。

俺は一護。「一つ」を「護る」で一護だ」

わざと挑発するような口調で話す。死神は刀を強く握つた。

「・・・死神ではない」

腰から外し、一護に倣う様に眼前に突き刺す。

「朽木ルキアだ」

## 陸 名乗（後書き）

長文をとの事でしたので、書いてみました。  
まだ短いかな？それとも長すぎ？  
皆様の感想と批評をお待ちしております。

では。

何故、こうなった。

ルキアはたまたま空座町の巡回中、不審な靈圧を感じ取り、その場にかけつけただけだった。それだけだった。そのはずだった。

浮竹隊長、日番谷先遣隊の皆、白哉兄様、申し訳ありません。私は今、何故か——

「おお！ルキア、アレなんだ！？」

何故か一護という破面と散歩しております。

とかのぼる事、十五分前——

ルキアは握っていた刀の柄を手放した。本来ならば一護が刀から手を放した時、抜刀して斬りかかるべきなのだろう。そうでなくとも念のため帯刀はしておくべきだ。

しかしルキアは一護の澄んだブラウンの瞳を見るついにその考えを捨てた。

真直ぐな光を燈すこの破面は少なくとも自分から戦闘を望む事はないだろう、と無条件にそう思った。

いや、心のどこかで「あの人」に似た顔立ちの一護を信じたいと思つたのかもしれない。

「一護といつたな。何故現世に来た？」

「ウルキオラづての藍染の命令。「空座町を視察してこい」とて」一護の口から飛び出た敵の総大将の名にルキアは顔をしかめる。

「随分と急いた行動だな。決戦は冬になるのであろう？」

その言葉に今度は一護が「訳がわからない」といった顔をした。

「なんでそんなにかかるんだよ。遅くても秋になんじゃねーの？」

お互い首をひねりあう。どこかで思い違いがあり、そのため決戦の

日程が食い違つていろいろらしい。

ルキアが確認するように訊く。

「崩玉の覚醒に手間取つていて、まだ戦力が十分ではないのだろう？」

「いや、別に」

一護はあっけらかんと否定した。

「崩玉つて一瞬だけなら覚醒と同じ力だせるだろ？その一瞬でも破面作るのに十分だ」

「なん、だと・・・」

「知らなかつたのか？じゃあもつ幹部級は全員席がうまつてゐることも？」

「初耳だ・・・」

ルキアは頭痛を抑えるかのように額に手を置いた。皆が恐れる最悪の状況にいつの間にかなつっていたのだ。直ちに上に報告しなければ。

「おいルキア？」

心配そうに見下ろしてくる一護に大丈夫だ、と身振りで伝え・・・はたと思い当たつた。

「一護・・・お前、こんな事を私にしゃべつて大丈夫なのか？」

「え？」

「たわけつ！情報を敵に流した等、裏切り行為ととられ処罰されても文句はいえんのだぞつ！？」

一護はきょとんとしていたが、ふいに口角を緩ませた。

「何を笑つて・・・」

「優しいんだな、お前」

急にほめられ、ルキアはぽかんと口を開けた。

「だつて俺、破面だぜ？会つてすぐの敵を気にかけるなんて普通しねえよ」

賞賛とともに礼も言われ、ルキアは顔を朱にそめながら怒鳴つた。  
「き、貴様が破面らしくないのが悪いのだつ！－この前来た奴等は皆好戦的で強かつたというのに、お前ときたら刀は手放すは泣き出

すは！！

「泣いてねえ！！」

「いいや、腹を殴られただけでピィピィ泣いた！」

「あれは不可抗力だつ！」

しばらく泣いた泣いてないの言い争いを続けた後、ルキアは一護を再びじいっと見る。

「本当に破面か・・・？」

「またかよ。そうだつて言つてんだろ」

「性格の差が前来た破面と大きすぎてな。信じられるのだ」「つてかそいつらが普通。俺みたいのが变なんだ」  
一護はそういうて刀を地面から抜き、背に戻した。

「じゃあなルキア！また会おうぜ！」

「あ、こら待て話はまだー」

ルキアが言い終える前に一護の姿は消えた。追うか手に入れた情報を帰つて伝えるカルキアはしばし悩んだ。が、結果として十八秒後その心配はなくなる。

「あのさ・・・ここビニラ辺で何所までが空座町なわけ？」  
困りきつた一護が戻ってきた事によつて。

結局、放つておく事もできず、監視もこめてルキアは一護と散歩を共にした。

「いやあ、すぐえな現世は」

一護は道端で摘んだ綿毛を広げたんぽぽに ふうー と息を吹きかけた。

強風をうけ、たくさんの種が子孫を残すため大空に舞い上がる。太陽はすでに西に傾き、空と旅立つた種たちの白い綿毛を一護の髪と同じオレンジ色に染めた。

「こんなに綺麗で不思議な物がたくさんあるなんて」

「ああ。私も此方にも来たときはあまりの技術の進歩に驚いた」

並んで歩く黒（死神）と白（破面）。緩やかに伸びる。

平和な散歩の時間が、そこにはあった。

## 漆 散歩（後書き）

今回はほのほのとしたお話をしました。  
いかがでしたでしょうか？感想をいただければと思います。

## 八 宿泊

茜色の空の下、一護はルキアに歩調をあわせ夕暮れの道をならんで歩く。

一護はまさか死神に案内されるとは考えてもみなかつた、と今日の散歩を振り返り思つ。

が、もしルキアに会わなければ自分は延々とこの町をさまよつていただろう。

それにもつと短氣で物分かりの悪い死神に会つていたら・・・と考えると、ルキアに会えたのは最高の幸運であろう。紛れもない敵に言う言葉としては「さあ・・・いや、かなり不適切なものだとおもうが。

「なあ 一護」

一人思考の海に沈んでいた一護を引っ張りあげた声。

「ん? なんだよルキア」

左下に視線をむければ黒い瞳がまつすぐ此方を見つめ返していた。「そろそろ帰るのだろう?」

「・・・ああ、言つてなかつたか。今日は現世に泊まるつもりだぜ」一護の宿泊宣言にルキアは目をまんまるにした。

「なぜだ? いや、それよりも何処に泊まる気だ?」

もつともな質問。だが一護は目をあからさまに逸らし、一つの質問をばぐらかした。

「まあ、いろいろ事情が・・・。寝る所はとりあえずどつかの家に靈体のままホームステイ・・・」

「・・・それは「とりつく」と言ひのではないか?」

「毎晩変えるわ」

「しばらく居る気か? !?」

親指を立てた一護にルキアは怒鳴つてつっこむ。そして一気に十年分せが逃げてこきそなほど重いため息をつく。心配する一護の

顔をちらりと見て、またこれ以上ないぐらい深くため息。

いやいや失礼だろ？、さすがに。一護は常より眉間のしわを深くした。

「何だよさつきから。明日からはちゃんと一人で町見て周るつて

「ダメだつ！私はお前の監視についているのだぞ！？一人になどさせん！」

「・・監視だつたのか、お前」

「言つただろうつ！？最初に監視としてつきそつとーーお前は私と同じ所に泊まるのだ！！」

「・・・と、いう訳でして」

「「「「いやいやいや」「」「」「」」

浦原商店内。ルキアの言葉に目の前の五人の死神が一斉に首を横に振る。一護はとりあえず片手を軽くあげた。

「ども」

「うるせえぞ破面！！」

とたんに赤い髪をしたガタイのいい男死神が胸倉を掴みあげてくる。突然の事に動搖しているのは分かるが、何もしてないのにこれでは理不尽がすぎる。一護は眉を吊り上げた。

「何しやがんだテメエ！！」

「黙れこのタンポポ頭！んな頭なら「いち」「より」「みかん」のほうがよかつたんじゃねえのか！？」

「あああ！？「いち」「じやねえ」「一護」だボケ！脳みそつまつてんのか赤パイン！！」

「孔なし破面！！」

「刺青死神！！」

「刺青ばかにすんじゃねー！」

「そつちこそ孔なしなめんじゃねーぞ！レアなんだよ、バーク！！！」

「バカつうほうがバカなんだよバーカ！！」

目を覆いたくなるような幼稚な言い争いはルキアの鉄拳により終焉を迎えた。

「やめんかっ！たわけ共！！」

「ぐえ！」

潰された蛙のような声をあげ倒れこむ二人。一室に集つ一同は哀れみと呆れを視線に乗せ、投げかけたという。

## 八 宿泊（後書き）

もう少し長かつたんですが、次の話と分ける事にしました。  
誤字脱字はじやんじやん教えてください！

「トツ とちやぶ台に人数分の湯のみが置かれる。

「まあ皆さん、自己紹介でもしようじゃないですか」

店の奥にいた浦原が相変わらず室内だというのに緑色の帽子をかぶつたまま胡坐をかけて座る。

浦原にすすめられ、赤髪の死神がしぶしぶといった様子で口を開く。

「六番隊副隊長 阿散井恋次」

続いて頭を髪一本残さずそりあげた死神が名乗った。

「十一番隊の斑目一角だ」

「同じく十一番隊の綾瀬川弓親」

隣に座っていたおかっぱの男死神も一緒に自分の名を言つ。

その次は一護の真向かいに座していた白銀の髪の少年にしか見えない、しかし強い靈圧をもつ死神。

「十番隊隊長、日番谷冬獅郎だ」

隊長格だったのか、と一護は納得した。と、いうことはこの部隊の隊長は彼だろう。

「その副官の松本乱菊よ」

ルベルゼを思い出させる豊満な胸をもつ女性死神が灰色の瞳を片方つぶる。

「アタシは浦原喜助。このしがない駄菓子屋の店長っスよ」

一護は口元を扇で隠す癖のある金の髪の男をじっと見た。

「・・浦原喜助ってアンタか」

「おやあ？ もしかして有名人っスか？ アタシ」

一護はコクリとうなずいた。

「元十一番隊の隊長。崩玉を作りだし、戦闘能力・頭脳は目を見張るものがありー」

浦原はそれを聞きつつ茶に口をつける。

「超がつく変人」

咳き込んでしまった浦原。何度も辛そうに咳をし、鼻孔から茶を追い出したところで不満げに口をへの字にまげる。

「それ、誰情報つスか？」

「主に藍染」

あげられた情報提供者の名に浦原は扇子をパチンと閉じる。

「あの人は・・・人のことを言えるほどまともじやないでしょ」「いや、お主も言えんぞ喜助」

尾を揺らし会話に入ってきた黒猫。皆は一様にうなづいたり、「お久しぶりです」等と声をかけたりしているが、一護はぽかんと口を開けたまま猫を凝視していた。

「だつて、おかしいだろう。猫だ、猫。きれいな毛並みの黒猫が。「ね、猫がつ！猫がしゃつべ、つえ？何、え、ええええええ！」

？」

「落ち着け一護」

隣に座るルキアに諫められた事によりパニックの嵐からぬけだしたもののは、一護は突然現れた喋る黒猫を受け入れられず。

「よし・・・きっと現世の猫は喋るものなんだ・・・グリムジョーの親戚なんだ・・！」

と自己暗示を強くかける。

隻腕となつた本人がいれば「俺は猫じゃねー、豹だつー」（いや、

猫科だろう）と憤慨しただろつ。

その代わりに黒猫が意地悪く笑つた。

「わしだけじや」

「うそおおおおおおー！ー？」

オレンジの髪をかきむしるほど混乱している一護に浦原が救いの手をいれる。

「あの夜一サン。そのぐらいたして・・・」

「つむ」

黒猫・・もとい夜一は畳の上にぺたんと座る。一護はもう何かを悟つたような顔で茶をする。

「あー、おいしい。セロが淹れた茶と同じ位おいしい」

「本日の一護の悟り・「現実逃避」」

どこか間違っている感はいなめないが、誰も触れることなく話は進んでいく。

「・・・それにしても破面ひじくないっスねえ 一護さんば」

「・・・またか」

今日で三度目の話題に一護は顔を歪めてみせる。田畠谷、と名乗つた少年死神もじい・・と一護を見て呟つ。

「孔がないといつのは・・」

「それも本当だつ」

「ほう、孔がないとな?」

夜一の金の瞳がキランと光る。一護にぴょんつと一護にとびつくと急上昇する靈圧。白い煙が体からあふれ出す。それがおさまつた時、一護は何故か褐色の肌の美女に押し倒されていた。

「・・・え?あ、う」

真っ赤な顔で口を開閉させる一護。美女は妖艶な笑みをうかべる。

「どれ、見せてもらおうかの」

止める間もなく一糸まとわぬ美女に襟を大きく開かれる。なんだか色々と危険な状況だ。

女性を手荒に引き剥がすわけにもいかず、一護は目を瞑り顔を背け、大声で叫んだ。

「やめひつーつてか、服着ひつー服!」

## 玖 黒猫（後書き）

「黒猫」＝「不運」ってね。  
私事ですが、明日誕生日です  
プレゼントにブリーチの映画のDVDを頼んでいるので楽しみです  
！

## 拾 女性

「いや～・・やはり窮屈じやの 服と「うものは」美女一黒猫姿から元に戻った（らしい）夜一が纏つた服のすそを引張りながら言つ。

「それ着んのが当たり前だつ」

一護はいまだ赤い頬を隠すように背を向けて座つている。

「もうよいぞ」

夜一に着替えの終わりを告げられほっとしながらふりむく。

一護は卓袱台を囲んでいたメンバーの減り具合に眉をひそめた。

「なあ、赤い髪の奴とはげとおかっぱ頭とルキアと金髪の女人の人、何処行つた？」

すると、残つていた日番谷と浦原は気まずそうに茶をする。代わりに疑問に答えたのは夜一。にんまりと口角をあげる。

「仕置きじや」

「は？」

見目の美しさに反し、夜一はどつかと胡坐をかいた。

「わしのピッヂピチの肌によからぬ情を抱いたらしくての。今、ルキアと松本が裏手でわしと碎蜂が前に教えてやつた「その場でできる！簡単な拷問」を実践中じや」

「んな料理みたいな言い方」

まえにテレビというものでみた三分クッキングのうたい文句がなんだか怖ろしい使われ方をしている、と一護は身震いした。

夜一は指導中のことを思い出したらしく口元に軽い笑みをうかべた。

「特に碎蜂ははりきつての。斬魄刀を持ち出して卍解を——」  
はてな、と一護は記憶を探る。「卍解」とは隊長格しかできぬ斬魄刀における最終奥義だった気がするのだが。

「・・そんな事でしていいのか卍解つて」

「いいわけねえだろ」

一護のつぶやきに現隊長職を務める日番谷が断言。

「そういえばなんでお前らはここに居るんだ?」

「・・・あんなのいちいち反応できるか、ぐだらねえ」

「昔からこんな感じなんスよ、夜一さん。慣れちゃいました」

一人の発言に夜一は口先を尖らせる。

「なんじや。枯れておるのお主ら。一護の初々しさを見習わんか」

「「うるせえ!!」」

心底煩そうな日番谷と真っ赤になつた一護が怒鳴る。浦原は「あはは」と笑つただけだった。

一護の様子を見ていた夜一は不思議そうに言った。

「にしても一護、お主は何故藍染などに従つておるへん?」

「・・従いたくて従つてるわけじゃねえ」

一護は苦虫を噛み潰したような顔をする。

「ただ、そこには仲間がいる。俺はそれを護りたい。それにー」  
そいつって一護は思い出す。過去の出会いと散つた一人の仲間のことを。

暗い世界は嫌だと言つた「彼女」の事を。

「あの死んだ世界に夜明けをもたらすにはーー力が必要なんだ」

太腿の上で硬く握り締められた手。浦原はそれを目をほそめて見ていた。

「意外だな。てっきり藍染の下についた者たちは皆深い忠誠心があるものとばかり思つていたが・・」

日番谷の率直な感想に一護は手で大きな×をつくる。

「んな訳ねえだろ。力くれるつていう誘いがなきや、今の数の半分も集まらなかつたぜ。

もちろん、忠誠は表向き皆誓つてゐるけど、本当に心底つて奴は多いつてわけじやない」

「で お前は全つ然、忠誠心の欠片も無いわけか」

「おづ、と一護は胸を張る。

「あんな腹黒狸、いつか寝首かいてやる」

「狸つスカ。そりや いいつスネ」

一護の狸発言が坪だつたらしく、浦原はかみ殺しきれない笑いをもらす。

「もしかして、現世に泊まりたいというのもー」

「ああ、ちょっと謹慎中にダチが持ってきた任務にむりやり参加して脱け出してきたからな。

しばらく帰りたくねえんだよ」

田番谷の的を射た問いに笑つて答えたとき、襖が横にずらされた。崩れ落ちるようになれた三人。腰に手をあて立つ二人。夜一は パツ と顔を輝かせる。

「おお、やつたか！」

「はい、夜一殿」

「けちょんけちょんにしてやりましたよー！」

「うむ」

満足げにうなづく夜一にルキアと乱菊はきりりと引き締まつた顔をする。

「これも夜一殿と碎蜂隊長の『指導の賜物です』

「これからも是非、よろしくお願ひします」

「まかせよ」

女の会話に恐れを覚え、黙して茶を口にする三人。転がった男達を助け起こす気にはとてもなれなかつた。

## 拾 女性（後書き）

久々の更新です。お待たせしてすみません。  
に、しても「彼女」って誰！？なんだかまたオリキャラを作る事になりそうです。

キャラ考えてから書けって話ですよね、すみません。  
その謎の「彼女」と夜一さん達の女の会話からサブタイトルが「女性」なんですが安易すぎるだろって感じですよ。もつといいタイトルつけてやるって方、どしどし応募を（してません）！

「彼女」の亞麻色の髪がふわりと風をはらみなびく。

白い力チュー<sup>エスティグマ</sup>シャのような仮面の名残に額に連なる十字架を思わせる仮面紋。

服の胸元や裾に施された黒いレース。振り返つて「彼女」は笑いかける。

「

その言葉は耳を澄ましても聞き取れない。

駆け寄るうとしても、足が地に縫い付けられたように動かない。

「彼女」は穏やかに微笑んでいる。が、次の瞬間。突然、朱を撒き散らして倒れこむのだ。

そう。この光景を一護は知っている。「彼女」が倒れたわけも。これは、すでに起きた過去の出来事。

重い瞼をこじ開けるように開く。視界いっぱいに広がるは見慣れた

白の天井 ではなく、

初めて見るくすんだ木の天井だった。

一護はその事に暫し寝起きのぼんやりとした頭で昨夜をたどつた。

「破面・・・」

「ん? どうしたんだこの小さい女の子」

「破面・・・。貴方は危険・・・。危険は排除・・・」

「うえええ! ? なんかすごい殺気向けられてんだけど! ?」

「やべつ、雨が殺戮モードに・・・」

「やばいのかこれ! ? おいルキア!俺の刀、どこしまった! ?」

「店の奥に結界をかけて厳重に保管してあって、すぐには取り出せん

「なんでんなめんどくさい事を！」

「・・・お前、少しほ自分の状況を考えんか」

「はあ？ つとー！」

「排除」

「危なかつた・・・で、俺は結局如何すりやいいんだ！？」

「排除」

そして視界はブラックアウト

「そうだった・・・」

スタークの従属官・リリネットと変わらぬ背格好の少女の奇襲をうけ、よけきれずに氣絶したのだ。痛む腹部をさすりながら上半身をおこす。

すると一護が起きたのを知っていたかのようなタイミングで襖が横に滑る。

「・・・おはようござります」

正座をして朝の挨拶をしてきたのは黒髪ツインテールの大人しそうな女の子。

もつといえは、昨日一護の腹部に拳を叩き込み、昏倒させた張本人だった。

無意識のうちに腹部を庇つ様な手つきをしていると、少女は深々と頭を下げた。

「あの、昨日はすみませんでした」

「え？」

急に謝罪を口にされ、一護は戸惑いを隠せない。いつの間にか少女の後ろに立っていた少年が眉間にしわを寄せた。

「別におめえが謝る事ねえだろ雨」

「でもジン太君、勘違いだつたんだし・・・」

ジン太、と呼ばれた少年は一護を びつ と指差した。

「ここからは前、お前に大怪我させたんだぞっ！？」

ジン太に指差された一護は雨を見る。五体満足、健康そうにみえるが。

「……本当か？」

「……ええ、まあ」

一護の問いに雨は少々口籠つたが確かに頷く。

「それで、昨日てっきりまた攻撃にきたんだと・・・」

本当にごめんなさい、と雨は申し訳なさそうだ。

一護はそれをだまつてみていたが、がばり、と布団を体からむき、その場に正座し頭をさげた。

「悪かった」

「え？」

いきなりの事に謝っていた雨も腕を組みしかめつ面をしていたジン太もぽかんと口を開ける。

「・・そんな日にあつたんなら、俺のこと警戒して当然だよな」

ゆつくりと腰を上げ、雨に近づき膝を折り目線を合わせる。

「『めんな

自分がここに来た事によつて嫌な思い出を刺激してしまつた事にせいいっぱいの謝罪を。

拒まるかと思いながらもそつと頭に手を置く。

雨はほんの少し身体を強張らせたが一護の申し訳なさそうな笑みを見てゆつくりと緊張と警戒をといていく。

一護はこちらを探るような目で見るジン太にも目を向ける。誰よりも彼女を心配している事が言動から察せた。

「傷つけるつもりはないから・・・」

お前もこの子も。そして、他の皆も。

そういうて類に手を伸ばす。

ジン太の目つきは鋭いまだが拒絕するそぶりは見せなかつた。

「・・あつたけんだな、お前」

ジン太が至極意外そうに目を瞬かせた。

「破面だつて体温はあるさ。・・・心もな」

雨が不思議そうに自分の頭の上にある一護の手を触る。

「・・やわらかい」

「俺には鋼皮<sup>イヒロ</sup>がねえからな。簡単に傷はつくは裂けるは不便もいいとこだ」

でも、一つだけ。全ての不便を挙げよつと鋼皮が無くてよかつたと思える事が一つだけ。

「やわらかいなら、こうやつても誰も傷つけずにすむだろ?」

虚闇は弱肉強食の世界。手は相手受け入れるために開く事はなく、ただ握りしめられ拳として振るわれる。口は語り合つ為ではなく、敵の喉本を噛み千切る為に。

声は挑発と勝利の雄叫びの時にしか発せられず、爪は相手を引き裂く為に研ぎ澄まされる。

『こいつのつて嫌よね』

『貴方もそう思つでしょ?』

「・・・誰も傷つかずにするのが一番いい」

それが無理ならせめて傷つくのは己一人で。

「本当に破面らしくないつスね、一護サンは

間延びした男の声。

「浦原・・」

「おはようござります。朝ご飯、できますよ

「あ

それを伝えに来たのだろう、雨が声をあげる。気にするな、と ぽんつ 頭を軽くたたくと立ち上がった。

「なつかけねえな、雨」

「ジン太君だつて忘れたくせに・・・い・い・い・い・！？痛い痛い痛い

！・・

「おい、何髪引っ張つてんだ！？やめろ！」

「うつせーーー！」

「ジン太、やめなさい」

「て、店長・・・」

四人は騒がしく食卓へと向かう。  
狭い廊下を、四人一緒に。

## 拾壹 優草（後書き）

遅くなりましたが、第拾壹話アップです。

サブタイトルの読み方は「やさしいてのひら」です。

気づけば、話数も一桁。これも心援してくださる皆様のおかげです。

本当にありがとうございます。

読んだあとコメントを一言でも書いて下さると、うれしいです。

食卓にはすでに一護と一護を呼びに来た三人の他は全員がついていた。

「遅いぞ、一護

「わらい

類を膨らませるルキアに急かされながら一護が座ると家主である浦原が手を合わせて音頭をとる。いつと声を張り上げた。

「では皆さん、」

「頂くとするかの」

人型となっている夜一が浦腹を無視しひときわ大きなどんぶりを持ち上げ先に食べはじめる。

ほかの者達も夜一にならいそれぞれ手を合わせ箸をとった。

「夜一さん・・・」

恨みがましく、じと目で名を呼ぶ浦原を夜一は鼻で笑う。

「おぬしの号令で食べ始めなどしたら飯がまずくなるわ。ほれ一護。こやつの事は放つておいて早う食うのじや」

「え、お、おう」

浦原を氣の毒に思い、未だ一人料理に手をつけていなかつた一護は夜一に押し切られるように両手を合わせる。

「いただきます」

味噌汁の椀を口元に持つていくと味噌の良い香が鼻腔をくすぐる。すすれば朝の冷えた身体に温かさがしみわたつていくよう。

「うめえ・・・」

一護の口からもれ出た素直な感想に眼鏡とエプロンをかけた巨体の男が会釈した。

「ありがとうございます」

「これ、アンタがつくったのか?」

「はい。申し遅れました、浦原商店定員・柄菱テツサイと申します。

以後お見知りおきを

「あ、はい、一護です。よろしくおねがいします」

誰に対しても頭の低いテツサイにつられて、一護も敬語で応対した。テツサイから見たことのない料理の説明をしてもらひながら、長方形の皿に載つた魚を手前に引き寄せる。

皿に盛られた焼き魚を器用につついて骨を外していく一護にテツサイは感心したようになつた。

「ほほお、見事な箸裁きです。ジン太殿も見習つて頂きたいものですね」

「テツサイ！ テメエツ！！」

かきこむように食べていたジン太が食べるのをやめ、米粒を飛ばしながらテツサイにつつかかる。それを微笑ましいと思いつつ見ていたが、罵声を吐きテツサイに飛び掛つたジン太が見事締め上げられその体から骨のきしむ音が断続的に聞こえてくるとさすがに片頬が引きつった。ルキアをはじめとする数人の死神は不気味なバツクミユージックに箸の動きをとめる。

が、日番谷は呆れた瞳を一瞥くれただけで、出しまき卵に箸をのばす。

その落ち着きつぱりは流石は隊長、といった所だ。

浦原や雨は慣れているのか自分のおかずが騒ぎに巻き込まれないかだけが心配らしく、ジン太達からできるだけ遠いところに魚を移動させている。

夜一にいたつては騒動を感じせず、抱えあげるほどどんぶりをもくもくと空に近づけていた。

誰もが仲裁にはいる氣はないらしい。これが彼等流の「ノリコニケー シヨン・・なのだろう。おそらくは、きっと。たぶん。

一護は深く追求する事をせず白身の魚を口に運んだ。淡白だが決して飽きない味だ。

耳がどこからか響く悲鳴とギリギリと関節がしまる音をひろつたが、顔を上げる事はせず。

まるで義務であるかのように、黙々と箸を進めていった。

「なんだよ、これ

食後、ルキアに引き摺られる様にして連れて来られた一室。

その床に並べて寝かされていた「もの」に一護は眉をひそめた。

足元には金髪の美女。あちらには銀髪少年。その反対方向に転がるは剃髪の男とおかっぱの男。それに押し潰されている不運な男は一護につつかかってきた赤髪の刺青野郎。

その向こうにはルキアとそっくりな・・否、ルキアそのものと言つても差し支えないだらう、瓜二つな少女が横になつていた。

違うところといえば、服装。隣に立つルキアが死神の制服である死装束を纏っているのに対し、畳に身体を横たえている「ルキア」は現世風の服を着ていた。

見わたせば他の皆も洋服を着込んでいる。

そして、よくよく見れば全員肌が青白い。死人の様に血の気が通つておらず、もともと色白の「ルキア」にいたつては紙の様に真っ白だ。

「ふふふ・・・」

ルキアは低い声で笑うと歩を進め、「ルキア」の上半身を抱き起こした。

「これはな、義骸といつ

「ギガイ」?

聞き慣れない言葉を鸚鵡返しに聞き返す。ルキアは自慢げに大きく頷くと「ルキア」に体を近づけ、その中に するり と入った。

一護は息を呑んで「ルキア」の様子を見守っていた。

と、今までピクリとも動かなかつた彼女の瞼が震える。ゆっくりと黒曜の瞳が現れ・・・いつもの古風な喋り方で話しだす。

「どうだ一護。驚いたか」

一護はあっけにとられてただ口を開閉させるだけ。その様子にルキ

アは堪え切れずにふきだした。

「はははっ！な、何だその顔は！！」

「う、うるせーなっ！で、結局なんだよ義骸つて」

「これはな、仮の肉体なのだ」

親指で自分を指差し、得意げに胸を張る。

「現世に長期に渡り滞在する死神に支給されており、人間に成りすます事ができる」

「じゃあ今は人間にも姿が見えるのか？」

「無論だ」

「すげえな」

「こんなものがあつたとは。一護は心底驚いていた。

「・・・俺も欲しいな」

言つてから子供のような我儘だった、と反省する。ルキアの顔を見るのも何だか恥ずかしく頬をかきながらそっぽを向いた。またからかわれるのだろう。そんな確信と覚悟と諦めに似た感情に一護は眉間のしわを深くした。

が、ルキアは一護の思いえがいていた様なことはせず、腕を組み何度も頷いた。

「そうだろうな・・・。私も現世に来たばかりの頃は人間の中に入ることに多少といえども興味があつたものだ。そ・こ・で」

ルキアが組んでいた両の手をパンツと打ち鳴らす。

襖が横にスライドし、扇子を広げた浦原が登場。

後ろから彼に付き従うように続いて部屋に入ってきたテッサイの肩に担がれている「もの」に一護は言葉を失った。

着ているものはジーパンにTシャツと非常にシンプルな物。頬は死人の様に色がない。

硬く閉ざされた瞼にゆるくかかるオレンジ色の髪。その瞼が開かれ

た時の瞳の色を一護は知っている。なぜなら、それは

「・・・俺？」

「の、義骸つス」

浦原が帽子を片手で押さえながら囁く。テツサイが肩から義骸を置くの上に降ろす。

近くに寄つてまじまじと見たわけではないが、本人の目から見ても違いが見つけなれない。

「ちなみに一護サンが気絶してらつしゃる時に色々調べさせてもらいましたからサイズはバツチリツスよ」

「人の寝てる時に何してやがるテメ！」

一護は飄々と笑う浦原を睨みつける。彼に対する尊敬と感謝の念は一瞬にして霧散した。

「せっかく現世に来たのだ。楽しまなければ損である」

「おう！ ありがとな、ルキア！！」

変わりにこの手配をしてくれたのであるルキアに感謝の思いが募る。

一護は礼を彼女にだけ、万感の思いで口にした。

うれしそうに自分の義骸を見つめる一護。まるでプレゼントを貰つた子供のような振舞いにルキアは目元を和ませた。しかし、次の瞬間辛そうに俯き、唇を噛みしめる。  
その脳裏に去来するのは昨日の晩のこと。

「一護に義骸を、ですか？」

日番谷の提案にルキアは首を傾げた。日番谷は撤回するつもりは無いらしく、しつかり首肯すると浦原に視線を滑らせた。無言の回答の催促に浦原は頷く。

「もちろん、かまいませんとも。明日にでもお渡しできます

「でも隊長。何でそんな事を？」

乱菊は怪訝そうな面持ちで日番谷に聞く。その場にいる誰もが思っていることだった。

「そんなんにあの子の事、気に入つたんですか？」

「そんなんじゃねーよ。浦原、奴に渡す義骸には仕掛けを作れ」「わかつてますよ」

「仕掛け？」

ルキアはその響きに眉をひそめた。

「ああ。まず、通常よりも脱ぎにくくする。義魂丸はもむけりん、悟魂手甲は絶対に渡すな」

「それは、義骸に閉じ込めるといふことですか！？」

「そうだ。運動能力は人間並みにおとせ。そしてもう一つ。靈圧遮断義骸を渡す」

ルキアは首を傾けた。それを渡して何の意味があるのだろう？

「靈圧が遮断されれば破面に一護サンは感知できなくなります。死んだ・・とでも思つて貰えればいいんスけど。まあ助けや迎えに誰か来る確率はぐっと減ります」

「そうして向こうが油断しているときに有力な情報を奴から絞り出す」

つまり、仲間から一護を隔離させるために義骸といふ枷をつけるのだ。

酷い話だ。

拾式 義骸（後書き）

なんだか田畠谷がくろ～い・・・。  
いや、好きですよ、田畠谷。ただしこいつ非情な事で死るのは隊長  
ぐらいかな、と。  
一言感想いただけたうれしいです。

一護は商店街のにぎやかさを田の当たりにして思わず足を止めた。友達なのだろう学生らしきグループ、腕を組んで歩く若いカップル、子供連れの仲のよさそうな親子。行き交う人々。活気あふれるその様は虚闇には決して無い、あたたかな日常。

「どうかしたのか？」

急に立ち止まつた一護に同行していたルキアが心配そうに声をかける。

「いや・・・ただ、にぎやかだなあつて」

正直な感想を口にしながら辺りをきょろきょろと見渡す。

「おい、拳動が不信すぎるぞたわけ。もつと自然に振舞わんか」「自然について・・んな事言われてもなあ」

一護は困ったように頭をかいた。

なんせ見るもの聞く事、全てが珍しくて仕方が無い。これで好奇心が沸かないわけが無いだろう。

そんな一護の思考を読み取ったのか、ルキアは米神を押さえた。

「ならば、せめて大きな声で「わー現世つてす」ーい」・・などと言つのはやめる。目立つのだ」

「テメエも十分目立つてんだろ」

身振り手振りをつけて何処かの劇団員のように一護の言つた事を繰り返すルキアは言わずもがな通行人の注目を浴びていた。一護の指摘を受けルキアは咳払いを一つするとにつこりと笑う。

「さあ、いきましょう一護君。おほほほ・・

「何やつてんだ気持ちわるつ、う！？」

田にも留まらぬ早業で誰の目にも映らなかつただろう。

一護はルキアに踏まれた足を地面から浮かせ、抱え込む。その拍子にバランスがうまく取れなくて片足で跳ね回つた結果、更に視線を

集める事となつたのはむしろ当然の結果だ。

「何をやつておるか！！」

その場から全力疾走で離れた後、ルキアは目を吊り上げ説教を開始した。

「あんな事をすれば人が集まつてくるであろう！目立つな、と何度もいえば分かるのだ貴様は。今は万人の目に姿が映つておるのだ。人間に不審に思われたらどうする！？」

「あそこで人が集まつてきたのはほとんどテメエのせいだろうが。何なんだよ、あの気持ちの悪いしゃべり方は」

「気持ちが悪いだと？失敬な奴だな。これはな、わずか一日で習得した現世語なのだ。貴様も手本にするがよい」

「誰がするか、誰が。ああくそ。ちょっと走つただけなのに汗出てくるじゃねーか。義骸つて身体能力まで人間にあわせてんのか？」額に滲んだ汗を手の甲で拭いながら涼しい顔をして立つルキアに問い合わせる。

「つ、ああ。人間に不可能な動きでもしたらばれてしまうからな。特に貴様ときたらあつちへふらふら、ひつちへふらふら。これで動きが速ければ世話が焼ききれんわ」

ルキアは一瞬だけ言葉につまつたが憎まれ口と共にそう返した。馬鹿にされた、と感じた一護はもたれていた壁から背を離しルキアに向き直る。

「あんな、俺は確かに拳動不審だつたかもしだねえ。けどな、お前よりはましだつたつていう自信はあるぜ」

一護は珍しい現世の様子に感嘆の意を表した。それは現世に住む者達にとつては首を傾げる事だつたかもしない。しかしその横で自慢げに現世ガイドを行つていたルキアは事もあるうに観光地のバスガイドのように小さな旗を持ちスピーカーを持参して話すのだ。住宅地でどれだけ周りから人がこつそりと見ていたのをおそらくルキアは知らない。

案の定、ルキアは訳が分からぬ、といったように秀麗な眉を顰める。

「何を言つか。私の完璧な現世の溶け込みっぷりをちゃんと見ていたのか？」

「浮きつぶりなら嫌つて程見てきましたが？」

皮肉たつぱりに言い返すと、ルキアは小ばかにしたように鼻で笑つた。

「そう見えているつちは、まだまだということだ」

口元に哀れみを含んだ笑みをうかべられ、一護は思わず突つかかる。「つんだとっ！？」

「ほら、次へいくぞ。うまいクレープ屋があつちにあるのだ」が、ルキア簡単にあしらいコンクリートの詰められた歩道を歩き出す。

特に喧嘩をしたい訳でもなかつたので体に込めていた力をぬく。

・・・そういうば、前に一度セロガクレープという物をおやつに出来してくれたことがある。

生地の中にはいろんな果物が入つていてなかなかおいしかつた。

別に子供のように物で釣られたのではない。少し食べてみてもいいか、と気まぐれをおこしただけだ。

そう心の中で繰り返しながら一護は足早に先を行くるルキアを追つた。

人影がまばらになつてきた所で現れた桃色と淡いクリーム色を交互にペイントされた屋根。

ルキアはそれを見てとめるとうれしそうな顔で一護の方を振り向く。

「あれが私の行きつけの店だ。見た目は小さいが味は絶品だぞ」

「小さいつて・・・。お前、店の説明にそれはないと思うぞ」

「いちいち細かい奴だな。奢つてやるのだぞ。ありがたく思え」

「へえーへえー。感謝しますよ」

軽口をたたきながらクレープ屋に向かつ。が、その途中で少女の怒った怒鳴り声を聞き、足を止めた。

「はあ！？何で金なんて払わないといけないのよ。ぶつかってきたのはそっちでしょ！？」

声のした方向をむけばくすんだ色合いから染めたのだらうと推測できる金髪の男を筆頭とする三人組に一人いる少女のうち、黒髪の少女が啖呵をきつていた。

「はあ！？何で金なんて払わないといけないのよ。ぶつかってきたのはそっちでしょ！？むしろそっちが謝んなさいよ」

ぶつかってきた男達を怒鳴りつけているのは有沢たつきを止めようと織姫は小声で話しかけた。

「ねえ、たつきちゃん。あたし別に怒つてないし・・・」

「ダメよ！アンタがせっかく買ったクレープ駄目にしてくれた拳句、謝りもせず金払えなんて。あたし、こういう性根が腐ったヤツが大嫌いなの」

肩を怒らせる中学時代からの親友はどうやらひく氣は無いらしい。井上織姫は眦を困ったように下げた。仕方なく自分から交渉してみる。

「あの、いくら払えば・・・」

「織姫つ！！」

たつきには悪いが彼女のためにもじこで騒ぎは起こせない。

空手部の彼女には秋に大きな大会が控えている。何か面倒を起こして出場停止にでもなつたりしたら大変だ。織姫は鞄の中の財布を握り締めた。

男達はにやにやと笑っていたが、金額を口にした。

「十万だ」

「え！？」

「ちよ、そんなに！？」

織姫もたつきも予想外の金額に驚愕を隠せない。高校生の二人からすれば、十万など大金のカテゴリーに入つてくる。

「つるせえーな。この服のクリーニング代だよ」

金髪の男はクリームのついた觸體のシャツをつまんだ。

「そんな趣味の悪い服に十万は高すぎでしょ」

たつきの安い挑発に男の顔に血が上る。

「つむせえ！ 痛い目見ないと分かんないのかー…？」

「ほーほー。痛い目見させてもらおうじやないの」

「きり、とたつきは指の関節を鳴らす。織姫は険悪な雰囲気をどうにかしようとしたつきの服の裾をひっぱり逃げようとした。が、たつきは心配ない、と首を振った。

「こんなのは正当防衛！ それに試合に出られなくなるのが、アンタの楽しみにしてたクレープの恨み取つとかないと後悔するわ」

「たつきちゃん…」

拳を握り締めるたつきに申し訳なさそうに織姫はたつきの名を呼んだ。

「生意気な女だな。やっちまえ！」

月並みの台詞と同時に腰巾着らしき一人が殴りかかってきた。が、そここりのチンピラが空手全国大会一位の女子高生に勝てるわけなど無い。

あつさりと裏拳と膝蹴りをくらいノックアウト。

「口ばつかとはこの事ね。ほら、アンタもかかってきなさいよ」「くそ…！」

金髪の男は舌打ちし、にんまりと笑う。

逆境の中での表情の変化にたつきは怪訝そうに？を浮かべた。

それ理由はすぐに知る事となる。

「きやつ！？」

「織姫！？」

背後から聞こえてきた親友の悲鳴にたつきは田の前の男の事も忘れて振り返る。

その時に生じた隙を相手が見逃すはずも無い。組み伏せられ頭を硬いアスファルトに強かに打ちつけた。

「たつきちゃん！」

たつさに倒されたはずの男達に羽交い絞めにされつつも、織姫は必死に身を捩りたつさに駆け寄ろうとする。が、年齢と性別という壁が力の差となり現実は一歩たりとも動けない。

近くに通行人はいない。助けは期待できない。  
もうダメだ。そう織姫が瞳を濡らした時。

「ふべえ！？」

「がへつ！」

奇声と共に織姫の両腕を拘束していた二人が吹っ飛んだ。比喩ではなく、本当に。

「・・せっかく楽しんでたのに、テメエのせいで台無しだ」

怒りを低く抑えたような声で二人を殴り飛ばした人物は言う。

織姫の前に庇う様にでたその人は鮮やかなオレンジ色の髪をしていた。

「女一人に大の男が三人がかり？ふざけんな」

少年はたつさを押さえつける男を呆れた様に一瞥した。

「ほらこいよ。テメエの相手なんぞ俺一人で十分だ」「つの野郎！」

たつさから標的を少年に切り替えた男が飛び掛つてくる。

織姫は大乱闘を覚悟し固く目を瞑つた。しかし、予想に反し、聞えてきた音は鈍く深い一つだけ。

おそるおそる目を開ければ倒れ伏した男を少年が見下ろしている。

「なあ、アンタ。大人しく逃げ帰るか、このまま続けて病院行つて十万以上支払うか。

どっちがいい？」

声の調子から後者を選べば少年は実行するだろう、と予想できた。

男はひきつった悲鳴を上げ、仲間も置いて走り去る。頭を失った残りの二人は尻尾を巻いて逃げていった。

「さて、と。大丈夫だつたか？」

少年が心配そうな顔で振り向く。今までチンピラに向けていた声とは真逆の声色。

優しいブラウンの瞳が織姫を捕らえた、その瞬間。

彼女の心臓はひっくり返ったかのように一際大きく脈打つた。

拾参 街中（後書き）

織姫（街中で）恋をする、でした。

本当は彼女は出でこないはずだったんですけどひとつでも出でたくなつちやつて・・・。

結果こんなで本当に申し訳ないです。

誤字脱字、または一言でもコメントをいただけたら幸いです。

#### 拾四 案内（前書き）

祝！知らぬ間にお気に入りに登録してくれた方が百件突破！！  
これも全て皆様のおかげです。こんなダメダメな黎音ですが、応援  
してくださる方が居る限りがんばって書いていきます！！  
どうか見捨てず、最後まで応援して下さい。

飴色の髪をした少女が、ぽかんと口を開けてこちらを見ている。どうしたものか、と一護は今ながら困っていた。

勇ましく男達を怒鳴りつける黒髪の少女を一護はただただ感心して見ていた。

それが喧嘩に発展し、男達の人質をとるという卑劣な行為に我慢できなくなり飛び出したはいいものの。こんな派手な髪色をしていれば変に思われて当然である。

現に少女は一言も言葉を発せず、ただ瞬きを繰り返しているではないか。

「あ～・・、怪我ないか？」

とりあえず当たり障りの無い事を聞き、会話をしようとした試み。が、彼女は真っ赤な顔で赤牛の様にかくんかくんと首を上下に振るだけ。

どうしたものか、と考えていると黒髪の方の少女が服についた土を掃いながら立ち上がり一護に向き直った。地面に打ち付けた額が赤くなっているが、大事にはなっていない様だ。

「あんがと、助かったわ。あたしは有沢たつき。」  
「い、いい井上織姫ですっ！」

たつきが名乗ると、織姫も裏返った声で名前を言った。そして何故か敬礼。

「お、おう。俺はー」  
「一護っ！…」

言おうとしていた名を別の声で言われる。そして背に衝撃を受け、一護は前のめりにつんのめつた。

「何をしておるか、馬鹿者！私にクレープを買わせておきながら自分はどこかに行くなど、赦されると思つておるのかー？それに単独行動はとるな、とあれほどー」

両手にクレープを持つルキア。一護は衝撃の訳を理解した。

・・・足で背中蹴りやがつたな。

なおも言い募るルキアに一護は大人しく聞いてやるのが一番と判断し、黙つて相槌をうつ。

「・・あの～」

それを中断したのは織姫だった。

「・・毎さん、ですか？」

静寂

「つぶ」

ルキアが堪えきれず、ふきだした。

「い、いちごつ！？ 隨分と可愛らしくなつたではないか！？ はつははは！」

「笑うな、テメエッ！！」

一護が真っ赤になつて怒る姿は正に果物のそれで。ルキアはその様を見てまた笑い転げた。

「あはははははっ！！ 駄目だ、腹が痛くなつてきたぞ！」

「そのまま腹痛になつて寝込め！！」

一護は腹を抱えこむ様に笑うルキアに言ひ返すと、織姫に慌てた様に訂正を施す。

「毎じやねえ、一護だつ！ 一つを譲るで一護！ 「い」の方にアクセント！」

「は、はいーー！」

焦つて顔を近づけると赤面してがくがくと頷く。一護は訳が分からず首をかしげた。

・・・そんなに顔が怖いのだろうか？

どうやらあまり好い印象は受けていないらしい。気をつけなければ。

一護は鈍感であった。

ほんわかと温かい生地にひんやりと冷たい生クリームとアイス。色とりどりの果物。

大好物のチョコレートまで一緒に入っている。言ひ事なし。一護は満足げにクレープにかぶりついた。

「おいしいでしょ?」

得意げに胸を張るルキアの言うとおり、クレープは絶品だった。たつきと少しは一護に慣れたらしい織姫ももう一度クレープを買い、一緒に食べている。

「あとね、これに七味唐辛子とマヨネーズと茄子をトッピングするといいしいんだよ!!」

「いや。織姫、それアンタだけだから」

織姫の味覚にダメだしをしたたつきは一護とルキアの話した事（勿論、嘘）を纏めた。

「んじゃ、一人は親戚の家に遊びに来てて、この町の人って訳じやないんだ」

「ああ」

「その通りですわ」

また例のお嬢様しゃべりでルキアは微笑み、上品に小口でクレープを食べる。

それを一護が半眼で見つめていると、「なんだ。文句でもあるのか」と言わんばかりの眼力で睨み返された。それに片頬をひくひくと痙攣させながらもクレープをまたほおばる。

「ところで、この後何処行くが決まってるの?」

たつきの問いに一護は観光コースを定めているルキアを見つめた。ルキアはクレープから顔を上げる。

「いえ、特に行くべき所等は決めていませんわ」

「じゃあ今まで回ってきたところは何だつたんだよ」  
まさか適当とかいうんじゃない・・・と一護が勘ぐつているルキアは

品のよい笑みをうかべる。

「行きたかつたんですね」

「お前の好みのルートだつたのか！？」

「それが何か？」

「・・・いや、もういい」

開き直られ、一護は追求を諦めた。おいしいクレープをまた一口。

「じゃあさ、一緒に行かない！？私、いろんな所知ってるよーー！」

名案を思いついたばかりに織姫が両手を胸の前で合わせる。顔が満面の笑みで輝いていた。

さすがのルキアもこの提案には口づけもつた。

「いえ、しかしその・・・」

「でもさ、お前らにだつて予定とか都合とかあんだろ？迷惑かけるわけにはいかねえーよ」

目を思いつき泳がせるルキアに一護は助けの船を出す。それにルキアもしめたとばかりに乗り込み、大きく頷く。

「そ、そうですわっ！井上さんと有沢さんに迷惑をお掛けするわけにはいきません！」

「ああ大丈夫だつて！あたし等もこの後町ぶらつくか、ぐらいのプランしかなかつたし」

「地元の人人が居たほうが、穴場スポットとか見つけられるんだよー」「二人の申し出は純粹な好意からのものだ。ゆえに断りづらい。

「ですが・・・」

ルキアの困惑した表情にたつきは「嫌なら無理にとは言わないけど」と断りをいれる。

「この辺入り組んでて道とか迷つたら色々とやつかいだしさ。この町の人じやないなら尚更」

「いえ、まず一人ともこの世界の住人じやありません。などとは言えず、一護は曖昧に口端で笑つた。

「あのね、おいしい和菓子屋さんがあるんだよー」

「・・白玉はあります？」

ルキアが織姫の言葉に反応した。

「もつちろん！あそこのは玉、おいしいんだよー。」

「い」一緒にようしゃくして？』

あつむりと意見を翻した。『いのか、それで。

「もううんだよ！」

「じゃ、行こうか

「参りましょ」

「ここと笑いながら出発する二人組。いや、それでいいのか。

「ほらー護君、お速くー！」

もうここや。

一護はつむ事を放棄し、後に付き従つた。

移動する一護達を隠れて追跡する五対の目。

「・・・なんか、朽木の方が引っ張りまわしてません？」一護のこと

「何やつてんだ、ルキアのヤツ」

「俺はアイツと殺り合ってえ」

「ええ、今度は僕に譲つておくれよ。君は前きた奴等と楽しんだじやないか」

「いいからお前等、黙つて歩け」

田番谷の命令に義骸に入った死神一同、とりあえず返事をする。モデルの様に流行の服を着こなす乱菊は道の隅で壁に隠れるようにして進んでいく恋次に不思議そうに首をひねる。

「ちょっと、アンタそんな格好して何やつてんのよ

「いや、乱菊さん。前にテレビドラマで尾行してた刑事の格好を・・

そう弁解する恋次の格好はサングラスによれよれのベージュのロングコート。更に同色の帽子までがぶつている。コートの下のスース姿の方がまだましだ。

「だっさーー！」

「・・・阿散井、とりあえずそのマートを脱げ」

「おもつくそ怪しいぞ、恋次」

「美しくないね」

次々に言われ、恋次は泣く泣くコートを脱いだ。

「に、しても拍子抜けするぐらい何も問題を起こさないね、一護君は」

弓親は前方を眺めながら驚きを口にする。乱菊も「そうね」と同意を示す。

「そうね。てっきり演技か何かで朽木が騙されたんだと思ってたけど、案外本当に大人しい子なのかも・・・」

「何言つてんスか！そつやつて氣の緩んだ所で襲つてくるに決まつてます！」

前を行く一護の背を睨んでいた恋次が憤慨した様に怒鳴った。木刀を肩に引つ掛け歩く一角が興味なさそうに大欠伸をする。そして一同の真ん中を歩く日番谷に視線をやつた。

「なあ日番谷隊長、何での破面と戦つたら駄目なんスか？力で脅して吐かせたほうが速いし確実だと思つんですケド」

「・・・無理だ」

日番谷は迷いなく静かに告げた。それに乱菊に一護の危険性の可能性を説いていた恋次も耳を塞いでいた乱菊も呆れて一人を見ていた弓親も質問した一角さえもあっけにとられた。

「え、でもあんなガキ、負けるわけないですって」

自信ありげに恋次が鼻を鳴らす。日番谷はゆっくりと口を開く。  
「最上級大虚ヴァストローデについて浦原が話した事を覚えているか？」

「はい？」

脈絡の無い話に恋次は刺青が施された眉根を顰めた。

「ええ」と・・・すつごく強くて小型で少なくて・・・

指を折りながら乱菊は最上級大虚の特徴を挙げていく。

「・・・そして、仮面が剥がされた時は必ず人型に成る」

日番谷に告げられ、乱菊は ハツ と息を呑む。他の面々も顔を強ばらせた。

「護は 完全な人型だつた。

一同の脳裏にこの間現世を強襲した破面の姿と力がよみがえる。彼等は強かつた。しかし、もとは最下級か中級の虚である、と日番谷は結論づけた。

・・・もしも一護があれと同等か、それ以上の力を持つていたとしたら・・・?

「だとすれば・・・生かして捕らえるのは難しいかと」

進言した乱菊に頷く日番谷。

「戦いを好む破面が表面上だけかもしれないとはいえ友好的だなんてこの機会を逃せばおそらく一度とねえ。情報を引き出す機会もな。刀も身体機能も封じたんだ。わざわざ暴力でいかなくてもいいだろう」

「そこまで考えてたんスか」

恋次は目を丸くする。

不測の事態に瞬時に対応しただけでなく、それが後々プラスになるようと考え動く。さすが、天才児の異名は伊達じゃない。

隊長職につく人物の凄さを改めて実感しながら恋次は前方の一護の監視に戻った。

と、首をひねる。

「何してんだありや?」

その紅の視線の先には後退りながらぶんぶんと首を横に振る一護と詰め寄るルキアの姿があった。

「無理無理無理無理、絶つ 対に無理! ! !」

まるでその他の言葉と動作を忘れてしまつたかのように一護は拒否の意を言い続ける。

にじり寄るルキアから一步でも離れるためにまた一步、足を後ろに

すらしながら後退した。

「何を仰るの一護君。大丈夫、きせ・・貴方ならできますわ」  
一方ルキアは目をぎんぎらと光らせながら迫る。獲物を捕縛しようとするハンターの目だ。

助けを求めルキアの背後に視線を走らせたが、織姫は申し訳なさそうに両手を合わせ片目を瞑り、たつきはといつと「手伝おつか?」「とむしろ一護の捕縛にのりのりだ。

げんなりと氣落ちしながらも一護は何故かこうなるまでの経緯を事細かに振り返らなければならない気がし、それに従つた。

織姫とたつきに案内されながら一護とルキアは賑やかな町を物珍しそうに眺めていた。

といつてもルキアは先日からこの町に滞在しているので本心からそう思つてているのは一護だけだろうが。

「すみません、あれは何ですか?」

そのはずだったのだが、突如ルキアが小首を傾げ人差し指を伸ばした。白く細い指が何を指しているのかと辿つていけば、そこにあるのは至つて普通な住宅。

唯一相違点をあげるとすれば、その前に「うなぎ屋」という看板が出ている事だろう。

「あー、あれね。」「うなぎ屋」つていう何でも屋さんだよ

「何でも屋」？鰻屋じゃねーのか?」

「だから、「うなぎ屋」だよ

織姫はにこにこと笑う。一護は頭痛の訴える頭を押さえる。

「あー織姫?つまり一護は食べ物屋じゃないのかって聞いたわけで・

・・

たつきの通訳が入り織姫は慌てた様にはっと息を呑む。

「ち、違うの！うなぎ屋さんはうなぎ屋だけど鰻屋じゃないけどうなぎ屋さんなの！」

あ、ちなみに鰻にはマヨネーズとマッシュマロをそえるのが織姫流・・

「

「ああなるほど！つまり店名は「うなぎ屋」だけど鰻は取り扱っていないって事ねよく分かったわねえ一人とも？」

息継ぎをせず織姫語を解読・及び翻訳したたつきは一人を見る。その迫力に押され、一護達はかくかくと首肯した。

「あ、ああ・・・」

「・・・よく、分かりましたわ・・・」

『たつきの説明で』という重大な一言を一人は揃つて飲み込んだ。その心遣いにたつきは苦笑し目礼する。

「こここの店長 育美さんつていつんだけど、気もくで優しくていい人なんだ」

「ああ！？辞めるってどういう事だお前！－！ちょ、塾う？つざけんな、雇つてるこっちの身にもなれ・・・つてクソッ！切りやがった！」

「！」

二階から響いてきた怒声。その言葉使いの荒さに一同、沈黙。その間にも二階からは「根性無し」や「ゆとり世代め」といった辞めたバイトに対する罵詈雑言の数々が並びたてられる。

「「気さくで優しいいい人」・・・」

「普段はその・・・ねえ」

一護はたつきの言つた紹介文句を現実と比較するように口に出す。本人も多少現状とのズレを感じているせいか気まずそうにそっぽを向く。

「そうだ！せつかくだし皆で挨拶に行かない！？」

氣まずい空氣を吹き飛ばそうと織姫は提案する。一護とルキアは顔を見合わせた。

「「・・・あそこ」？」

二人が見上げた先には階段の上、罵声が降り注いでくるドア。

「あ、そうしようか！？」

今までまともな事を言つてきたたつきの手のひらの返しように一人は顔を引きつらせて彼女を見つめた。その食い入る様な縋りつく様

な目に耐え切れなくなつたのか、たつきは冷や汗をかきながら一人に耳打ちした。

いわく、こまでは近所に多大なる迷惑がかかつてしまつし、ただでさえ「育美さん」は母子家庭で世間からは風当たりが強いのでここで目をつけられると大変なそうな。

気を回しすぎなのはとも思つが大雑把に見えて細かに相手に気配りできるのが彼女の長所の一つなのだろう。

そんな事を思いながら一護は彼女の考えを了承した。ルキアも何もいわず頷く。

階でうなぎ屋邸を訪れる事はこうして決定したが、ここで問題が起つた。

上へ続く階段が狭く、二人横に並び上がっていくスペースも無い。先頭をきる勇者は育美よりハツ当たりの可能性が無きにしも非ず。そうして、ルキアは清らかな笑みで特攻（またの名を生贊、犠牲）に一護を捧げたのだ。

そして先程の「無理」「お前なら大丈夫」の言い争いに発展する。

「その根拠はどこにあるんだよっ！？」

「大丈夫ですわ、私が保障いたしますーー！」

「その保障に意味あんのかつ！？」

「店長さん、そんなに怖い人じやないよ～・・」

織姫が言つが、止まる事を知らない罵声により説得力にとても欠ける。

そういうするうちにしびれを切らしたのかルキアは一護の胸倉を掴むとぐいっと自分のほうに引き寄せた。

「いいから行け。分かったな？」

「・・・はい」

有無を言わせぬ眼光に一護はしぶしぶ返事をした。

階段を前にぐくりと唾を飲み込む。

「いや、大げさ・・・」

たつきが何か言つたが耳に入つてこない。一段、足をのせる。一段目に左足を。そして上がつていくうちに大分緊張は解れていった。

扉の前に立ち深呼吸。覚悟を決めインター ホンを押した。

「あ、一護！ そのドア・・・」

たつきが何かを口にした。が、一護がそれを最後まで聞く事は無かつた。

「はい、どちら様？」

バンッ と勢いよくドアが外側に開いた。当然、すぐ近くに立つていた一護は避けきれない。呻き声をあげながら赤くなつた鼻をさする。

「ん？ あら、めん・・・って派手な頭ね」

「うつせえ・・・」

声を張り上げて言い返してやりたいが、痛みに負け咳く様な大きさになつてしまつた。

「どーも育美さん」

たつきに声をかけられ育美はそちらに首を動かす。頭の後ろで一つに束ねられた艶やかな黒髪が揺れた。

「あら、たつきちゃんじやない！ 織姫ちゃんと・・・誰？」

「朽木ルキアと申します。どうぞよろしく」

ペコリ と余糀したルキアに続き、一護も頭を下げる。

「一護です。『一つ』を『護る』で一護つていいます」

「そ、じゃあ上がってって！ 今お茶淹れるから」

くるりとコーナー し店の中に入つていく育美にならい一護達も入つていつた。

拾四 案内（後書き）

お久しぶりです。区切りのいいところまで一気に載せたらこんなに長く・・・。

読みにくいですよね、ごめんなさい。

育美さん大好き！なんです。かつていい女性って憧れます。で、彼女が出たのは私の完全な趣味です。・・・石を、石を投げないでー！

感想、誤字脱字等はご連絡下さい。ではまた。

「ま、狭くて散らかってるけど、そこ等に座つとこで「  
育美はそつ言つて、一護達を招きいれた。じじんまりとして、中々  
好感が持てる部屋だ。

商売ことは第一印象が大事といつし、いうほど散らかつてはいない。  
ただ、電話の置いてある小さなテーブルの上だけ別世界だ。受話器  
は中途半端に外れ、メモを取るためにそばに置かれていると思われる  
用紙とペンは床に転げ落ちていた。

まるでそこだけ嵐が通り過ぎていつたかの様。  
何があつたのか大体想像のつく一護はあえて何も触れずに黙つてソ  
ファに座る。

ルキアもスカートを押さえ、そおつと腰掛けた。

「ね、いい人でしょ？」

真向かいに座つたたつきにウインクされ一護は苦く笑つた。

「ああいい人だな・・・。人の鼻つ柱をドアで潰そうとするぐら  
いには」

「あ

一護はまだほんの少し赤みの残る鼻を押さえる。ちよつび育美が奥  
から戻つてきた。

「ほいよ、お茶」

机の上に置かれた四本のペットボトル。

「そつちの二人もサントリーでよかつた?」

「へ?まあ・・・」

「かまいせんわ」

それを聞くならまずペットボトルを出す事を「よかつた?」ではな  
いか?

一護はそう思つたが黙つてキヤップをまわす。

「おつと、自己紹介が遅れたね。あたしは鰻屋育美。ここ何でも屋

の「うなぎ屋」の店長だ。よろしくね、ルキアちゃんと一護……

だつたつけ？」

確認のためか、問われた。ルキアは微笑を浮かべ肯定し、特に発音も間違つてないので一護も頷く。

「にしても見ない顔だね、二人とも。空座第一高の生徒じゃないのか？」

いえ、学校云々の前に人間じゃないんです、一人とも。お茶を啜りながらブラウンの瞳を思いつきり泳がせた一護にルキアはため息をつく。

分かりやすすぎると、貴様。

絶対嘘がつけない性質らしい。一護の新たな一面を知りますますルキアの中の「破面」のカテゴリーから一護は遠ざかっていった。

ルキアがそんな事を思つているとは露知らぬ一護は現世で商売をしている育美を物珍しげにじい・・・と見た。虚闇では商売人など絶対お目にかかることは無い。むしろ居たら笑える。

興味津々、けれど現世の人間が言わなそうな事は言わないように気をつけて。それとなく、自然に質問する。

「何でも屋」って・・・具体的に何するんだ？」

パツと明かりを灯したかと錯覚するぐらいに育美の顔が輝いた。「よくぞ聞いてくれた！！」

ばんつと一護の背中を勢いよく叩いた育美にあるのは、誇れる自分の仕事を知るうとしてくれる事への喜びだけ。悪意など欠片ほども無いのだろう。

・・しかし、叩かれたせいで飲んでいたお茶が氣道に入つてしまつた側としては苦しくて仕方ない。咳き込む一護に向けられる三対の同情の視線。

育美は気がつかなかつたのか、はたまた無視したのか流れるように何でも屋を語り始めた。

「困っている人を助ける正義の味方・・・いつしか人はそれを「何でも屋」と呼んだ！！」

「いや、金取るんだる」

「東西南北、依頼とあらば即参上ー・つなぎ屋店長・鰻屋育美！」

「それ、決めポーズ？」

びしつと片手を斜め上に突き出し、育美はどじかのヒーローの様に動きを止めた。

そのまま立て板に水を流すかのじく何でも屋のすばらしさと魅力を語りだす。

「話ふんなきやよかつたかも・・・」

どじやらこのまま当分続きそうだ。一護はペットボトルにキャップを回しはじめた。

どじまでも広がる白砂。響き渡る声。

「いつごが現世に行つたっスかー！？」

眼球がこぼれんばかりに目を見開いたネルにしなだれかかるようこルベルゼが抱きつく。

「そうよ～・・・。悩んで悩みぬいて後を追つかけようとしたらね、ウルキオラが」

『貴様は謹慎中だ。一護は任務で特別に藍染様に外出許可を出していただいたがな』

「つて言つのかー！！」

「はあ・・・ウルキオラ様もなんていうか・・・ゆーずうがきくのは藍染様といつごにだけつス」

「あんの鉄仮面！石頭！蝙蝠！」

その他一通りの悪口を思いつく限り並び立て、ルベルゼは大きくため息をつき、白魚のような指先でネルの仮面の割れた部分をなぞりながら口先を尖らせる。

「だつて・・・一護ちゃん空座町行つた事ないのよ？虚夜宮でもた

まに迷うのに・・・。

道に迷つても誰にも聞けないし・・・」

一護が実際にその事態に陥り、死神に道を聞きあまつさえ現在進行形で道案内されていいるとは知らないルベルゼ。知らぬが仏。

「もし、死神にでもあつたりしたら・・・ああああ！！」

その死神と一護が現在進行形で行動をともにしているとは知らないルベルゼ。この調子だと、知つたら発狂するかも知れない。

「でも、一護ちゃんなら・・・でも死神に餌付けとかされたりして和んでたり！！」

いや、まさか。あまりにも突拍子のない妄想にネルは首を振る。しかし、一護がお菓子をおいしそうに食べながら死神と仲良く談笑する光景が瞼の裏にありありと映し出され、その考えを改めた。

・・・いつごならやりかねねーっス。

その一人の心配事が現実になつていると二人が知るのはいつになることやら。

「・・・このこと、セロは知つてるんスか？」

「もちろん。ってか最初に知つたのアイツだし」

「・・・まあな」

「「はうあー!?」」

突然のご本人登場に一人は飛びあがつて驚いた。セロは慣れた手つきで盆の上からカツプ五つあるうちの三つを下ろすと紅茶を注いでいく。ふんわりといい香りが白い湯気とともに漂う。寸分狂わず同量ずつカツプを満たしていく紅茶にルベルゼは董色の瞳を細める。

「随分と落ち着いてるじゃないの。アタシよりも一護ちゃんとは長い付き合いだつてーのに薄情なもんね」

「付き合いが長いからこそだ。一護は強い。俺よりも・・・そしてお前よりも」

セロは長い前髪から黒水晶と白黒反転したオッドアイをルベルゼに投げかける。

「余計な心配をするよりお前はそのなまりきつた剣の腕を磨いたら

どうだ？」

「どうかしら？ アンタの首を落とすぐらいならできると思ひけど？」  
ふんつ トルベルゼは小ばかにしたように鼻で笑う。険悪になつて  
きた雰囲気にネルは身を震わせテーブルについた。お茶でも飲んで  
いよう、と考えたのだ。

いそいそとカップに手を伸ばすネルにも気づかず、紫と黒が睨みあ  
う。

「だいたい・・、いつも思つてたんだけどアンタ一護ちゃんに甘  
いのよ！！」

「俺は一護の意思を尊重したいだけだ。お前は過保護が過ぎる」  
「あんの天然鈍感ちやんにはあれぐらいでちょうどいでの。意思を尊  
重つて何？ それじゃ一護ちゃんが死ぬつて言つたら黙つてOKだす  
わけ？」

「それとこれとは話が、」

「一緒よ！」

まるつきり子供の教育方針で食い違ひぶつかる親だ。

先程までの一触即発の空気が和らいだわけではないが、少なくとも  
ネルは体の震えを止め、落ち着いてカップに口をつけられた。と、  
顔に驚きをあらわにする。

「・・・濃い」

いつものまろやかな味は無く。白の陶器のカップに入つた紅茶は濃  
い紅みをおび、舌には茶葉を浸しそぎた時特有のまとわりつくよう  
な苦味が残る。

セロにあるまじき失敗だ。それが意味する事にネルは「なーんだ」  
と一人納得したような、呆れた様な顔でカップの底を見る。

「・・・なんだかんだ言つても、一護のこと心配してるんじゃない  
つスか」

言い争うセロとトルベルゼを見る。お互い刀を部屋に置いてきている  
ため、抜刀沙汰にはなつていながら見えない火花が見えると錯覚す  
るぐらいにお互い敵意をちらしていた。

普段無口なセロが饒舌になり、敵意をむき出しへにするのは一護の事だけ、トルベルゼは気づいているだろうか？いや、変なところで鈍い彼女は絶対に気がついていない。

「他から見れば、似たもの同士なんスケビ」

違いは一護の意思を尊重するか、安全を優先させるかだけ。それにしたつて一護のことが大切だという思いからという事には変わりないのだ。

「いーいー！？」一護ちゃんは大切に大切に箱入りで育てるべきなの！？」

「子供の自由を制限するのは教育上よくない。あくまで自由な発想と行動を！」

「あほんだら！わからずや！」

いや、あんたらどこの保護者っスか。

ネルはずすと茶をすすつた。ほろ苦い味が舌につぱいに広がつた。

拾伍 御茶（後書き）

久しぶりに虚闇の皆が登場です。ちなみに一護に出会った順番は、「彼女」 ネリエル組 セロ ネル組 ルベルゼ、と考えています。余談ですが「彼女」の名前がよつやく一つぐらいまでに絞り込めました！（えー）

いつ登場するのかは神のみぞしる！違った、みぞしる！コメントいただけたら更新の励みになります。

「ん・・・？」

一護は天井を仰いだ。何だかどこかで誰かに噂をされている気がする。

「それでなー、一番苦労したのはやつぱり・・・って聞いてんのか

一護

「あ、ああまあ」

「怪しいな。ま、いつか。で、その依頼はまず依頼人が無茶苦茶で

一

一体何時まで続くのやう。むしろよくそこまで話し続けていられる  
ものだ。

空になつたペットボトルを机の上に置き、一護は相槌をうつ。ルキアは隣に座る織姫と談笑していた。たつきは壁にかかつた時計に視線を運び、ため息を吐く。

「育美さん。そろそろ、一人を別の場所にも案内したいんだけど」「ん？ああ、そうだっけか。悪かったね長話につき合わせて」

「いや、俺もおもしろかったし」

確かに延々とどこまで続くか分からぬ話であつたが、内容がおもしろくなればとつぐに席を立つている。育美は中々の話し上手であった。

「そう言つてもうえとつれしいよ。何かあつたらこのうなぎ屋にまかせな！！」

育美のワインクとともに話は終り、一回はうなぎ屋を後にした。

うなぎ屋からでた一護達をどうしても案内したいところがある、と織姫が先導をかつてでた。

「いっしつちーー！」

ばたばたと大きな建物の前に立ち、手招きする。一護はそれが何か分からなかつたが、たつきは大きなため息をついた。

「織姫え。あんた、ゲーセンってさあ・・・」

「ほらほら、皆早く早く！！」

ぱたぱたと走つて入り口に向かう織姫。たつきは困つたような顔で一護とルキアを振り向く。

「ごめん、いい？」

「かまいませんわ」

一護が答える前にルキアはやわらかい笑みをたつきに返す。それにほつとした素振りを見せながらたつきは織姫の暴走を止めようと駆け出した。

一護が微笑を振り撒きながら手を振るルキアにそつと問いかけた。  
「あ、あのさルキア。「げーせん」ってなんだ？」

ルキアはいつもの古風な口調に戻る。

「「ゲームセンター」の略だ。たくさんのゲームが置いてある」  
そういうえば、と一護は記憶を辿る。確かルベルゼが「トランプ」という物を「現世のゲーム」といつていた。ルールは複雑だったが、やつてみるとなかなかに楽しかった。一護は期待に胸を膨らませる。  
「なあなあ、それってトランプっていうのもあるか？」

「分からん。が、囲碁や花札もあるかもしれないな」

傍から聞けばあつてはいるのだが少しずれた会話をしながら、ガラス張りの入り口の前に立つ二人。すると、一護達を歓迎するかのようにガラスが真ん中で左右に分かれ開いていく。誰かが動かしているのでどうか。一護はそう思いこちらを凝視している人物を見つけ出そうと目を辺りに走らせるが、今入ってきた二人を注目する者は一人もない。

「人が近づくと自動で開くのだ」

その場できょろきょろと周りを見回す一護をみかねたルキアが説明をした。

チカチカと様々なるところで色とりどりに光るライト。鼓膜が破れるかと思うほど大きな効果音。今まで無音に近い世界で暮らしてきていた一護にとっては歩いてきた道々ですら賑やかで目が回るようだつたといふのに、これでは失神なのだ。

「あ、こつちこつちーーー！」

手が数本見えるほどのスピードで織姫は手を振る。

おぼつかない足取りで進む一護を引っ張りルキアは織姫の方に向かつた。たつきが目焦点が定まらない一護の様を見て小首を傾げる。

「あれ、一護どうしたの？」

「ひ、人酔いしたみたいで・・・」

ルキアのフォローにからうじて頷く一護の顔色をみてたつきは目を見張った。

「ちょ、本当に大丈夫・・・？」

「結構ギリギリ・・・」

力なく笑う一護の背を容赦なく引っ叩きルキアは微笑む。

「治りました？」

「治るかあ！！」

「でも元気になりましたわ」

「いや、怒りで一時的なものじゃないかと」

たつきの冷静なつっこみにより一護は自分の体調を思い出した。

口を手で押さえる一護。とそこに向こうから駆け戻ってきた織姫がバシンッ と勢いそのままそばに居た一護の背を景氣よくしばいた。

「ほらほらあ、皆はやく来なつてばーーー！」

「がはつーーー！」

「い、井上さん・・・」

「織姫、それとどめーーー！」

「えーーうそ、ごめんねーーー！」

白目をむく一護をあわてて介抱する二人。

その甲斐あってか一護は深呼吸を大きく一つすると、「もう平氣だ」

と口元から手を外す。まだ若干は青いものの大分頬に血の気が戻ってきたところで織姫が皆の腕を取りぐいぐいと奥へと引っ張つていく。

「さ、あっちはプリクラあるの！一緒に撮ろうよ！」

「ふ、ふりくら？一緒にとる？？」

「何々？」護。アンタプリクラも知らないの？」

箱入り息子？等とたつきに茶化され一護は笑い飛ばせなかつた。脳裏にルベルゼとセロの顔が浮かび上がる。過去の映像も同時に再生。

『一護ちゃん、ダメよ！そんなにたくさん物を持つちゃ！あ、危ない！』

『・・・本五冊持つただけだぜ？』

『・・・一護、別にわざわざ茶を淹れる手伝いをしなくてもいい・・・』

『んでだよ。味が落ちるとかいうのか？』

『いや、火傷の危険性がある』

『・・・お前、俺をバカにしてんのか』

それでも懇切丁寧に話せばセロは納得してくれるがルベルゼは一筋縄ではいかない。

虚閃を放ちそうになるところを武力でもって押さえ込み、もはや小規模戦闘に発展するのだ。

「箱入り息子」。一護は言われた言葉を頭で復唱し、疲れきった笑みを顔に浮かべた。

・・・なんか、否定できない。むしろピンポイントで言い当てられてる。

勿論、彼等とは血など一滴たりとも繋がっていないのだけれども。そんなことを一人考えているとたつきに何事課囁かれていた織姫が頬を赤く染めつつも手をふるふると緊張で震わせながらも差し出しきる。

てくる。

いまさら何故そんな事で震えるほど緊張しているのだひづ。 そうち、  
顔か。 また怖くなつっていたのか。 一護は眉間に寄つたしわを伸ばそ  
うと指で眉間に摘まむ。

「あ、あの一護君。ええつと、もしよければこのわたくしめとその。  
・ふ、二人で・・・

「何だよ。 言いたい事あんなら早く言えよ」

「織姫、織姫」

たつきが胸の前で両手を握り締め「ガンバ！」と小声でホールを送  
つてゐる。

何への応援かは知らないが織姫には伝わつたようで力強くガツツポ  
ーズをたつきに返す。

「い、一緒にプリクラ撮りませんか！？」

「おお、いいぜ」

「ひょえええええ！？」

一言即答すれば奇声と共に飛び上がる織姫。 顔には安堵の色とつま  
くこきすぎたことからからか、僅かな困惑。 自分から言つておいて何をそこまで驚く。

一護は内心首をひねりながらもほら、と近くにあつた「プリクラ」とピンクの文字が印刷された暖簾もどきが並んでいるフロアを指差す。

「ほら、あれだろ？ 早く撮りつけ、皆で」

「・・・ふえ？」

「いや一緒に皆で撮るつって、お前も今そう言つただらつへ・・・

「あ、う・・・うん」

意氣消沈といった感じで織姫はどんよりとした重い溜息を吐き出した。

たつきがその肩を優しく抱いて慰めている。

「アソシ、想像以上に鈍いわ。持久戦よ」

「う、うん。たつきちゃん、わたしがんばるね！」

そんな事を一人がぼそぼそと声を潜め話しているとは露知らず。

一護は一番手近にある「プリクラ」と書かれた布に似たものを興味深々でめくつてみる。

なにやら四方を布のようなもので囲つただけの簡易な小部屋だ。その一辺には壁から突き出た黒く光るカメラのレンズと何やら陽気な音楽やらが流れ出る画面があつた。

ピンクと黄色の可愛らしい丸文字が画面に映つていて、やたらカタカナばかりが羅列していた。

「ふむ、これか」

ルキアも不思議そうに画面を見る。

「つて、撮つたことあるんじゃねーのか?」

「たわけ! そのような暇が死神にあるわけ無かるう。遊びなど以外だ。ましてや、こんなわけのわからぬ機械だらけの所になど誰が好き好んでくるものか」

「・・・言つてることとやつてる事、間違なんスけど  
きらきらと田を輝かせ、画面に笑みをこぼし、カメラのレンズを片目を瞑り覗き込むルキアは誰がどう見ても楽しんでいる。  
(ひょつとしてこいつ)

一護の脳に一つの疑惑が過ぎつた。

、案内とか言つて、本当は俺をだしにして遊んでるだけなんじゃ。  
・・?

「いや、まさかな・・?」

「何がよ?」

一護がルキアへの疑いを振り払つているとたつきが後ろから復活した織姫と肩をならべこちらに来た。

「これで撮ろつか。よし、入つて入つて~」

「ちょ、え、ここ入るのか!?」

「何、ホントに初めて? 大丈夫大丈夫、痛くないから。多分」

「ちょ、最後の一言なんだ!?」

からかわれてるとも知らず一護は顔を青ざめさせた。

「お、俺やつぱり遠慮して・・・」

「ここまできて何寝ぼけたこと言つてんの。ほひ、すぐすむからー。」

「あ、撮ろう撮ろう！」

「楽しみですわ～。ほほほ・・・」

「ルキアっ！？ テメエまで・・ちよ、こらまでひつぱんなー。」

三人がかりでの引っ張り込みに一護は敗北を喫した。

カメラのフラッシュのたびに一護の悲鳴じみた声が響いてきた事実をここに記す。

手にされた一枚の小さなシール式の写真の数々。そのうちほとんど一護は驚いた顔をしていたり、ルキアやたつきに無理やり首に手を回されていて迷惑そうにしている顔だつたり。

よつするにまともな顔をしている作品が一枚も無いのだ。

まあ、もとより眉間にしわをよせた仏頂面なので気にすることも無い。

そう結論を弾き出した一護は横に並んでいたはずの頭一つ分以上下にある黒髪が姿を消しているのに気がつき、前へ進む足を止めた。後ろを歩いていたたつき達を振り返るとこの間にやら立ち止まり、織姫の持つ先ほど撮つたプリクラを見ている。三人ともだ。そんなに気になる写真等あつただろうか。さんざん見てきた自分のプリクラをもう一度確認するがどれもこれも見飽きたものばかりで目新しい発見は無い。

不思議に思いつつ一護は三人が固まつて立つているとこらまで戻り、身長差を使って上から覗き込んだ。

が、皆の注目を集めている写真に拍子抜けしたように眉間から力を抜く。

「なんだ、これが」

にっこりと笑う織姫。ピースサインを画面に突き出すたつき。ルキ

アは猫をかぶつたままおしとやかに口に手を沿えていた。一護は相も変わぬ仏頂面だった。

「いや、あたしらもそう思うんだけどね・・・」

「井上さんが・・・その・・・」

言われてみれば食い入るようこそそのプリクラを見つめているのは織姫唯一人。

頬が赤いのは熱でもあるせいか。

「ま、アンタが一番まともに映つてるヤツだから、気持ちは分からなくは無いんだけどね」

「は? 何で俺が関係していくんだよ? それにその写真だつて笑つてねーし

「甘いですわ。『恋は盲田』と昔からいってました」

「『鯉』? あれって目が見えねーのか?」

「・・・ああ、うん。やっぱ勘違いしたか『ノノヤロー』

「鈍感もここまでくると病気ですか」

はああ・・・とつかれた二人分のため息。一護は二人を見比べ、肩を竦めるしかできなかつた。

## 拾陸 写真（後書き）

久しぶりの更新なのに話が進まない・・・。趣味を思いつきり入れてるから仕方が無いんですが・・・。  
次回は少しぐらい進展させたいです。  
コメントありましたらお願いします。誤字脱字もお知らせしてください。

川のせせらぎが鼓膜を震わせる。水面に乱反射する日の光が眩しくてブラウンの瞳を無意識のうちに細め。しかし見続ける。一護はこの場所に案内してくれた織姫の方に礼の意を伝えるため振り向き呆れた。

「まだそれ見てたのか？」

「あ、あはははは・・・」めん

「いや、別に悪いとは言つてねーけど」

プリクラで撮られた小さな写真を両手でしつかと持つ織姫はこくんと頷くとまた写真鑑賞を再開する。

・・・いや、別に悪いとは言わないんだけどさ。

一護は苦笑し写真を穴が開くほど赤らんだ顔で見つめる織姫から川面に視線を戻した。

日光を受け宝石のように輝くそれらを視線をそりがす記憶に刻み込むように一步も動かず。

ただ何をするでもなく、じい・・・と見ていた。

「・・・アーッ、何してんのよ一体」

川を見つめ微動だにしない一護に業を煮やしたか、たつきはその肩を叩こうと一步近づく。

が、その手は白く華奢な手の意外なまでの強い力に止められた。

「朽木さん・・・

「駄目、ですわ」

多少とはいえ一護の事情を知るルキアにはほんの少しだが彼の心情を「想像」する事ができる。

虚闇、という所がどういう場所なのかはルキアが正確に知る術は無い。だが、「死後の死んだ世界」と一護は以前言い切った事がある。生が欠片ほども感じられない夜の世界だ、と。

ならば生と光に溢れた現世に来て、一護は何を思つのだろ？

驚き、憧れ・・・もしくは羨みか、それとも妬みか。

けれど、どれを抱こうと最後に行き着く感情はおそらく、

### 哀しさ

「悲しい」ではなく「哀しい」。心が痛むのではなく、ただ切ない。

それはこの世界に留まることを許されないからか。

あるいはこの世界に生きられないからか。

それともこの世界を敵としなければならないからか。

優しすぎる一護の胸を苛むのはもつと別の何かか、あるいは全てか。

ルキアには分からぬ。分かることは今はそつと見守るのが一番だ、という事。

だからルキアはたつきの手首を掴む。

「駄目ですわ、少なくとも今は」

そんな言葉と一緒に眉根をよせ、困ったような表情で笑みを見せた。

きらきらとゆれる」とに光は形を変えていく。たまに光の加減で七色が見えたりすると宝物を発見した気分になった。見ているだけで、暖かい気持ちになれる。

(これが、光 )

『ねえ、「光」って知ってる?』

いつか「彼女」が言つていた。現世に赴くたびやつてきて、仕入れたばかりの知識を一護に得意げに披露する、ぐだらなくも幸せな一時に。

『あれいでやうやうして、あつたか~い気持ちになれるのよ』

「本当だ・・・」

やはり、「彼女」は嘘をつかない。ただ一度を除いては。

「本当だつたよ、マーラ・・・」

今は「き保護者役に立てるよひー」護は蒼穹を見上げた。

ふらり、と。特に何の理由も無く一護は河川敷に下りた。強いてあげるならもつと近くで水面を見たかったから、だろう。  
じゅりい 靴の下で小石や砂利が小さな音をたてる。その小さな音に続いて別の音が耳元を通り過ぎる。落下後に聞こえた小さな水音。連鎖するよう一護は、また一つと地面にできる水のしみた円。

「・・・雨?」

あんなに晴れていたのに。一護は空を見上げもせずそのままへ。

雨は嫌いだ。マーラが死んだ日も土砂降りの雨の日だった。

雨音は無力だった自分を責め、なじる。雨は体温を奪い、過去を想起させ涙を奪う。

無論、泣く資格なんて、無いのだけれど。

哀愁を漂わせた吐息を吐き出す。と、視界を癡のかかつた長髪の茶髪が横切る。

「マシ、・・・!?

今まで考えていた「彼女」とちくりな後姿に名を呼びかけるが、途中で口を紡ぐ。

マーラの髪は亞麻色。もつ少し黄がかっていたはずだ。それに一瞬見えた横顔はまったくの別人。

「・・・何やってんだ 僕

ハツ、と自嘲の笑みをこぼす。

傘を差した女性は微笑みながら斜め下の「誰か」と喋っている。そちらに視線を移した一護は眉を顰めた。そこだけほんやりと白い

靄がかかり、見通せない。何だといつのだろ？。

「あの、すみません」

気になり呼び止めたが女性は背を向け歩いていく。

無視か、無視なのか。

初対面とはいえあまりの態度に一護は米神を引き攬めさせその肩に手を伸ばす。

「すいませんけど、少し話を…」

（あれ？）

傘を避け横のほうから女性に手を伸ばした一護は「やうこえぱ」と今更ながら気がついた。

、何でこの人、傘持ってるんだ？

雨はさつき、突然降り出したのに。

不思議に思いつつも一護は伸ばした手を肩に置いた。

途端、電流のように足先から脳天まで激痛が走りぬける。同時に頭の中で展開される数々の映像。

「・・・・・ツ  
……………！」

それが何なのか見極める前に、一護は頭に襲ってきた痛みに耐え切れず。

声にならない悲鳴を上げ、意識を手放した。

グラリツ　と。

何の前触れも無く河原に立っていた一護の身体は傾いた。

「一護つ！－？」

ルキアは草の生えた土手を一気に駆け下りる。側に膝をつき名を何度も呼んだ。

冷たい砂利の上に崩れ落ちた一護は目を固く閉じ、ピクリとも動かない。

血の氣の引いた顔を目にすれば頭の中に反響する声。

『ごめんな・・・せつかつたる』

違う。

ルキアは嫌な予感を頭から追い出すように唇を噛む。痛みが神経を伝い脳に届く。

それにほんの少し冷静な部分が生まれた。

一護は一護だ。あの人 海燕殿では無いのだ。  
勝手に重ね合わせて不吉な想像をするのは止めり。

大丈夫、助かる。助けてみせる。

「一護！？朽木さん、一護は！？」

「、大丈夫ですわ」

駆け寄ってきたたつきと織姫に笑いかけ、ルキアはスカートを掃いながら立ち上がる。

うまく、笑えているだろうか。

「実は一護君、病氣がちでつい最近まで入院してらっしゃつてたんですね。

今日は退院祝いもかねておじ様のお家に足を伸ばしたのですが・・・

咄嗟に以前ドラマで言っていた台詞を引用する。

「そりだつたの？」

たつきは目を見張り、織姫は一護の顔を心配そうに覗き込んだ。

「今、迎えを」

「迎えに来た」

突然響いた声に驚愕して二人は土手の上を見る。そこにいるのは銀髪の少年。

「ひ、日番谷隊長！？」

「た、隊長？」

ルキアの口から出た称号になじみの無い一人は顔を見合わせた。

日番谷がくいと顎を動かすとスースを着た幼馴染が「何で俺何ス  
か・・?」とぶつぶつ文句を言いながら降りてくる。

「恋次！？貴様まで何故・・・」

「みんな来てるわよ、朽木」

涼やかな声と一緒に乱菊が姿を見せた。こちらは最新流行の服を見事に着こなしている。

その後ろからシンプルなTシャツを着、木刀を弄ぶ一角とこれまた個性的に服を着こなす弓親が隣に立つ。

「皆様・・・どうして・・・」

「ま、いろいろ心配でついてきちゃったのよ」

肩を竦める乱菊。恋次は一護を背負い、立ち上がる。

「おら、行くぞルキア」

「あ、ああ・・・。有沢さん、井上さん、今日は本当にお世話になりました」

「へ？いや、別に」

「わ、私たちも楽しかったよ・・・」

ルキアの言葉遣いの切り替えに驚きつつ、二人はルキアにつられ、深くお辞儀をした。

そのまま先に土手を上がった恋次の後を追う。

その足を止めたのは振り絞るように出された一言。

「ま、待つて！・！」

ルキアが斜面の途中で振り向くと織姫がまっすぐに見つめ返していた。

「ほ、本当に今日楽しかったから！だから、もし迷惑じゃなかつたら、

「

「また一緒に歩こうね！」

ルキアは予想外の事に言葉を失う。織姫の横からたつきも言った。

「いいね、それ。一護にも伝えといてよ」「今度はうまく笑えるようになつとけよ」つて

次回があると信じて疑わぬ一人にルキアはやわらかい微笑をうかべた。

「はい、必ず」

拾漆 哀愁（後書き）

今回は少し暗めの話・・・と思つたんですが最後でちょっと変更。いやー、私シリアルっぽいの書けませんわ（断念）。ところでついに名前がでましたオリキヤラさん！マリーとマーラで迷い最後はコインの裏表で決定したマーラさん！

マ「・・何、その決め方」

黎「大変だったよ、いやホント」

ル「お取り込み中いい？」

黎「おや、ルベルゼさん」

ル「あたしもそんな感じで決められたの？てかあたしらのフルネームいつ出んのよ」

セ「・・気になる」

黎「セ口まできたの？」

ル「こ・た・え・な・さ・い（黒微笑）」

黎「・・・（冷や汗）ええ～と。てきと・・」

ル「殺ス」

セ「加勢する」

マ「私も」

黎「だあーー待つて待つてジョーク！ルベルゼの方はイメージが先にできてそれにぴったりの名前を！マーラは真咲さんに似た名前にしようどー！」

セ「・・俺は」

黎「・・サラダの中の影の薄い野菜にちなんで」

ル「それ、セ口リ？」

セ「・・（無言で抜刀）」

黎「ふふふ、無駄だよ。君の帰刃はまだ名前を決めてないから解放は・・」

セ「・・普通に斬るだけなり・・・できぬ」

黎「へ、ストップ！降参ー、や、わやああああ・・・」

ル「あの馬鹿」

一「あんな作者を見限らないで」」まで読んでくれてサンキューな

ル「あら一護ちやん来てたの？」

一「おう。感想なんかあれば送つてやつてくれ。いつも感激して泣

きながら見てやがるから」

ル「それもなんか不気味・・・んじや、これからも応援よろしく」

マ「それじゃあ、また次回だ」

## 拾八 摺心

誰だ・・・?

『・・・』

笑つて頭上から差し出される掌。「笑つてゐる」と分かるのに顔が見えない。

『たり前じやー』

雨音がノイズのように女性の声を遮る。

碌に何を言つているのかなんて分からない。けれど、一護は満面の笑みで迷わず手をとる。体は他人のもののように勝手に動く。見えて認識はできるのに指一本干渉できない。映画を見る観客のよつた心地で一護は女性の手をとつた。ぎゅ、と女性も手を強く、しかし優しく握り返す。一護はまた笑い、ぶんぶんと繋がった手をはしゃいだ様に前後に振る。

その手は、普段の手よりもずっと小さかった。

敷布の上に寝かされた一護の顔は大分血の気を取り戻したもののがまだ青白い。

そつと起こさぬ様に音に注意して襖を閉めるとルキアはまっすぐ浦原の居るであろう部屋に直行する。そこに、彼は居た。

「・・・一護は大丈夫なのだな」

開口一番に確認をとるルキアの眼光はいつもよりも険しい。浦原は腰掛けるように田で促し、自分も座る。

「一応は、としか」

「一応、だと？」

噛み付くような口調でルキアは浦原の言つた事を繰り返す。

「おileルキア、」

「恋次、すまぬが黙つてくれ

おそらくはなだめの言葉をかけようとした恋次を遮り、ルキアはピシャリと言い渡す。

「どうこうことなのだ、一体」

「・・・見たところ体に異常はありませんでした」

「ならば何故、」

「破面の健康な状態といつものができるこう状態なのか、そもそもそこが分からんスよ」

言われた事に忘れていた事実を思い出す。

一護は破面なのだ

「一応、アタシ達を基準に調べさせてもらつた結果、異常はありませんでした。

けれども、もしそれが異常だとしたら、」

「ぐくり、と唾を飲み込みルキアは口を開いた。

「・・・調べられるか？」

「手は死くします。なに、破面つて本を正せば虚。虚なら昔、散々解剖と研究を

「するなよ・・・一護で」

ルキアに詰め寄られ、浦原は冷や汗をながしながら「しませんしません」と首を横に振る。

「ただ、昨日も義骸採寸の時に取らせていただいたデータを今度はもつと正確に採取させていただきますが・・・」

「むう・・・」

腕を組み唸る。が、こればっかりは仕方が無い。

マッドサイエンティストに一護を委ねるのはいささか・・・とかかなり避けたいのだが、腕は確かだ。

そう結論をだしたルキアは不承不承だが一護のことを浦原に頼んだ。

「なにアイツなんかに情かけてやがんだ」

浦原が立ち去った後、部屋に残った恋次は咎めるような眼差しでルキアを見する。

「・・・その「なんか」に本氣で突っかかつていつたのはどいつだ？」

昨日の恋次の行動を引き合いでだし、言い返す。

返答につまつた恋次はもじもじねていたがルキアはとりあう事無く湯飲を持つ。

「・・・分かつてんだるうな。アイツは

「破面、だらう？」

よどみない回答など予想していなかつたのか、恋次は面食らつた顔をした。

「分かつてたか。てつきり俺は忘れてんのかと思つたぜ」

「いや、忘れていたよ。先程、浦原が言わなければ思へ出せなかつた」

正直に告げ、煎茶に口をつけた。朽木家で出るものよりは安物だった。

困惑したように眉を寄せ、赤髪をゆらし恋次は尋ねる。

「どうしたつてんだよ、一体。まさか海燕さんとアイツを重ねてんじゃねーだらうな？」

ルキアは答えず茶をすする。無言を肯定と受け取ったのか、恋次は大きくため息をついた。

「あのな、確かに顔はよく似てるわ。でもアイツは破面だ。どいつも本性は

フツ ルキアは鼻から息を漏らすよつて小さく笑つた。その反応に恋次は口をつむぐ。

「・・・最初はそう思つてた。「顔は似ているが、それだけだ」とな

けれど、それだけではなかつた。

「……信じられるか？あやつ、私と話しあつためと言つて刀を捨てたのだぞ？」

初耳だ、と恋次の驚くあほ面に含み笑いをこぼしながらルキアは続ける。

「それに道が分からんと困つた顔をして私に聞くのだ。」「……はどこだ」とな。

ペラペラと情報は流すし、呆れて心配してやれば「優しい」と言つてくるのだ

まだあるぞ、トルキアは指をおる。

「歩いているところちらに気を使つて速度を合わせるし、はしゃいで子供のようだと思えばたまに妙に大人びて落ち着いてある」

ルキアはオレンジの少年を思いだす。ぶつきらぼうだが優しい彼を。

「……重ねていた。その性格まで似ていたのでな。

しかし、私はいつのまにか一護を「海燕殿」から隔離し「個人」として認識はじめていたようだ

それがはつきりしたのはつゝさつき。一護が何の前触れもなく倒されたとき。

初めて「一護は一護」とはつきり思つた。「海燕殿とそつくりな破面」ではなくつた。

「……重ねてしまつよりも、まずい事をしてしまつたようだ」

重ねたなら、まだわりきれる。「あの人とは別人」と。

けれどルキアは「一護」という「個人」を認めてしまつた。

「……ルキア」

静かに恋次は問いかける。彼に似合わぬ真剣な顔をして。

「……鬪えるのか？」

誰と、とは言わない。ルキアは煎茶の入つた湯呑の水面を見つめた。

「……分からぬ」

そこに映つた自分の顔は、ゆらゆらとゆれていた。

「さて、と」

縁と白の線が交互に入る帽子を深くかぶりなおし、浦原は一護に布団をかけなおした。

左手には靈子採取器。その中身は一護の靈子だ。

搔いていた胡坐をとき立ち上ると研究室に向かつ。  
戸魂界にいたときよりも小さいが、設備は自分が作ったので決して引けはとらないだろう。

所狭しと置かれた機械の間を抜ける。他の機械には目もくれず、隅に置かれた一台の機械にたどり着くとスイッチをいれ靈子採取器をセット。

ブウウウン・・・と青い光と共にモニターが光り、機械が作動。カチカチとパスワードを打ち込むと浦原は表示された数字と文字を見つめる。

下に画面をスクロールさせ忙しなく視線を動かす。　と、その動きがある一点で止まった。

「・・・これは・・・」

浦原はしばらく驚きのあまり言葉を失った。が、すぐにキーボードを叩きだす。

静寂の研究室にキーボードの叩かれる音だけがやけに大きく響く。

その音が　止む。

「やはり・・・」

小さく呟くと浦原は画面の情報を脳に叩き込むように読み返した。そしてモニターに出されたデータの全てをどこにも保存することなく消去。

問題はない。そこに書かれていた全ては浦原の頭の中に入っていた。ゆつくつと懐から携帯電話を取り出す。履歴に入っていた番号を選択。

数回のコールのあと、相手はでた。

「どーも。お元気ですか？」

へらりと向こうには見えないのに氣の抜けた笑みをたたえ浦原はあいさつを口にした。

『・・・××××』

「そりや、確かに昨日電話したばかりですけど。社交辞令つてもんスよ」

『×××、×××××××××?』

「ええ、まあ。予想外に早く確かめられる機会が早くにあつたものですから」

浦原は帽子の影に隠された色素の薄い灰色の瞳が鋭く細められる。

「間違いありません。『本人つスよ。正真正銘の、ね』

広がる曇天。落ちる雨。

一護はぼんやりとした頭で思った。

・・・いつのまに寝てたんだ？

硬いものが体の下にあるようで、痛くて仕方が無い。体の位置を変えようと方を動かしたところ、ザリッと小石と砂利しきものの音が聞こえる。

体が重い。起き上がる事ができない。まるで何かがのっかっているように。

その時、初めて体にかかる重みに気がついた。視線を下ろせば明るい茶髪が視界いっぱいに広がっていた。

『×××、』

自分がその女性の事をなんと呼ばうとしたのか。声は自分の口からでたというのに聞き取れず、また最後まで言われる事も無かつた。

体を起こした瞬間、女性の背中に滲む赤が目に飛び込んできた。

嘘、だ。嘘嘘ウソウソウソうそうそうそだ！

現実が信じられず、女性の体を揺する腕からだんだん雨に打たれ、冷たくなっていく女性の体温が伝わってくる。

ああ、これではまるである時の、マーラの時のよう。何もできなかつたあの時のまま。

一護は力タ力タと震える手にべつとじついた朱に息を呑む。雨が手に落ちるが朱は落ちない。頬を滑り落ちる雨は雨か涙か。庇われた。護られた。死なせた。俺が、

### コロシタ。

ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオンンンン・・・

一声の雄叫び。滲んだ視界に入つてくる毛深い虚。頭の前に垂らされた竿にはおかっぱ頭の少女がこちらを見下していた。

残忍な笑み。虚闇で散々見てきた。これは、絶対優位の捕食者の目。

ゆっくりとこちらに狙いを定め、あげられる尖った触手。

果然と冷たくなっていく女性の体を抱きすくめる一護になす術は無く。

振り下ろされた、と思つたと同時に腹に走る灼熱の痛み。そして全てが暗転した。

ザーザーと雨の音。

罪を償え、と。罪を忘れるな、と。

今もなお 降り続く。

## 拾八 摆心（後書き）

お久しぶりです。テストが近くなってきているのに、何やつてんだ私。  
・・。

ル「ホンシト馬鹿よね」

セ「・・馬鹿」

朽「たわけめ」

黎「うあう、ルキア！？何故ここに？」

朽「どうでもよいだるわ。まったく私でさえテスト前は勉強したぞ？」

黎「え、でも前日まで忘れてて一夜漬けでしょ？そんな人にとっては  
く言われたくない」

朽「き、貴様何故それを…？さへは一護からか！」

一「いや、夜明けシリーズでは俺がばらしたつてありえなくねえか  
？」

朽「原作での話だっ！」

一「理不尽だろ！文句なら原作の俺に言え！」

ル「もしも～しあー一人さん。ここでそういう話、やめてくんない？」

ええ～と、サブタイトルの読み方は「揺れる心」。  
え、「そのまんますぎる」？「まあいらじょうー」

ル「胸張つてどづくんのよ・・・」

一「なんだか開き直りってスキルをこの間覚えたたらしこ

朽「・・なんだそれは」

セ「駄目な奴だ」

そこ、聞こえてんぞー！出番へらしてやるー

と、いろんなダメダメなドのつゝ馬鹿の作品を読んで下せりてありが  
といひござります。テストやらなんやらで更新のスピードは落ちるか  
もですが応援よろしくお願ひします。

つきましては、「メント・感想など」を下せりとはばみになります。  
「しょーがねーな。書いてやつか ッチ」ぐらいの気持ちで結構で  
す。

皆様の温かい心で「」の馬鹿を見せつけてください。

体が上へ押し上げられていくような感覚。だんだんと暗闇から遠ざかり意識が浮上していく。

一護は重い瞼をこじ開けた。

天井はくすんだ木。どうやら浦原商店に運び込まれたらしい。迷惑をかけてしまったようだ。はやく起きなければ。

一護は布団の中から抜け出そうと小さく身じろぎした。が、わずかに動いたものの布団は依然として一護の上にのっている。義骸かそれとも体調のせいかは知らないが体がだるくて仕方ない。ならば布団をどかそうと右手を上げ

真っ赤に染まる掌

「あ・・・・」

一気に思い出す。今まで見ていた「夢」の事を。

そう、「夢」のはずなのに。

「なんで・・・・」

夢から覚めてもなお思い出せる。あの、生々しく手を滑り落ちる緋色の感触。

今でも手にこびりついていると錯覚するほどに現実味をおびていた。見たことも無い女性が自分を庇つたせいでー

『見たことも無い』？

自分で思つたその言葉に違和感を覚える。間違つてはいない、はずなのに。

「くそ・・・・」

瞼の裏で今もなお靡く鮮やかな茶髪。耳を澄ませば聞こえてきそうな雨音。

「なんだつてんだよ・・・」

「なにがだ?」

一人呻く様な問いに問い合わせ返す声。驚いて瞼を開ければ裸を面も無く開いたルキアが横たわる一護を見下ろしていた。

「何時の間にいたんだ?」

「貴様が呻き始める少し前にな。それより大丈夫か?」

「ああ、別に」

平気、と上体を起こそうと再び腕に力を込めたが体を持ち上げるのが正直辛い。

それを察したのか、ルキアは「寝ていろ」と一護の肩を押しつぶめた。そして脇に腰を落とす。一護の顔色を見、「大分よくなつたな」と安堵からのかすかな吐息をもらす。

「一体急にどうしたというのだ?持病でももつっていたのか」

「いや、破面が持病つて」

「では、貧血」

「それもないだろ」

「では、まさかの立ちくらみか!?」

「ずつと立つてただろーがつ!!」

体のだるさも忘れて思わず大声でつっこむ。ルキアは満足そうに大仰に頷いた。

「うむ、それだけ声が出せれば問題あるまい」

・・・いや、もうちょい普通の確かめ方とかあるだろ??

呆れはててものも言えず、一護は枕に頭を深く沈めた。

「で、冗談はさておき。どうしたのだ?体調が悪かったのならそう言えば」

「いや。本当にあそこに行くまでなんともなかつたんだよな。むしろいいぐらいだつたし」

いきなり倒れるなんて経験は今まで一度もした事が無かつた、と言

えバルキアは首を傾げる。

「なら、原因はなんだつたといつのだ？」

額に手をおきながらルキアは考え込む。一護はしばらく無言で手をつぐつぱつぐつぱと繰り返し開閉させていたが、その動作がなめらかになつてきたところで声を発した。

「・・いや、別にそんなに深刻に考えねーでもいいんじゃねーか？ほら、もうだいぶ動けるようになつてきたし」

「何を言つてゐる莫迦者」

一護の言葉をルキアは一刀両断に斬り捨てる。いつそ見事と賞賛してしまいたくなるほどの即答だ。

「貴様の無様に倒れこんだ理由が分からなければ、そのうち愚かな貴様は同じ過ちを起こし、その度に私達はお前を引きずつて帰らなければならんかもしけんのだぞ？」

「迷惑かけたのは悪いと思つてゐるけどよ・・。無様だの愚かだのいられねえ修飾語多すぎねえか？」

「これぐらい当然だたわけめ」

「・・・そうですか」

投げやりに会話を断ち、一護は肺の中の空氣を全て追い出すかといふほど深くため息をついた。

「・・・変な、夢を見た」

「変な夢？」

ルキアが怪訝そうに一護の顔を見つめる。一護は返答もせず、ただ一人呟くように話しだした。

「知らない女人の人と笑いながら歩いていて・・・傘をして、雨の中すうと・・」

「雨」という単語に心なしかルキアの片眉がぴくりとはねた気がした。

が、今の一護にそれを覚る余裕は無く、ただ天井に視線を彷徨わせていた。

「笑つてた・・・その人楽しそうで、俺も何でか子供になつてたし、

その人の事知らなかつたけど楽しくて笑つて・・・  
ごくり、と乾いた喉に唾を無理やり押し通す。

「それで、その人は俺を庇つて死ぬんだ」

顔を見ずともルキアが絶句しているのが分かる。一護は今一度自分の掌を見る。

「何が起こつたのか分からなかつた。信じられなくて、体揺すぶつて、でもどんどん冷たくなつていつて・・・。でも、近くに虚がいた。俺もそいつにさされて、」

「・・・一護、それは夢だ。現実と混合するな  
ルキアが一護を気遣つて、その話を止めようとする。

一護は力なく首を枕の上で横に動かした。

「・・・これは、確かに「夢」だ。でも、「現実」でも似たような事があつた」

血塗れ 土砂降り 後悔

「・・・きっと忘れてないか確かめに来たんだ、アイツ」  
あまりにも、一護が幸せそうにしてたから。アイツはおおせつぱで底抜けに明るいくせに妙に寂しがりやだつたから。

馬鹿だ。

「忘れられるわけ、無いだろーがつ・・・」  
自分に向けて嘲りの笑みをうかべる。一護は訳の分からない、といつた顔をしたルキアに語りだす。神に向ける懺悔のようだ。  
死神なら、亡き者にも思いは届けてくれるのか？

そんな馬鹿げた事を半ば本氣で思いながら

ああ、気が重い。まだ成長が初期段階の小さい体でオレンジの髪を揺らしながら足をまた一步だす。何時も背負つている身の丈を超える大刀を数十本余計に担いだとしてもここまで足の速度は遅くないだろう。のろのろと歩く、という言葉さえ過ぎて最早不適切。今の一護のスピードは蝸牛と対等なかけっこができるほどだ。

それでも進み行けば目的地が見えてくるのは当然の理。この廊下を渡りきれば、そこはもう第七十刃サマのテリトリー。

三歩進んで一步下がる。ここまで来ていいかげん往生際が悪いと自分でも思つてゐる。

思つてはいるのだが、なかなか実践に移せないとここのもこれまた人間・・・もとい破面の性であろう。

しかし、そんな無駄な抵抗もついに終焉を迎えたこととなつた。

背後からの快活な笑い声によつて。

「にしししししーー！そーんなに嫌なの、あたしの従属官はねえや

一護？」「

鈴をこじれこじれと転がすよつた声。一護は眉間にようつて皺をよせ振り向いた。

「こりこり、可愛い顔が台無しよ？」

サファイアブルーの瞳が悪戯つ子のようにきらきら光る。  
くせつ毛でカールしがちな亜麻色の髪。カチューシャのよつた仮面の欠片。

服の上からも十分分かる大きな乳房の輪郭。

胸元を黒い上質なレースが飾り立て、袖も途中から入るスリットから黒のレースがふんだんにあしらわれている。裾にもこれでもか、とこうほどにつけられているレースの色は黒。

きめ細かな肌。しかし額には聖痕のように十字が連なり刻まれていた。

以上が第七十刃サマ もとい、今日から一護が仕える事となつた主、マーラ・クオドメルの容姿である。

出会いは唐突。やうやうと手いたえの無い砂を掘つてゐる時であつた。急に聞き覚えのない声がかけられたのは。

「なにしてるの？」

一護は振り返りもせず一言。

「墓」

「誰の？」

「・・・ダチ」

傍らの白い仮面のあぎとが風でカタカタと音をたてた。

「お名前は？」

「・・・ネイティ・フェグラン。大虚メノスの森に落ちて・・・」

歯が数本足りない仮面の残りを撫で、一護は白砂をまた一かき掘る。周りの砂がさらさらとこぼれ、欠落は埋められていく。乾燥した砂漠を今日ほど疎ましく思ったことは無い。

「あー、違う違う。貴方のお名前よ」

「・・・俺？」

一護は予想外の言葉に手を休め、後ろに立つ声の主を見上げた。そこには美しい女性が立っていた。白い装束を纏っている以上、仲間という事は分かるが見たことの無い顔だ。

天蓋に広がる青空よりもなお青い瞳をまっすぐ一護にむけ、女性は繰り返す。

「貴方のお名前。聞かせてくれないかな？」

「・・・一護、だ」

童をあやす様な言い方に多少眉を顰めたが簡潔に名を告げ、再び砂に手を突っ込む。

これ以上はもう関わるな、という一護なりの意思表示だった。のだが、女性は一護が返答した事が嬉しいらしくさも当然といった風に隣に腰掛けた。

「私はマーラ。マーラ・クオドメル。よろしくね」

よろしくするつもりは無い一護は黙っている。

マーラはたいしてがっかりした様子を見せない。

「ね、一護。一護って強いて同僚から聞いた事あるんだけどはあ しけず一護の口からため息が漏れる。

「んな事ねえ」

「あら、前に天下の十刃様から剣で一本とったって聞いたわよ？」

「ヤミーはでかいから懷に潜り込みやすかつただけだ。それに一本

「こいつても切つ先が服を掠つたぐらいで

「十分すごいじゃない」

くすくすとマーラは笑みをこぼす。

「十刃の従属官になつたりとかしないの？そんな話ぐらいいくつかきてるでしょ？」

「・・・ならない

言葉少なく拒否をしめした一護にマーラは「おや？」と首を傾げた。「どうして？私はそういうのあんまり気にしないんだけど、普通名前なんてものじゃないでしょ？釐沢しまくりよ」「みー

「・・・だつて、従属官は「十刃サマ」を護らないといけない」文字通り従属し、服従し、追従し、盾となり刃とならなければならない。それはヤだ。

「俺は・・・十刃サマ一人を護る氣なんてさらから無い。つーか、

もともとお強い十刃サマに護衛なんていらねーだろ」

相も変わらず手ごたえの無い砂を掘り進めているとマーラが「ひよいっ」と立ち上がった。

そのまま響転で何処かへ消える。その場には一護と形見の仮面が残つた。

「ようやつと興味を無くしたか」と一護は吐息を一つ吐き出す。

そして再び作業を進めようと砂まみれの手をさらに下に突つ込んだとき、ザパンシと水が頭上から降る。水気の無い砂地は素早く降り注いだ水を吸収。数秒も待たずして、そこに水が一時とはいえ在つたという証拠は濃い色に変わりじつとじつと湿つた砂地のみとなつた。

「どう~この方が掘りやすいでしょ~？」

マーラは手に持つていたバケツを放り出すとしゃがみこみ、白い手が汚れるのも厭わざ掘り出した。

「ほら、なにしているの？早くネイティを休ませてあげないと彼女に同意をしめすよ！」ネイティの仮面の歯が風でかみ合わさつ、力チカチと音を立てる。

一護は一拍遅れて大分掘り易くなつた砂に手をつけた。

「ねえ、一護。貴方言つたわよね「十刃サマに護衛はいらないだろ」つて

黙々と穴を深くしていく最中、マーラがそんな事を蒸し返す。

「ああ、言つた」

事実なので一護は肯定する。

「それね、違うと思う」

マーラはほんのすこし手を止めた。

「十刃は強いから周りから敬遠されちゃうでしょ？従属官はいわばすぐそばで一緒にいてくれる相棒みたいな感じなんじやないかな」  
人は群れる生き物だ。それは虚になつても同じ。虚は互いを喰らい大虚となり、大虚は一所に集合し中級大虚はそれを統率したがり、さらにその上では最上級大虚が力でもつて君臨する。そんな歪なピラミッドが虚圏では成立しているのだ。

これは破面になろうと変わることは無い。そうマーラは言いたいのだと一護は悟つた。

「変わつた考え方するな、アンタ」

「だつて、寂しいじやない。一人は」

てへと舌を出す様が妙に様になつていて一護は墓作りの最中だ  
というのに不謹慎にも笑つてしまつた。

今、一護は不機嫌だ。そこらの大虚なら身の危機を感じ取り、とばつちりを受けぬようそそくさ逃げていくだろう。が、破面のなかでも十本の指に入る実力者は涼しい顔をしてそこに立つていた。

「まさかテメエがその十刃サマだつたとはな・・・」

「でも逃げずに来てくれたのね。うれしいわ

「・・・それ、本気で言つてんのか」

「ええ、もちろん」

につこりと百点満点の太鼓判が押されるぐらいの笑顔。それを見目

麗しいマーラがやるのだから異性は当然、同性とて赤面なのだ。

しかし一護は怒りの剣幕でその満面の笑みを睨みつけた。

「そりゃあ、部屋に帰つたら荷物が全部運び出されてて、「貴方の荷物は預かつた！B Y破面？」「マーラ」なんてメモがあつちやな」

それを行つた当の張本人は今、目の前でにまにまと笑つていた。「人質ならぬ荷物質つてね。さあさあ、私の従属官になつてくれるかな？」

「断る！」

「そこは、「いいとも～！」でしょうよ」

頬を膨らませながらマーラはどこからか取り出し何故かかけていたサングラスを外した。

「とにかく俺の荷物返せ」

「あ、貴方の部屋だけど、新しい破面に譲るよう藍染様に言つといたから」

「はあ！？」

一護はあんぐりと口を開いた。寝耳に水とはまさにこの事だ。「新しい部屋はこの富の中よ。で、ここに居候したければ・・・分かつてるわよね？」

十刃と共に暮らすのは供たる従属官のみ。例外は認められない。

完全に退路を断たれた、と一護は眉間の皺を深める。そんな一護の視線を知つて知らずかマーラは暢気に「ぐう」と伸びをした。

「今日はいい天気ね」

「・・・そーだな。（てか天蓋の下でいい天気以外ありえないんだけど）」

「明日も晴れるらしいわ」

「・・・そーだろな（ここで雨なんてふるわけねーし）」

「さてさて、私の従属官になつてくれるかな？」

「・・・はあ」

今世紀の幸せが全て逃げていきそうなほど深く、深く一護はため息をついた。

「・・・何というか、パワフルな方だな」

なんともまあ、はっちゃめちゃで傍若無人な方だ、という感想はとても言えず、ルキアは控え目にそう言った。

「はっちゃめちゃで傍若無人なヤツだよ」

そんなルキアの心の声を読み取ったかのように一護は苦笑した。一護がマーラに抱いた第一印象そのまんま。なので言い当てるのは簡単だ。

「でも、悪い奴じやなかつた」

目的を果たす為なら少々強引な手も使うが、暴力で訴えてきた事は一度としてなかつた。いつも見せる笑みは邪気が無く、自分と同じように争いを極力嫌う珍しい破面だった。

「・・・好い人、なのだな」

「ああ」

そう、好い人『だつた』。

最期のその瞬間まで

。

拾玖 追想（後書き）

長いかな・・・読みきつた人、本当にすごい。  
一気に書いたらこれ以上長くなるので分けました。  
コメントお待ちしております！

今回ばかりと追想編です。

手を合わせ、白い皿にナイフとフォークを三時から六時の方向に置く。

以前のルームメートが礼儀にうるさかつたので、最低限のテーブルマナーはもう癖のように当たり前にしている。  
今の同居者とは大違った。

彼女も自分と同じく魂魄を食べるのに非常に抵抗があるらしく食物を攝取する。

もう作るのも面倒だし、残りものでいいかと思案し—護は皿を持って立ち上がった。

テーブルから幾許も歩かないうちに部屋の入り口から、うな亜麻色の髪を振り乱し、マーラが駆け込んでくる。

ਅਥਾਤ ਕਿਸੇ ਵੀ ਸੰਗ੍ਰਹਿ ਵਿਖੇ ਪ੍ਰਾਪਤ ਕੀਤੇ ਗਏ ਮਾਮਲੇ ਦੀਆਂ ਜ਼ਿੰਦਗੀਆਂ

「数田で学んだとおり、一護は頭を下け屈み」んだ。その真上を一護にじゅれつこうとしたマーラが通り過ぎる。

「あああああああー!? なんでよおるのよーー! ?」

純白の硬質な床をかかとで擦りながらブレーキをかけ、マーラはくるりと一護の方に振り向く。その顔には不満がありありとでていた。

「やつから預けたんだよ」

何も知らなかつた同居初日。ダンプカーが衝突したかと勘違いする勢いで向きつて二度三度はばくばく殴打した。

それ以来、毎朝あいさつと共に受けていれば、自然と対処法も身に

「へ、ほり一謹。返事は？」

「・・・おはよう」「ひ

「ひつこり」と微笑まれ、一護はため息交じりに朝の挨拶を口にした。

マーラの従属官に不本意ながらもなつて数日。色々と彼女の性格やら生活態度やらが見えてきた。

その一つがこれだ。一護は本を読みながら視線だけ食卓につくべマーラに向けた。

「ん？ ふおうふいふあお？」

「・・・食うか喋るかどっちかにしろ」

こちらの視線に気づき、顔を料理から上げたマーラにそう言い渡す。

その途端口と皿の間を往復する手のスピードが格段にあがった。

どうやら食べるほうを選択したらしく。

姿勢はかなり良いほうだといのこのこの食べっぷりで幻滅した者も少なからぬいるだろ？

すでにマーラの傍らには空となつた皿が積み上げられていた。

しかもテーブルマナーなんて知ったこっちゃねえと言わんばかりの食いつぶり。

ハムスターの、とく頬を膨らませて詰め込めるだけ口に食物を詰めている。

そういう観察してこむづひてマーラは皿の上の料理をたいらげ飲み込んだ。

「それで？ どうしたのよ」「よ

「・・・よく食つな、ってだけだ」

「あら、靈圧の大きな者はその分食べないとダメなのよ？ 一護も知つていてるでしょ、そんな初步的なこと」

「知ってるけどよ・・・魂魄喰えばこんなに食べなくともいいんだろ？ 何で摂取しようとしたしないんだ

「一護だつてそりでしょ」「ひ

「俺はしたくないし、そもそもできねーんだよ」「ひ

「私だつてしたくなこのよ、そんなこと

幾つもの皿の山を一つに重ねながらマーラは言った。

莫大な力を持ち、破面達の憧れの地位に立つ者としては想像できない台詞だ。

「悲鳴を上げて泣きながら逃げようとする魂魄を貪るなんて・・・食欲一氣になえそうだわ」

「そんな事言つてるとその内、十刃落ち（プリバロン・エスパーダ）に落とされるぞ」

「あ～ら。その時は一護、貴方が従属官に拾つてちょうだいなくすくすと笑いながら軽口を叩くマーラに一護はとりあえず手元にあつたファンシーなクッションを投げつけた。

第七十刃富の屋上。広がる天蓋の青空の下でマーラは白の僧侶を手に取つた。

「ほひ、ナイトゲット」

黒のマスに居た黒のナイトを白のビショップが追い出す。マーラはそれを手に取るとチェス盤から退場させた。

「随分と安易な駒の動かし方じゃない？」

白の支配者は不適に笑う。黒の幼きプレイヤーはそんな挑発に耳を傾けることなく漆黒の砦を前進させた。重厚な城は勝利に浸る僧侶をいとも簡単に弾き飛ばす。

「安易なのはそっちだろーが」

一護は呆れた風情で事切れたよつに横になるビショップを手元に回収した。

「ああー！――いつの間にルークがそんなところにー？」

「さつきからずっと」

ナイトを取るのに夢中になつていたあまりマーラはルークの事など眼中になかつたらしい。

「つううう・・・この恨み、晴らさずでおぐべきかーー！」

白のローンをルークの斜め前に進められる。

ここは張り合つても意味がない。一護は逃げるが勝ちといわんばかり

りにルークを横に動かすと、マーラも深追いはせず、別の兵士を進ませた。

「なあ・・・

「ん~?」

「なんで外でこのちえ・・・?」

「チエスよチエス。現世のゲーム

「それは分かつてる。なんで外でこれをやる必要があんだよ?」

「風はもちろん、雨が降ることなどありえない天蓋の下では天気は常に晴天。

別に何時でも何でも外ができるのだ。何せ天候は必ず完璧なのだから。

だからこそ分からない。わざわざ外で遊戯盤を持ち出すわけが何かを愛するわけでもなく、何かを気にかけるわけでもなく。

これなら室内でやつたところで変わりは無いと一護は思ったのだが。チツチツチツ と立てた人差し指を左右にふりマーラは口角を上げる。

どうやら彼女なりの考えがあつたらしく。

「気分よ」

・・・訂正。まったく何も考えていなかつた。

一護は眉間にしわを寄せながらビショップを斜めに滑りせりふように移動させる。

「つたぐ・・・お前の気分に俺を付き合わせるなよ」

「あら、私は一護と一緒に外に居たい気分だったのよ?」

付き合つてもらつて当然でしじう と腕を組まんばかりの物言いには流石の一護も頭を押さえる。

マーラは上機嫌に鼻歌を歌いながら一護の陣地に白騎馬を進めた。

「それにね、ちょっとうれしいことがあって空が見たかったの」「うれしいこと?」

「そ。今度ね、現世にいける事になつたのよ。任務でだけね」

「・・・ふうん

「なに、どうしたのふてくされた顔して。あ、さては羨ましいんで  
しょう」

—  
•  
•  
•  
L

「お？ お？ わては圖壁ね？」

頑なに口を閉ざす一護の表情を見てマーラは面白いものを見たとばかりに口元を押さえる。

舌打ちをしたのを唇を噛んで耐え、その代わりに思いの丈をふりけんばかりの勢いでルークを白のマス目に叩き落す様に置いた。一護は現世に行つたことが無い。まあ、靈力が強いとはいまだまだ成長段階。将来有望な若者が万が一にも死んでしまえば藍染としても少々は惜しいのだろう。

しかし正直、一護にとってはものたりない。同期は捨て駒とはいえ現世に行けるといふのに何故自分だけ行つてはならないといふのだろう。

あんの腹黒狸は『まだ時期ではないからね』と訴の分からない事を  
言って笑うだけ。

「現世」とは一護にとって夢幻。話にしか聞かない、実態がつかめない幻想郷の様な物だ。

行きたい。行ってみたい。

・・・俺も一緒に行つちやダメか?」

黒の兵士を盤から取り除きながらマーラは小首を傾げる。

「鬼土」

いつも快活に笑うマーラの顔が曇った。

「ルーラン」

「何か問題があんのか？」

次の一手を下す事も忘れ、一護はマーラを見つめた。

「いや、その・・・藍染様のお許しがでれば・・・」

「何でだよ。アンタが居るんだ、万が一どこか意地

仕事か。一シルが居る所が、刀が一々立たない所が、一にも危険な  
んてないだろ。

足手まといになるかがそんなに心配か

苛立つ一護の声にマーラは必死に首を振る。

「ち、違うわ！でも貴方を連れ出すには藍染様の許可が

かたくなに藍染の名をだすマーラに腹が立つ。

「なんで一破面の事に総大将が口出しすんだっ！？」

いきなり上がった一護の靈圧にカタカタと黑白の駒が震えだす。

マーラは何も言わず一護を見つめ返す。

「・・・答えてくれ。何で俺の事で藍染の許可がいる？」

「・・・俺は、アンタの従属官だ。（不本意ながらも、だが）よほ

どの事がないかぎりアンタの好きにしていいはずだろ。それが何で

「

そこまで言ひて ビクリッ 肩の震えたマーラに一護は田を見開いた。

まさか。

「まさか、俺を従属官にしたのは・・・」

アーツの命令だから・・・か？

マーラはそこで初めて一護の追求から逃れるよひに俯いた。  
その行動は、質問の肯定だった。

「 つ、もういい！！勝手に独りで行つとけーー！」

「ま、待つて一護っ！」

焦つたように呼び止める声にも振り向かず、その場を響転で立ち去つた。

高速で変わつていく視界が、涙で滲んでよく見えなかつた。

響転の使いすぎでだるくなつた足を止めると、その場は見覚えのない廊下だつた。

まだ刃の宮が隣接する区域のつくりを知らない一護は実質迷子だ。

ぺたんと壁伝いに膝を抱えて座り込む。

荒くなつた呼氣を徐々に落ち着けながらもその合間に嗚咽がまじる。

『なにしてるの?』

数日前のことなので酷く鮮明に思い出せる。今は色褪せていてくれた方がありがたいといつのに。

『あー、違う違う。貴方のお名前よ』

ネイティ以外に初めて名前を聞いてくれた。

『どう?』の方が掘りやすいでしょう?』

手伝ってくれた。優しかった。

『だつて寂しいじゃない、一人は

ああ、そうだな。独りは寂しい。

一護は縋る様に自分の両腕を抱きしめる。壁にくつつけた背中がいやに冷たい。

信じてた、んだらうな……。

自分の気持ちを客観的にそう結論付ける。

はちやめちやでパワフルで傍若無人で寝ぼすけで。優しくつて強くつて、でも本当は寂しがりや。

魂魄を喰う事を嫌う所も実は戦いが嫌いな所も一護と同じだった。初めて見つけた同属。

壁一枚隔てて寝ても刀を抱いて寝ないと安心できないなんて一度も思わなかつた。

信じてた。間違いく。でも、今はどうなんだらう。

一護を本心から傍に居て欲しいと願つて従属官にしたと信じたい。でも、あの反応からして、かなりの確率で違うと分かる。

命令だから、だつたのか・・・?

あの笑顔も。優しさも。全部藍染の命令があつたからこそ一護に向けていたのだろうか。

「・・・バッカみてえ」

マーラは悪くない。藍染の命とあらば、十刃といえど逆らえない。きつとその中でも最高の待遇をしてくれたのだろう。

マーラは悪くない。一護が勝手に信用しただけ。

だとうのに。

「なんでこんなに・・・!」

爪を立てるのもいとわず、胸の前で強く手を握り合わせる。ずきずきと胸が痛い。

皆の様に心が無くなつて欲しいと思つたのはこれが初めてだつた。

コツツ コツツ コツツ

一護は赤くなつた目を擦つた。誰のものかは分からないうが、足音が近づいてくる。

ちゅうどいい。道を聞こう。

そうして、昔の部屋に戻る。荷物はもうここ。それよりも、もう会わないように。

コツツ コツツ

目の前で足音が止まつた。ゆっくりと腫れぼつたくなつた臉をこじり開け、顔を上げる。

そこには一、

「探したわよ

今、最も会いたくなつた破面が立つていた。

「なん、で・・・?」

「あのね、貴方はその垂れ流しの靈圧を向とかしたほうがいいわ。

辿りやすいつたらありやしない

手間のかかる子供を見る目でマーラは一護を見下す。けれど、一護の聞きたかった事はそんなんじゃない。

「なんで、探しにきたんだよ・・・?」

「当たり前じゃない。貴方は私の従属官で」

「藍染サマの命令で、だろ?」

(違ひ)

一護は自己嫌悪に顔を歪めた。

こんな棘のある言ひ方をしたいんじゃない。本当はありがとうって言いたいはずなのに。

気を悪くしてしまったか、とマーラの顔色を伺うが彼女は怒氣に頬を染め上げも見下してもいい。ただ、ほんの少し申し訳なさそうな表情で。しかし、しつかりと一護を見つめていた。

「貴方を従属官にしたのは、命令だった。そこは認めるわ」

マーラは静かに話を始める。一護は視線を床にためよわせながら小さな声で言つ。

「分かつてゐる。別にアンタが悪いんじゃない。だからもう俺のことには

「

「まつておかないわよ」

マーラは膝を折り一護の眼前にしゃがみこむ。

「私言わなかつたかしら? 従属官は十刃にとつては相棒なんだつて。私は少なくともそう思つてゐる。でも。いいえ、だからこそ。信用の置けると判断した相手じゃなきや、絶対に傍におかなつ」

初めて聞くマーラの必死な声。一護はぱちりと瞬きした。

「命令でも、か・・・?」

「命令だらうとなんだらうと氣に入らなかつたり氣があわなそりになかつたらそつこく追い出してるわ」

ぽんぽんと跳ねているオレンジの髪を撫でながらマーラは微笑んだ。

「一緒に居てよ。私、寂しいのダメなの」

一緒に居てよ。

その言葉に壊れた螺旋巻き人形のようヒコクコクと頷いた。

頬を滑る霊がさきほどよいつつとうじくはない。

屈折し歪んだ視界の中で蒼穹よりも深みのある青から自分と回じよう

うに涙が流されている事を知った。

「信じた」じゃない。「信じる」よ。

明日も明後日もその先も。ずっとずっと。

## 武拾 信用（後書き）

お久しぶりです。遅くなつてすみません。

実はデータが書いてる途中で全部飛んでしまいました、余りのショックにしばらく立ち上がりなかつたしだいです」と言いました。

これから本格的にテスト期間なのでしばらく更新できないと思ひます。

コメントや感想にすぐにお返事できませんが、「それでもくれてやる」というお優しい方はぜひコメントをお願いします。

糸姫 比呂（前妻）

万歳！テスト終了しました！（結果は多分ボロボロ）更新再開します！！

「吐き氣がするわ」

眼下に広がる光景にマーラが心底嫌そうに吐き捨てる。

それには一護も同感だった。足元の下では同族が喰らいあい、傷つけあい、殺しあっていた。助けにいかないよう厳しく言われていなければ今すぐ飛び降りて全員気絶させて回るというの！」。

「ほんと、悪趣味ね」

マーラは視線を斜め上に持ち上げた。呼び集めた十刃のせらに上に座す男。

仏のような穏やかな微笑をたたえ高き所から見下ろす全ての破面の創造者・藍染惣右介。

「いくら新しい十刃候補を絞り込むためついでに、有力な破面全部を戦わせる事はないでしょ？」・・・

生き残れば天国。負ければ死か、生き残つても捨て駒のレッテルが貼られる。

もとから一護はずば抜けて靈圧が高かつたためこの選定は免れたが、そうでない者なら必ず通る地獄の試練だ。

「・・・マーラもこれをやつたのか」

「まあね。でももつと少なかつたわ。それでもその日は眠れなかつたけど」

肩をすくめマーラは下の後輩達を見る。一護も同様に広がる地獄絵図を見た。

「ここから這い登るのは誰なのだろう、と思いながら。

「ひつひつのつてやよね」

マーラは自分の過去を思い出したのか声に重い響きがある。

「貴方もそう思ひでしょ？」

「・・・ああ」

血を流し倒れた名も知らぬ破面に默祷をさげながら一護は深く頷

いた。

さくやくやく 白い砂の上をマークの面の方向に歩く。

「あー、気分悪い。だるい。かつたるい。足痛い。お腹すいた」「最後の一いつは関係ねえんじゃねえか?」

「ずっと立つてたのよ?お腹と背中がくつつきやつ」

「あの後でよく食えるな。俺、今日は昼飯いらねーや」

「にしし、それなら今日は一護の分も食べれるのね。楽しみだわ」

「やっぱ食つ

慌ててそう言こ直せば、マークはこいつと微笑つた。

「そいつ。ちゃんと食べなきや。大きくなれないわよ?」

「余計なお世話だつ」

そう怒鳴りながら一護は思つた。

もしかして、俺に食べさせるためにわざとあんな事を言つたのか・  
・?

「でもそれじゃ一護の分、食べられないわね~・・・こつもよつ  
多く作つてくれない?」

前言撤回。どうやら本当にお腹がすいていた様だ。

「ねえ、「光」って知つてる?」

食事中にこきなり問われ一護は皿をぱちくりと瞬かせる。フォーク  
に刺さり、口に運ばれようとしていた芋が、ぱとりと皿に落し  
た。

「急に何だよ」

「いいから。知つてるの?知らないの?」

「知つてるぜ。例えば今そこに置いてある「ンン」はその光をともす  
道具だ」

なにを当たり前のことを。

そんな顔をして言えば、マーラは苦笑をこぼす。

「それが灯すのは明かりよ」

「一緒に」

「違うのよね」それが

ミディアムのステーキを切りマーラは一口で大きな肉の塊を飲み込む。

「言い方が少し悪かったわね。じゃあ、「太陽の光」はどう?」

「・・・お前は記憶能力って物がまるでねえって事は今分かった」

一護は憮然とした口調で言い返す。

以前、現世に行つた事がないと一護がマーラに突っかかっていつて疎遠になりかけた事は彼女のためでたい頭の中には既に片隅に押しあれられているらしい。

いや、片隅にも存在しているか、はたして怪しいものである。ともかく、現世に行つたことが無いのだから太陽なんぞもつてのほかだ。

「その言い方からすると無いみたいね。いい?光はね、きれいできらきらしてて、あつたか~い気持ちになれるのよ

「・・・はあ」

「見ていて本当に感動するの」

「ほお」

「楽しみよねえ、現世に行くの」

「オメエなにげに性格悪いな。俺が行きたくても行けねえ事、知つてんだろうが」

不機嫌気味に言い放ち食事を再開する一護を不思議そうにマーラは見返す。

「何言つてゐの?貴方も行くのよ。一緒に」

「・・・・・・ん?

「・・・聞き違いか?俺には「一緒に」って聞こえたんだけど」

「大丈夫。間違つてない間違つてない」

満面の笑顔で親指を突き出すマーラ。

一護は「あー、そつか。よかつたなー」と棒読み口調で全く信じていなかった。

「もー。ホントよホント。信じてつじばー」

「はいはいはい」

「藍染様に直接直訴した私をほめてよー。すつゝじへ緊張したんだから」

「・・・本当[.]?」

藍染の名は冗談で出すような物ではないし、出そうとしたりひとまつても勇気がいる。

そんな心臓に悪いジヨークをわざわざ出す意味も無い。

もしかして、本当の事・・・?

半信半疑で一護は確認をとる。

「いつ行くんだ?」

「十日後」

「何所に?」

「現世に」

「誰と?」

「私と、一護の一人」

「なんで?」

「任務よ、任務」

てつくりウインクしながら「勿論、遊びー」というと思つていた一護は真面目な答えに目を丸くした。

「・・・貴方が私をどう思つていいのか、よく分かつたわ」

マーラは腰に手を当て、立腹した様子を大げさに示す。

これは確かに自分に非があると認めた一護は素直に謝罪しよつと頭を下がった。

「すいません」

「よろしく」

彼女は謝罪を受け取り妙に高飛車な氣取つた声でそう答え、クスクスと笑みを漏らす。

「で、任務つてのは？」

一護がそう問うた瞬間、マーラの眼差しに真剣みが宿る。

いくら普段の振る舞いからは想像がつかなくとも、彼女はやはり、破面の頂点に立つ十人の一人。誇り高き十刃なのだ。

「今回の任務は現世に逃げた実験体の破面の始末。藍染様がじきじきに改造してたのだから、手強いかもしない。能力なんかは一切不明」

「あんの狸・・・また余計なことを・・・」

「ちょっと一護」

「あう」とか藍染を狸よばわりした一護をマーラは即座にたしなめる。

「なんでそこまで藍染様が嫌いなの?」この力だつて藍染様に頂いてる。

「

「なんでだろうな」

「はい?」

一護は銀のナイフを忙しく動かしながらぼつりとそう呟く。

「なんでか嫌なんだよ。目を合わせることも。名前を呼ばれることも。何もかも嫌なんだ」

「

「なによそれ。そんなので洗礼の時、一体どうやって

はたつ」とマーラの動きが止まる。

「・・・もしかして「洗礼」も受けない、なんて事ないわよね?」

「洗礼」。力を持ち、数字持ち（メネロス）以上になる者は、藍染への忠誠の証として彼の斬魄刀、「鏡花水月」の始解を見る事が何故だか義務付けられている。

おそらく莫大な力を見せ、歯向かう気を無くさせるため、といわれるいわば一種の儀式。

これの事を破面達は「洗礼」と呼ぶ。

ここに居る限り、一護もその通過儀礼を通つたはず。なのだが

「おう。行ってねえ

すこんつ

いつそ清々しいまでに即座・はつきり明確に判定され、マーラはおでこをテーブルに打ち付けた。料理ののった皿を一瞬の判断で避けたのは流石。（・・・褒め言葉？）

赤くなつた額を擦りながら、マーラは身を起します。

「めんどくさいな。」  
「そりがちだな。」

そこで一護は一度言葉を切り、小さな声で一言。

「・・・迷つたんだよ」

卷之三

洗礼をせぼるだなんて、前例の無い事をしでかして、その理由がそ  
れか。

マーラは堪え切れず、笑いを噴く。

特徴的な筆

特徴的な笑い声を響かせ、食事中ということも忘れ、手近にあつたテーブルをばんばんと叩く。その度に音を立て跳ね上がる皿々。自分のステーキの皿を両手で持ち上げ確保しながら、しかし彼女のあまりの笑いように一護は真っ赤になつて怒鳴る。

「煩せー！ 大体今までがおかしかったんだつ。こんな広い所を迷いもせず地図見ただけで覚えやがつて！！」

「にしし、それ、ただのハツ当たりだから。にしりしりしりー。」

笑いの中にも突っ込みをしつづけた。口元には一謹の堪忍袋の尾が限界を訴える。

「・・・今日このまゝ

一護はかきこむよつに残り少ないステーキを飲み込み、皿をマーラに投げつけた。

それが着弾する前に、テーブルを足台にマーラに迫る。

「今日このまゝ許さねーぞ！！」

「」の一聲が毎日恒例、既に日常と化している、一護vvvマーラの本田開戦合図だった。

割れ、使い物にならなくなつた皿を拾い集め、黒いビニール袋に入れる。

このビニール袋という物もマーラが現世で仕入れてきた優れものだ。そう。今のように喧嘩の後始末に一役どころか何役もかつてくれる。

「・・・一護が悪い」

「まだ言つのかよ。今日は随分と根に持つな」

「だつて、せつかくステーキだったのに」

「もう十分食つたら」

「でも～」

類を風船のように膨らませ、マーラはたらたらと文句を呟やき続ける。

「あー、現世に行つて買つてきた最高級のお肉だったのに

「任務資金を何に使つてんだテメーは」

「あーあ、お肉うー。一護のせいだあー

「・・・」

「おーにーーくうー

「黙れ！！」

「これでは駄々をこねる子供・・・否、それよりもたちが悪い。

怒鳴りつけた弾みで手の中で更に粉々に碎いてしまつた皿の破片を拾い集めながら、一護は大きくため息をついた。

「たつだいま ・・・ つて、なこじへるの？」

「一人チエス」

蠍戦鬪狂に呼び出された時間だ、と掃除をほつたらかし出で行ったマーラは一護一人が支配する盤上をじこ・・・と見つめ、対戦席に座った。

「こつちの方が有利ね～。今田こそ勝つて見せるわ

「オメエに恥つて言葉はねえのか

「無いわ！」

「いばんな

堂々と「勝てば富軍！」と拳を高々と上げ宣言するマーラはこいつを見事である。

と、その衣服に染み一つ、汚れ一つ無このを見て、一護は思わず首を傾げた。

「お前、やの蠍・・・?」と呼び出されて闘つてきたんじやないのか?

「まつさつかあ～！」

「冗談を～、とひらひらと手を振るマーラの言動にますます謎が深まふ。

「じゃあ、今まで何してたんだよ？」

「逃げてた」

✓サインを突き出すマーラの顔に嘘を言つてこいる風体はない。

「だつて、アイツかなりめんどくわこゆ。闘う理由聞いたら、「メスが上にいるのが気に入らない」とか。つかーもつー何様だつてーの！」

あー、ネリエルもあんなにわざ構つてせらなくていいの!

「「ネリエル」？」

聞きなれない名に聞き返すと、マーラは驚いたよつて群青の瞳を丸くした。

「え、知らない？ネリエル・トウ・オーデルシュバンク。第三十刃トレス・エスパーク」

の

「いや・・・」

「あー、そういうの疎そつだものね、一護。うん  
納得したと言わんばかり頷きマーラは駒に手を伸ばす。  
一護はむっとした表情をしたが、事実なので何も言い返さず相対し  
た。

「さあ、行くわよ！」

「また負けた・・・」

「攻め方が単調すぎんだよ。何回かやってればパターンが俺でも読  
める」

「うう~

呻き声をあげながらマーラは駒を始めの定位位置に戻していく。

「よつし、もう一回ーー！」

ビーッ！ ビーッ！ ビーッ！

机の上に置かれたランプが赤い光と鋭い音を発する。今まで見たこ  
とのない現象に一護は驚愕した。

「何だつ！？」

「・・・一護、刀を持つて」

マーラは普段の振る舞いからは考えられないような静かな声を出す。

「現世に行くわよ」

そして、あまりにもあつけ無く。彼女との日常は崩れ去る。

・・・あれえ？

「マークリー死亡」までいくはずだつたんだけじゃなあ・・・?

どうやら次回に持ち越しですね。あはははは・・・。

早く追憶の話終わらせたい・・・。

コメント・感想共々お待ちしております。

## 貰物 手（前書き）

祝！お気に入り登録してくれた方が一百件突破！

きりのいいところまで書き溜めいたら一万字超えました。  
ちょっと流血表現あるかもです。  
嫌な方は注意してください。

「Jのランプはね・・・」

先程、光と音を発したランプを掲げ持ちながら、しかしマークは駆ける足を止めることなく説明する。

「これから追う実験作虚の靈圧を察知して、光って鳴るよつに藍染様が改造なされたの」

「なんでそんな面倒くさいことすんだ?」

「なんでも靈圧を隠すのが極端にうまいらしい。・んだけど、詳しい事は全然」

マークが「お手上げ」とばかりに両の手の平を上向かせた。指に引っかかったランプがカチャカチャと断続的に揺れ動く。一護はマークの前でこうじとも忘れ、舌打ちをしてこの状況の元凶を罵る。

「あんの狸・・・やつかいなヤツ作りやがってー」

「こり!・・・でも今回ばかりは同感ね」

反射的にマークは一護を諫めたが、自分も厄介事を押し付けられた自覚はあるので、案外あっさりと聞き逃してくれた。

彼女もほぼ情報なし、という事でかなり困惑しているようだ。

「正直、今回の任務はなんかくさいのよね~。

藍染様が能力開発した破面が能力を調べあげられる前に脱走。どうやって逃げ出したのかは未だに分からず、逃げた破面は靈圧を隠すのがうまい・・・。

なんか、出来すぎじゃない?」

「・・それは考えすぎじゃねえか?」

一護にそつかたづけられたが、マークはうとうと寝るのをやめない。

「私、勘はいいほうなのよ」

「考えに考えて抉れてるだけに思えるけどな。深読みのしすぎじゃ

ねーの？」「

マーラの作り出した靈子が固められた道を走りながら、一護は呆れた  
よつこそう言つた。

「・・・そうね。それより、一護、現世はまだ昼間の時間帯だったは  
ずよ。青空が見れるわ！」

どこまでも、見渡す限り続く灰色の雲。どんなりと垂れ込め、氣  
分を鬱屈とさせる。

「・・青空・・・ね」

「ああ！そーいえば現世には曇り空つてものが存在するらじいわ！  
よかつたじやない、青空よりもレアよー！」

慌ててマーラが曇天へのフォローをいた。一護はつまらなさうに  
目を細め、

「・・・青くない」

ぼそっと呟き、視線を地に向ける。樂しみにしていた空よりも足元  
に広がる大地のほうが色彩豊かで見慣れぬ植物というのも生え、  
まだおもしろい。

「また来ましょーーね？」

一護を慰めるためにかマーラはぽんぽんと一護の頭を優しく叩くよ  
うに撫でる。

駄々つ子をあやすような扱いに一護がむくれ、反論しようとした口を開  
きかけた時。

「また一人で来ましょー。今度は青空の日だ。ね？」

そう念を押すマーラの顔があまりにも必死で、口に出しかけた言葉  
を飲み込み、反射的に頷く。

「よかつた！」

途端に花がつぼみを解くように開く笑顔。

「一護には見てほしいの。「本物の」青空をね」

「・・・なんでそんなにもこだわるんだ」

一護自身、青空といつものに興味がないわけではない。が、そこまで拘る理由もない。

マーラは、手に持つランプに視線をよこす。赤い光が点滅を繰り返すだけで音を発しない。近くに研究体の虚はいないようだ。

「……まあ、いつか。話してあげる」

探索のためマーラは歩き出す。一護もその後を歩く。しばらく無言で歩いていると、マーラの足が止まった。

「私はね、虚圈に青空が欲しいの」

一護は愕然と皿と口を見開いた。

「虚圈に青空」。ありえない。夢のまた夢。高望みが過ぎる。夢はでつかくとないうが、でかすぎるのも考え方だ。身に余るものに手を伸ばし続ける必ず破滅が身を焼く。

「……『イカロスの翼』だな」

「分かりにくいくらいみね」

「うつせえ。第一、空なんでもうあんだけ」

「ダメよ！」

マーラは語調を強め、ぐいっと顔を近づける。深みのある快晴色の瞳が一護を映した。

「あれはね、ただ天に轟をしただけ。でも、その外は今までと同じように真っ暗なのよ？」

私は、あの眠り続ける寂しい世界に朝を……夜明けをもたらしたいの」

「……どうして、そこまでこだわんだよ」

「決まってるでしょ？ あの世界が好きだからよ」「胸をはり堂々と言い切ったマーラの顔は輝いていた。眩しいほどのそれに一護は瞬きするのも忘れた。

「……ん？ なによ～見とれちゃって。だめよ？ 恋しちゃ

「するか。こんなおばさん興味ねえよ……」  
「……」

あいふあい！…

「そーんな事いつのはじめの口なかしら？これねこれでしょこれな  
のね」

「いふあいふあい！…ふあなふえ、ふおのぶあぶああ…」

「なんですって！へつ、ぴつちぴかのひのまつペ、羨ましいゼコン  
チクシヨー！…」

ぐにぐにと一護の頬を上下左右・四方八方にひっぱりこじりマーラ  
は自分の肌のはりと比べ、怒り嘆き羨ましがる。

「いいふあふえん、ふあなふえ！…」

「ん～？なに言つてんのか分かんないわよ～？」

「ふえめえ・…！」

ふふふ、と黒微笑をこぼしながらマーラは頬をいじくるスピードを  
あげる。

一護は必死の抵抗の末、マーラの手から逃れた。摘まれて真っ赤にな  
った頬を両手で押さえ、射殺すような視線でマーラを見む。

「てめえ、よくも・…！」

「女性をおばさん呼ばわりするといつなるのよ。いい機会だから憶  
えときなさい」

腰に手をあてて笑むマーラの背後に黒いオーラが漂つてゐる。

「・・・はい・・すいませんでした・…」

その迫力に冷や汗をかきつつ一護はさつきまでの怒りも忘れ、慣れ  
ぬ敬語で頭を下げる。

声が震えるのも仕方が無い。蛇に睨まれた蛙つてこんな気分なんだ  
ううな、とそんな事を思った。

ビツー ビツー ビツー

サイレンが鳴り響く。ランプの明かりが一際増す。

「来たわね」

ふざけていた様子がまるで嘘と思つまど切り替えた。

やつとこの変貌についていけるようになつた一護は素早く背負つた

大刀の黒の晒が巻かれた茎<sup>なか</sup>を握る。

マーラもランプを投げ捨て、腰に差した双短器に手をかけた。

風でざわめく木の葉の音がやけに耳に付く。暗い空が心の不安をかきたてる。

「ぐくっ、と渴いた喉に唾を無理やり降下させ、一護は相手の靈圧を探ろうとした。

が、やはりうまくいかない。苦手分野といふこともあるが、一切かんじられないのはやはり、実験破面は靈圧を消す能力があるのだろう。

「靈圧を探るのが苦手なら、それに頼ろうとしちゃダメ」

一護の様子を見て、マーラがアドバイスを送る。一護は困惑し、マーラの背を見た。

「ならどうやって

「他の感覚を使うの。視覚・嗅覚・聴覚・触覚・第六感。空気の流れや感触」

「そんなんっ！？」

「いいから信じなさい。私が嘘ついたことがある？」

一護はぱちぱちと瞬きを繰り返した。そして、大刀を握る手に力を込める。

そういうえば彼女が嘘をついたことは無い。いつも、なんだかんだ言いながらマーラは正しい事しか言わない。

全神経を総動員させ、相手の位置を探る。

小さく小枝が折れる音がした。

「つ、そこだ！！」

しゅるりと黒の晒が意思を持つかのようにぼだけ、宙を舞う。

白い峰・漆黒の刃。身の丈よりも大きな刀を、しかし一護は軽々と振り回し斬りかかる。

ガキンッ と鈍い音が、鈍い衝撃が走り抜ける。

一護の刀を受け止めたのはシンプルな甲冑を着込んだ兵だった。黒の漆塗りをしたかのような槍を携えている。

力的にも体格的にもこのまま組み合えば不利は目に見えている。

一護は相手の槍を大きくはじくと、響転で距離をとった。

「大丈夫？」

「ああ。にしても、コイツが・・・」

槍を構えなおした歩兵の格好をした破面を睨む。マーラは腑に落ちない顔で見つめる。

と、その指先を持ち上げ、一言。

「虚閃」

瑠璃色の光が集まり、一直線に兵の兜を吹き飛ばす。頭を失った兵士は力なく崩れ落ちた。

「変ね・・・」

拍子抜けだわ、とマーラは腕を組む。

「いいじゃねえか。終わつたんだから」

「よくない。藍染様の研究室から逃げ出した実験破面がこの程度？ どう考へてもおかしいわ」

兵のような破面に歩み寄り、その体をじろじろと見つめるマーラ。

「なあ、いい加減帰ろうぜ。なんか天氣も悪いし、！？」

一護は風きり音に言葉をきり、咄嗟に刀を振る。かん高い金属音が耳につく。

「な、につー？」

一護の大刀が受け止めたのは黒い槍。持ち手は先程倒したはずの甲冑の兵士。

頭は混乱しているが体は打ち込む槍に反応し柄を切り落とし、鎧を袈裟に斬る。

ばつたりとあっけなく倒れた兵士は、気味の悪いほどマーラの足元の兵士と瓜二つだった。

「これは・・・」

「どういう事なのかしら・・・？」

二人は顔を見合わせた。何か、とてつもなく嫌な予感がする。

ガサリッ

茂みが不気味な音をたてた。

二人の間に緊張が走りぬける。マーラの対の胡蝶刀が鞘から抜かれた。

ザツ ザツ ザツ

いくつもの足音が地響きのように伝わってくる。草を踏みつけながら姿を現したのは、真っ黒な軍隊だった。

先ほどの二人と全く同じ格好の歩兵が六人。

鎧に装飾が追加され、黒馬に跨る騎馬兵が一人。

ゆつたりとしたローブを着、杖を手に持つ僧侶は双方共に伏し目がち。

その背後から現れたのは表面に城郭が彫られた漆黒の大盾二対。支え持つ兵士が見えないくらいの巨大さだった。

その盾の奥に立つのは長身の女性。ドレスと一体となつた鎧は他の兵とは比べ物にならないほど上質なものだと一目で分かる。優美な装飾をなされた杖を携え、絹糸のような髪は長く、その頭の上には黒いティアラが当然のように納まっていた。

一糸乱れぬ行進は、一護達を前にしてぴたりとまる。

一護は素早く黒兵達に目を走らせた。

「・・・十三」

「いいえ、十四のはずよ。じゃないと、ゲームが成り立たない」

敵の人数を数えた一護はマーラのとんちんかんな答えに眉を顰める。

「いいい？こいつ等の格好をよく見て」

一護は黒軍の顔ぶれに目を通す。

「・・・見たぜ」

「じゃ、気づくわよね。倒したのをあわせて歩兵ボーンがハ、騎士ナイツ・僧侶レスヨウブ・

城壁ルーフが二つずつ。そして女王クイーンが一体」

「つ！？じゃあ、これって・・・！」

「そう、チヒスの駒と同じ。城壁が大盾っていうのがちょっと違うけどね。

どうやら、奴の能力は自らに忠実な兵を作り出す事、みたい。つて事は、在らなきやいけない駒がここにはない・・・」

「・・・王<sup>キング</sup>

」

女王の隣、玉座に座つているはずの王の姿がどこにも無い。

「多分、王が例の「実験破面」。そして、こいつ等は全部ただの駒」

「じゃあ、王を探せばいいんだな？」

「可能性は高いんじゃないかと思うわ。ただ、どこに居るかが分からな

」

「つしやあーいぐぜーーー！」

「ちょ、一護！？」

マーラの制止の声を背に一護は軍勢に駆ける。

歩兵が敵の接近を見て、槍を向ける。全員、教本の手本を丸写しそうな綺麗で全く同じもの。そして、実践においてあまりにも隙だらけな構え。

「つはーー！」

小柄な体躯を生かし、槍先と地面の間に屈んで滑り込む。そして、かけ声と共に気合一線。

同位置に突き出されていた三兵の槍の先は、まな板で揃えて切る葱のように同じ長さで切り飛び、地面に三つ虚しく転がる。続いて殴打に攻撃方法を切り替えてきた歩兵を大刀の一振りで真つ二つに。その時、頬を灼熱の痛みが走る。槍を突き出した兵に対応しようと体を捻った時、弾丸にも匹敵する速度で両の胡蝶刀が投擲され、兵士の頭を正確に貫く。

「考えなしにつつこまないーー！」

膝蹴りにて残り別の兵を地に沈め、マーラは教示の声を張り上げながら刃渡り五十センチばかりの胡蝶刀を引き抜く。

「はいっ、返事はつーー？」

「んな場合かつーー！」

歩兵が倒れたその合間より馬上から長槍がこちらを抉らんと突き出される。

一護は幅広の大刀で危なげなくそれを受け止めた。続いて、騎士の乗る黒馬が前足を上げたのを見て退避。予想通り、馬は粉塵を巻き

上げ前足を振り下ろした。

マーラは一度に僧侶二人と切り結びながら、再度問う。

「ほりつ、返事はつ！？」

「いいから集中しろっ！！」

怒鳴り返すも、剣技で二人相手に圧倒している彼女に対しても無用な注意かもしない。

黒衣の騎士は手綱を引くと、馬を一護のいる方向にむける。そうして、馬の尻を槍の柄でぴしゃりっと叩く。馬は全力でもって疾走を開始。

この攻撃方法はいたつて単純。騎士のもつとも得意とする戦法、突撃である。

一護は大刀を正眼に構えた。地鳴りのような音をたてて、馬が迫ってくる。

馬との距離が二メートルをきるかという時、一護はぱっとしゃがみ込み、馬の側に峰を向け真横に突き出す。

騎士の振るった槍が耳元を掠め、数本オレンジの髪が宙を舞う。黒馬は突き出された大刀に足をとられ、前につんのめり騎士を巻き込んで倒れた。

馬が引っかかった事によりかかった衝撃に思わず手放してしまった大刀を、一護は今のうちにと慌てて拾う。

服の袖で汗を拭いながら立ち上がった一護を、落馬した騎士は槍を捨て、腰に差していた長剣で切り捨てようと抜刀。

体格差を活かした上段よりの攻撃。が、全力を持って振り下ろされたそれを一護は刀でたやすくはじき、がら空きとなつた喉元へと刀を突き刺す。

肉を断つ感触は無かつた。が、鎧は力を失いその手から長剣を取り落とす。

「・・・オレを見ると、皆上段で攻撃してくるからな」

対処の仕方は完璧なんだよ、と高い背を持つ甲冑に皮肉を込めて言ってやる。

たかが甲冑にすら身長のことで侮られた攻撃をされた、という事がなにげに悔しかつたというのは、秘密だ。

「それより、マー・・・・」

「ラ、と呼ばうとして言葉を失う。一度に僧侶一人の猛攻を受け流していたマーラ。

今は黒馬に乗り、長剣を振り回す騎士が参戦している。

どビのつまり、相手が増えている。そして、それを一人で圧倒している。

「あ、終わったの〜?」

しかも一護に話しかける余裕まであるときだ。

ああ、そういえば十刃だつたっけ、と思つたのは、内緒だ。

「手伝うか?」

「大丈夫よ。ただ、このローブの一人が超速再生できてね。斬つても斬つても立ち上がりてくる、っていう無限ループゲームみたいになつてるだけ」

いやいや、仮にも命が懸かっているといつのになんだ、その遊びのよくなーミングは。

いや、それがマーラのマーラたるとこらなのかもしれない。  
そう思い、次の敵を探す。しかし、残りの歩兵はマーラが一人で片付けたようで、戦場に立つてるのは一人の大盾持ちと整つた美貌を持つ女王だけだ。

刀を向けようとも、一步もそこから動くんじゃない。盾持ちは動く気配すらない。

チエスのルールにどこまでも忠実なら、女王は最強。彼女の傍は安全地帯。

ならば、王は一体どこに隠れるだらう?

「はあつ!!」

轡転で一気に女王の後ろに回つこむ。小さな影が見えた。

「そこか!」

同時に一護の腹にめり込む女王の爪先。小さな体は軽々と宙を飛ぶ。

「つぐ・・！」

一護は咄嗟に大刀を地に差し、スピードを殺す。止まりきりはしなかつたが、速度は落ち。そのすきに地におひる。土煙が舞つたが、気にも留めず敵を見続けた。

(「イツ・・・」)

違う。今までとは格が。

歩兵は動きはのろく、単調。騎士は速攻。なれど単純。盾持ちは鉄壁。されど鈍重。

女王は違う。一度攻撃をくらつただけでも分かる。動きは機敏。攻撃は変則的。今までの「駒」らしい枠にはまつた対応ではない。

コツツとハイヒールの靴の音が大地に響く。

一護は追撃かと身構えたが、結果その心配は必要無かつた。絶大な力を持つ女王は不動。その前方に盾二つが並ぶ。完全に守りの構えだ。

(どうすれば・・・)

瑠璃色が明るく閃く。

「たーまやー！」

盾持ち二人に激突した虚閃が鮮やかに輝く。跡形も残さず焼き消す瑠璃色。

元気よく屋号を叫ぶマーラはきっと、玉屋が花火を打ち上げ、大火事を起こしてしまったという事実を知らない。

「おまたせ。こっちもよーやく終わつたわ」

マーラは胡蝶刀を両手に一本ずつ持つて歩いてくる。その後ろには痙攣する三人。

兎にも角にも、これで残るは。

「さがつてて」

マーラは亞麻色の髪を靡かせ一護と黒の女王の間にいる。

「私がいくから」

瞬間、マーラは間合いを詰め、胡蝶刀を振り上げる。

杖であつさりとそれを受け止めた女王に對のもう一方を左から打ち込む。

双刀のスピードを活かした怒涛の連撃。一撃一撃の威力は一護の大刀には劣るものの中髪いれずに繰り出される攻撃は相手に防戦一方を強いらせる。

「じゃあ俺は・・・」

女王の後ろにいた王を探す。もとの場には影も形もなかつたが、最強と信じている女王の傍からそこまで離れているとは思えない。そこらの茂みに身を隠していると見るのが妥当だろう。

広がる森は天候のせいでただでそれ薄暗いといふのに、木の葉がさらに光を遮り不気味だ。

「・・・面倒くせえな」

もう虚閃で吹き飛ばしながら進んで行つてしまいたい。そうすれば、何時かは王にあたるはず。犬も歩けばなんとやらともいうし。ふとマーラを顧みると、黒檀の女王と剣戟を繰り広げている。姿がかすみ、亜麻色と漆黒の残像がぶつかり合ひ。一拍遅れて全力で互いを斬ろうとする刀剣の雄叫びが火花を散らして響く。双方一歩も譲らない。

「つと、いけねえ。王様、王様つと・・・」

見入つっていた一護は軽く頭を振つて探索に戻る。目を皿のよつこしながら奥へ、奥へ。

ガサリツ 近くの茂みが音をたてて揺れた。

「ガアツ！－！」

咆哮と共に赤色の虚閃が一護曰がけて放たれる。今の今まで隠れ力を蓄えてきた一撃。

近距離での不意打ちに一護ができた事といえば反射的に腕を上げ、頭を守る事ぐらいだった。

「・・・やるわね」

「・・・」

返答は無論無い。その代わりに真っ黒な剣の刀身が鈍く光を放ちだす。

「随分とまあ、特典が山盛りなのね」

マーラは胡蝶刀の一方を逆手に持ちかえると重心を落とし、低く構える。

その手に、頬に幾つか走る裂傷。対敵も同じ数だけ傷を負っている。欠けたティアラが髪の上に情けなくのつていた。

光を強めていく女王と長剣をマーラは油断無く睨む。

ドオオオオン・・・

耳をつんざく爆発音。火の手のように森に上がる赤い虚閃。

マーラは目の中に敵がいることも忘れて、その様子を仰ぎ見る。

「なにつ！？なにがどうした」

言いかけ、はたと口を噤む。いや、言葉を続けるのを中断してでも確かめたい事があった。

自分の唯一の従属官。寂しがりやのくせに他人に寄りかかり方が分からぬ自分が初めから全面的に甘え、からかい、対等に接せた唯一の存在。いつの日にか虚闇に、と望む青空に君臨する太陽と同じ色の髪の少年。

その靈圧が急に弱弱しくなっているのだ。

今の爆音・爆発に巻き込まれたのだろうか。大怪我をしたのかもしれない。

駆け寄るうとする足をかろうじてとめたのは肉薄するように迫つてきた女王の姿。

マーラは身を捩る。が、対処に遅れたため完全にはかわしきれない。剣が先程より数段切れ味をあげ、マーラの肩の肉に食い込む。

そのまま腕をおさらばする前に、剣が振られる方向に逆らわずに踏み切る。そして響転。

傷はそれ以上広がる事は無かつたが、深く抉られた傷口からは血が伝い、白い服の一部を赤く染めた。

「あら、この服お気に入りだつたのに」

マーラは凄みをきかせた笑みをうかべる。一護のもとに早く向かいたいというのに足止めを食らつてはいるこの状況。服のしみ。その全てが彼女を苛立たせる。

爆発が数回にわたつて続いているのが、戦闘中と 、すなわち一護は生きていると確認でき、それが彼女の最後の理性の糸だった。が、それもきりきりと細くなつてきている。

今のマーラは心ここにあらず。しかし、頭は冷静に勝利への道を辿つていく。

「ああ、取り急ぎ服代だけは請求させてもらおうかしら?」

マーラは響転で一気に近づき、胡蝶刀を横に薙ぐ。首を正確に狙つたそれを女王は仰け反るようにしてかわす。そこから第一撃。逆袈裟に切り上げられ女王の鎧が音をたてて碎けた。

血は出ない。他の兵隊達と一緒に。違うのはそのまま糸の切れた人形のように倒れこむのではなく、踏みどまり反撃してきたことだ。鈍く光る長剣がマーラの胡蝶刀と打ち合つ。一本の刀をクロスさせ長剣を受け止めるマーラの口元に小さく笑みが。

「虚閃つ!..」

瑠璃色がマーラの眼前に結集し、女王の頭を狙い打つ。

力アアン・・・ 欠け鱗割れたティアラが地に落ち、砕け散る。

「あらあ? ちょっと安くついちゃつたかしら」

ティアラの破片を踏み碎き、マーラは妖笑をふつ、とうかべる。

その笑みをすぐさま消し去つてマーラは木々生い茂るほうに視線を移す。

爆発が、止んでいた。

「・・嘘よね・・・」

込めれる限りの靈圧を込め、響転を行つ。

、間に合つてよね！

爆発音は、相変わらず嵐の前の静けさのように止んでいた。

「・・・つは、つは、つは」

鼻に土のにおいが飛び込んでくる。荒い息をしながら一護は立ち上がるために腕を立てようとした。

が、細い双腕は一護の体重を支えきれず折れ、体はぐしゃり、と再び地に落ちる。

「・・ロス」

「王」はぼそりと呟いた。四・五歳ほどの外見だというのに、田には光が無く「生ける屍」という言葉が頭をよぎる。

白っぽい金髪は乱雑にはね、大きすぎる王冠はかぶっているというよりかぶられているという表現がふさわしいだろう。チェスのボーダーと同じ色合いのチェックのマントを羽織っている。王杓をゆっくりと一護に向け、彼はぶつぶつと壊れたレコードマーのように同じ言葉を繰り返す。

「殺ス殺ス殺ス殺ス殺ス殺ス」

王は一護をガラス球のような瞳に射し、王杓の先端をゆっくりと突き出す。

その先に結集していく力の光。真っ赤なそれはぐんぐんと大きくなる。

ぼろぼろの体を叱咤して動こうとするが、それでもほんの少し移動しただけ。

とても特大の虚閃がはなたれるまでにその威力が及ぶ範囲から逃れる事はできないだろ？

そういうして、大玉となつた虚閃を掲げ、王が一護に

照準を合わせた。

虚閃の威力をこらす為に残つた靈圧をかき集めて防壁をつくる一護。しかし、それも所詮は焼け石に水。そう分かつていて。

「 口 口 ス 」

虚閃が迫る。大刀の茎を血塗れた手で引っ付かんだ、その時。

グンッ 首の後ろを引っ張られて一護の軽く小さな体は後方にとぶ。

一瞬、隣を過った亞麻色。

気がつけば、マーラが前方で手を此方に伸ばしていた。  
いや、違う。彼女は一護を投げたその手に胡蝶刀を握りなおした。  
その顔にうかぶのは、微笑み。

「 よかった 間に合って 」

グォンッ 轟音がして、一護を襲うはずだった虚閃がマーラに迫りくる。彼女は胡蝶刀でそれを受け止め、靈圧でかき消そうとぐんぐん力を解放していく。

その体を 一本の長剣が刺し貫いた。

「あ、」

一護は目を見開く。かわいた唇からもれ出た声は、擦っていた。  
力なく膝を折ったマーラ。女性らしい曲線をもつ体から不恰好に突き出る一本のもの。

あれは、何だ。

受け入れられない現実を、脳が心が拒絶する。されど、拒んだところでの前の出来事が変化するわけでもない。

純白の長剣が一振り、マーラの体を両脇から貫通している。

もち手は先程まで相手にしていた烏木の兵隊とは正反対の純白の騎士一人。

気がつけば、あたり一体を包囲している奇妙の軍。

(そうか・・・!)

黒と白のチェックのマンド。どうしてかいで疑問をもたなかつたのだろう。

どうして、王の軍勢は「黒」だけだと思い込んでいたのだろう。  
どうして、俺は、ツー!!

「バカ」

王は唇の端を吊り上げた。マーラの眼前に勝利者の歪んだ笑みと優越感をもって歩み寄る。

「コノ程度。クズ。十刃ノクセニ

「・・・莫迦はアンタよ」

ゆっくりと、マーラの顔が上がる。その声は小さいが凜としていた。王の顔が驚きに痛みに彩られる。その胸に突き刺さったマーラの刀。

「 、王手!..」

チェックマイ

胡蝶刀が薙がれた。真っ赤な鮮血が飛び散る。

「ア、アアアアアアアアアアアアアアアツー!!！」

断末魔の絶叫が響く。一護よりもさらに幼い身体は灰のように形を失くし、どんよりとした風に攢われていった。

辺りも困っていた純白の兵も、マーラの体を刺し貫いていた一振りの長剣と二人の騎士も同様に消えた。

「・・・終わった・・のか・・」

一護は大刀を支えによろよろと立ち上がった。

マーラは一護が無事立ち上がったのを見て、満面の笑みをつかべ、

## カラソッ

胡蝶刀がマーラの手から力なく滑り落ちた。

その肢体が傾くさまは、妙に時間が長く感じた。

倒れふす音は、遅れて聞こえた。地に広がる赤は、速かった。

「・・・え？」

咄嗟に駆け寄る事も忘れ、一護は呆然と立ち尽くした。

何で、どうして。そんな意味の無い言葉の羅列ばかりが頭の中を駆け抜ける。

「マーラ・・・ラ・・・？」

ふらつ、と一歩足を踏み出す。いつもきれいなマーラの亞麻色の髪は地に広がり、血に染められつつある。

それを見て、よつやく頭が働き出す。

「マーラッ！…」

名を呼びながら駆け寄り上半身を助け起すと、彼女は吐血をしながらもうすらと群青色の瞳を開いた。

「・・・「ひなわいわね。そんな声ださなくとも・・聞こえてるわよ・・」

いつもどおりの物言いに内心ほつとしながら一護は「このバカ！-！」と一喝した。

「なんで、あのタイミングで入ってくるんだっ。なにが、チェックメイトだ！」

「・・・こしそし・・。今回のチェスは私の勝ち、ね

「んな事、今はどーでもいいだろうが・・！」

「よくないわよ・・・。だって、」

「もへ、できないだろつか」

マーク血檀の亜麻色の髪の先端が風に吹かれ、消えていく。  
足の先からも、灰のように細かい粒子となり、「マーク」が崩れて  
いく。

「あー・・まさか、あそこでまだ伏兵が居たとは・・・油断大敵つ  
ていうのはこの事ね」

苦笑しながら、マークは空を見上げた。曇天から雲がマークの頬に  
落ち、滑り落ちる。

「・・・『ごめん』

一護の声に彼女は空から視線を一護に戻した。

俯いた瞳から零れ落ちる涙。

「お、れが、もっとうやんとしてれば・・・、俺がつ、もつと強け  
れば・・・!」

嗚咽の混じった謝罪。となじめなく流れる涙は一護の頬を伝い落ち  
る。

「・・・こら」

予想もしていなかつた小さな叱責に一護は腫れぼつたくなつた臉を  
瞬かせた。

「・・・助けてもらつたら、「『ごめん』じゃなくて、「ありがとつ  
でしようが」

「・・・ありがと」

ぐすり、と鼻を啜りながら一護はマークの肩を抱く手の力を強めた。  
マークは微笑みながら一護の頬を愛おしげに撫でる。  
天から降り注ぐ雨と流れ出ていく血液のせいか、その手はひどく冷  
たかった。

それでも、一護は心地よさげにその手にて擦り寄る。

もう一度と、撫でてはもらえないのだろうから。

「・・・青空はきれいな」

マーラは光が消えていく瞳で雲が立ち込める空を見上げた。

その田から、雨とは違ひ雨が零れ落ちた。

「・・・ああ」

マーラがそれほどまでに焦がれる「青空」を見た事も無い一護は曖昧に相槌を打つばかり。

「とつても、とつてもきれいな」

「ああ」

「・・・一緒に見たかったな」

「・・・」

完全に自分の死期を悟ったマーラの台詞。一護は思わず言葉を失つた。

雨足が強まりつつある中、彼女は空色の瞳から涙を流す。

「一護。・・・私、死ぬのよね」

「・・・」

「いやだなあ・・・」

「・・・マー、」

「死にたくないなあ・・・」

マーラは弱弱しく一護に縋りついた。

「暗いところで、独りは怖い・・・」

一護はマーラの手を握った。ここにいるよ、と教えるようだ。

その手も、わらわらと粒子となり消えていく。

一護にはなす術もなせる術もなかつた。ただ、無力に唇をかみ締め

マーラの肩を抱くしか出来なかつた。

雨が、勢いをました。

武拾弐 王手（後書き）

お久しぶりです！上にも書きましたが、気が付いたらたくさんの方に読んで気に入っていただけていたんだと思つとうれしくて涙がとまりません。

マ「だつたらもうと更新早くしなさいよ」

黎「うおう！ダメですつてマーラさん…あなた此度本編でお亡くなりになつてんですよ！？」

マ「面倒くさいわね～」

黎「いいから！大人しくしてください！…」

マーラさんは役目を終えてふてくされてます。過去編なんかでまた出番あげたいな、と思っています。

あ、サブタイトルは「王手」と書いて「チェックメイト」読んでください。

さあ、追憶編終わり！次回から現実です！

一護は喋りすぎたがるくなつた唇を閉じた。

耳の痛いほどの静寂が部屋に広がる。ルキアは布団の脇で正座して、沈黙を守っていた。

「ありがとな」

一護は最後まで聞いてくれたルキアに感謝を述べる。  
「こんな話、聞いてもつまんなかったら」

「・・たわけ」

ルキアは弱弱しく一護を叱りつける。

「そのような顔をしてまで、私に話す必要などないのだぞ・・・」

一護は目を丸くした。まったく自覚がない。

「・・・俺、今どんな顔してるんだ?」

「・・おいて行かれた、子供のような顔だ」

そう言って、彼女はとても辛そうな顔で横たわる一護を見下ろした。膝の上で握られた手は握り締めすぎて白くなつていた。

「・・てめえこそ、そんな顔する必要なんて無えだろ」

「「そんな顔」?」

首を傾げるルキア。一護と同じく、自覚は無いらしい。

「大切なものを失くして、途方にくれてるヤツみたいだ」

そう、大切なモノ(マーラ)を失くしたばかりの一護とそつくりな表情。

ルキアはそう指摘され、目を逸らした。光が遮られ、黒檀の瞳に影が落ちる。

その様子に事情がある事は察せたが、無理に追求はせず、話題を変える。

「そういうや、あの一人はどうしたんだ?」

「あの一人とは誰の事だ?」

会話につってきたルキアに安堵しながら、一護は一緒に町を巡った

一人の女子高生の名を思い出すと奮闘する。

一人は威勢のいい黒髪短髪。もう一人は飴色の長髪でおしとやかだが天然の氣があり、たまに拳動不審。

そう、印象は覚えているのだ。だが、名前となると……。

「……誰だつたつけ？」

「はあ？」

「いや、一緒に歩いた二人つて」

「…有沢と井上のことが」

ルキアは呆れた顔つきで「一人の名を上げた。その瞳が半眼となつて一護を見つめる。

「…貴様、昨日の今日で何を言つてゐる。ほとんど寝ていたといつのに」

「仕方ねえだろ。夢の中で色々あつたんだ……って、「昨日の今日」？」

ルキアの言葉の中の引っかかる点を「どうこいつ事だ」という意味をこめて繰り返す。

一護の意思を正確に汲み取り、ルキアは説明するため、室内に唯一設けられていた窓に歩み寄る。

がらり、と窓が開けられるとそこからは高い日差しが差し込んでいた。

「貴様が倒れてから、一晩が過ぎてゐる。もうすぐ暁時だ」

ぐうぐう ルキアの言ひ事を肯定するかのじく一護の腹の虫がなる。

「ほほう。腹が減つたようだな」

ルキアは意地の悪い笑み・・・すなわち、一護をからかうときの表情にをうかべた。

「あう・・・つるせ・・・！」

自分の失態に羞恥で赤くなりながら、一護は掛け布団を頭の上まで引き上げる。

(よかつた)

もう元気そうだ。ルキアは先程までとはまるで違う、優しさに満ちた笑みを口元にのせた。

布団をかぶつた一護が、その笑みを見る」とは無かつたが。「では、貴様の分の食事も用意してもらえるよつテッサイ殿に頼んでこよつ。

貴様が倒れたと聞いて心配なされていた。ジン太と爾もな。後で詫びておけ

「・・・分かった」

布団に潜つたまま、ぐぐもつた声が返事をした。どうやら、ルキアがいる限り、酸欠にならうと意地でも出る氣はないらしい。

「着替えも貰つてこよう。大人しく待つておるのだぞ」

そう言つて、ルキアは襖を開けた。

「おお、そうだ。あの二人から言づいてを頼まれておつたのだ立ち止まり、布団の中の一護にもきちんと聞こえるよう大きめの声で言つてやる。

「また一緒に歩くこつ、だそつだ」

「・・・そつか」

数秒の沈黙の後、一護は短くそつ返す。

その返事には、様々で複雑な感情が込められているのが聞いただけでも分かる。

「あと、有沢は

その伝言を思い出し、ルキアの口元に知らず知らず笑みがこぼれる。

「「ちゃんと笑えるようになつとけ」だそつだ」「

「・・余計なお世話だ」

また幾秒かの無言の間に返事が返つてくる。

しかし、今度はくぐもつた声が少し明るく響いたように聞こえた。

手を合わせて合唱してから、一護はざるの上にのつた白い麺を不

思議そうに見つめた。

皆、我先にと箸をのばす。そんな中、箸を持つ「」とさえしない一護にテツサイが話しかける。

「いかがなされましたか。素麺はお嫌いで？」

「あ、いや・・・。そうじやない、んですけど」

たどたどしく敬語を使いながら、一護は苦笑する。

どうやって掘んだのか、というほどの麺を椀に入れ食べる夜一。その周りで皆が涙して空っぽの椀の汁を見ていた。

「こうこう目から眞ざとつてこくのつてやつた事なくて」

「ほつ」

「一緒にすると、一人で力食にするヤツに全部食われちまうんで、皿に盛り分けてるんです」

一護の脳裏に亜麻色の髪の女傑と若草色の髪の美人、そして同色の髪の童女がよぎる。

思えば、自分は随分と大食いの女性との遭遇率が高いらしい。現に、今も。

「夜一サーン。ちょっとは残してくださいよ・・・」

「なんじゃ、残しておるつ。ほれ」

「いや、麺三本つてどうなんスか」

「細かいことを言つな恋次」

「そーよ。細かい男は嫌われるのよ」

「お前等は取れたからんなコト言つてられんだけ!」

「ちょっと一角!醜いよ」

「・・・ぐだらねえ」

「・・・うん。やつぱりこうなったか。

「素麺追加で」

一護は料理長・テツサイに追加オーダーを頼む。

「承知いたしました」

テツサイは快く引き受けてくれた。のつしと立ち上ると机の中央

に置かれていた空っぽのざるを取る。

「皆様、しばしお待ちを」

その後、結果的にテツサイが何束の素麺を何回までたのか。  
それは・・・・・言つまい。（察してほし）

「……で、話してなんだよ」

食後のお茶を啜り、一護は目の前に座る少年隊長に問いかけた。  
食事を終え、席を立とうとしたら、「話がある」と引き止められ、  
現在こどもつねが。

銀髪の隊長は何か話しあべねていふようで一向この話を始めようとしない。

「...なあ」

呼びかけようとして、はたと口を開く。

……そりゃ、二年生の名前でなんたって、  
ろくに話した事もないのだ。名前など覚えていなかったはずもない。

に全く残つていな！

「冬獅郎ぢやねえ！日番谷隊長だつ！！！」

「…………いや、俺破面なんだけど」

はたして、死神の隊長を「隊長」と呼んでいいものなのだろうか。ひ、日番谷・・・ああ、もう覚えにくい。冬獅郎でいいや。一護は彼の呼び方を「冬獅郎」に決定・固定した。

冬獅郎は一護に言われ、ばつが悪そうに目をそらした。

「…すまん。つい癖でな  
「…お前、苦労してんだな」

隊長が「隊長と呼べ！」と叫ばなくてはならないだなんて。思わず憐情の眼差しを向ける一護に気づき、冬獅郎は大きく咳払いをする。

「ともかく、話はもう少し待ってくれ。浦原が何かもつてきたい物があるらしくて、」

「どーも。お待たせしました」

噂をすれば、なんとやら。室内でも帽子をかぶっている浦原がへりとした笑みをうかべて部屋に入ってきた。

手にはなにやら機械機器らしきものが。

「浦原さん、それは・・・？」

「ん？ ああ、別に。お気になさらず」

そう一護にことわりつつ浦原は力チャカチャと機械をいじり始めた。気にするなど言われても、「はい、そーですか」と完璧に無視する事などできはしない。

自然、一護の視線は浦原に流れる。冬獅郎も特に咎めようとする素振りはないので、そのまま見学していると、浦原の顔が上がった。

「準備OKです」

「よし」

その言に頷き、冬獅郎は一護に向き直る。

「じゃあ始めるぞ」

「え、あれは」

浦原のセットした機械を指差しながら一護は眉根を寄せた。「気にすんな

浦原と全く同じ台詞で冬獅郎は切つて捨てた。

一つ、大きく咳払いをし、口を開く。

「单刀直入に言う。破面側の情報が欲しい」

「・・・つまり、俺に仲間の情報を流せ、って書いてえのか？」

一護のブラウンの瞳が座り込む。

もし、一護の入っている義骸が靈圧遮断性の物でなければ、確実に上昇した靈圧を感じ取れただろう。

上昇した靈圧を感じ取れただろう。

静かな憤怒。

彼のそんな表情を見たことのなかつたルキアは驚きに目を丸くした。  
冬獅郎は顔色一つ変えることなく答える。

「話せる事だけでいい。宿と食事の恩、・・・ってことでダメか」「・・・」

一護は馬鹿馬鹿しいと一笑する事はなく、形だけかもしれないが無言で真剣に考え始めた。

彼の優しい性格上、今までうけた恩を返す形を強要されでは、即答して「嫌だ」とは言えないのだろう。

その場に張り詰めた緊張からなる静寂がおりる。

やがて、一護の黙考が終わつた。俯けていた顔が上がる。

「・・教えても此方が構わない程度の情報・・・でもいいのか」

今度は冬獅郎が額に手をあてた。できれば重要なものがほしい。ほしいが、そんな事を言つては、何も手に入らない。零された情報や言葉から新たな事が見えてくる可能性もある。

「それで構わない」

そう言つと、一護の表情が和らいだ。

「だったら、別にいいぜ。崩玉のこと・・・はもう話したつけか?」

「あ、ああ

急に話を振られたルキアは慌てて頷く。

崩玉の件が「教えても構わない程度の情報」とはとても思えないのだが・・・。

まあ、それが発覚したところで「魂界にうてる手など無いも同然なのだから、「その程度」の情報になるのかもしれない。

「じゃあ、破面の中にある階級つていつか・・・組織のつくりでも説明するか

紙くれ、と言つた一護の手にルキアよりスケッチブックが手渡される。

何故、常時携帯しているのかに首をひねりつつも、一護はスケッチブックの白いページを開き、一緒に渡された黒のマジックを走らせ

た。

「一番トップが藍染・・・サマ」

一護は嫌そうに「サマ」をつけてから、白紙の上のぼつぼつ「総司令官・藍染」と書いた。その下に数本線を引く。

「それでそのまま下に破面統率官の東仙さん。で、狐」

「・・・きつね？」

「ねえ！それってギン・・・の事？」

乱菊が身を乗り出して一護に迫る。一護はその迫力に気圧されながらもしつかりと頷いた。

「あんなヤツ、狐で十分だ」

「市丸ギンと何かあつたのか？」

語氣を荒げる一護の様子にルキアが尋ねる。

「あの野郎・・・！俺達しか食事を取らないからって狙つてザエルアポロの薬入れやがつた！！おかげで何度もさよざんな田にあつたぜ・・・」

一護の脳内に薬による被害が走馬灯並みの速さで駆け巡る。

「・・・た、大変だつたようだな」

ルキアが片頬をひくひくと痙攣させながら一護へと声をかける。その背に般若の面が浮かんでいるように見えたのは、はたして田の錯覚だろうか？

室内の一団、じぞうて氣まずげに一護から目をそらす。

「なにが退屈しのぎだ・・・なにが似合つてんだ・・・！」

怒りに震える拳を握り締め一護は彼方に居る銀狐・・・もといギン狐の顔を思い出した。

思い出したら思い出したで腹立たしくなり、想像内のギンをたこ殴りし始める。

「おい」

日番谷が呆れたように一護を呼んだ。はつと氣が付き、一護は「悪い」と眦を下げる。

少々どころか、かなり話が脱線してしまつていた。

氣を取り直し、紙に「東仙さん」、その横に「狐」と書く。「狐」の字に心は一切こもっていない。

さらにもそこから線を引く。書かれた文字は十の刃。

「その下・・・藍染サマ直属の、破面。通称「十刃」。強い奴を上から十人とつていい。

こいつらの実力は、正直計り知れない。戦闘なんて滅多にしないしな」

戦闘狂以外、と一護は小さく付け加えた。

「あ?なんだつて?」

それを刺青・・・否、恋次が聞きとめ、尋ねる。尋ねる、とはいっても口調は問い合わせるように荒い。

「なんでもねーよ

本当にわざわざ言い直す必要もない事だつたので、一護はそつまつた。

別に、「なんでテメエなんぞに言い直してやらなきやいけねーんだ、この赤パイン!」と思つたからではない。断じて違う。

が、恋次はそうは思わなかつたようで米神に血管をつかせている。

「テメー・・・!..」

「阿散井つ」

「ちょ、恋次!/?なにやつてんのよ!」

「落ち着くのだ、この莫迦者!」

一護に掴みかかろうとした恋次を周りに座つていた死神が押さえつけるようにしながら宥める。

恋次はかるうじて自分を押さえつけ、座りなおす。が、その直前大きな舌打ちをしていた事からも決して静止を受けたことをよくは思つていないので、と分かる。

どうやら、相當に嫌われているらしい、と一護は眉を顰めた。

しかし、彼の逆鱗に触り、嫌われるような事をした覚えが一切ないのだ。

首をかしげて考えるが、ない事を思い出すとしてもビリうなるところのでもない。

一護は話を再開する事でその場の空氣を元に戻そうと試みた。

「……で、この十刃の側近が従属官。数字持ち（メネロス）の中から何人でも選べる。

あ、数字持ちって言つのは破面のなかでも藍染サマの命令をうけれる奴等な。

弱い破面は切り捨てられ、本拠地にも入れてもらえない。

中には誰も選ばない奴も居る。数えられないぐらい選ぶ奴も「

一護の頭の中にピンクの髪の毛をかきあげながら見下してくる研究者

者の姿が浮かび上がる。

そつこく頭の片隅に追いやりながら、一護は十刃の文字の斜め下に「数字持ち」と書いた。

恋次が「そういうや」と、何かを思い出すように空中に視線を彷徨わせた。

「俺と戦った金髪が言つてたぜ。破面？ 15（アランカル・クインセ）とかなんとか」

「俺と戦った破面も言つていたな。確かに、生まれた順から数字をつけていくとも」

「おお～。よく知つてんな、冬獅郎

「田番谷隊長だ！！」

反射的に怒鳴つてから、はたとその口を閉じる。そして、また場の雰囲気を取り戻すために咳払いをし、冬獅郎は「とにかく」と一護の書いた図面を指差す。

「ここにも線が引かれているが

「ああ、これは十刃落ちと葬討部隊エクセキアス」

「ふ、ふりば・・ふりん・・？ なんのそれ。十刃の一種？ 亞種？」

「いやいや、乱菊さん。ふりんつて」

食べ物になつてます、と恋次がつっこむ。

「にしても長つたらしい名前だな、オイ」

「美しいよ。もっと簡潔にまとめられないのかな」

「・・・俺に文句言わないでくれ」

ネーミングセンスはアイツのなんだから、と知らず一護の眉間にしわが寄る。

「で、十刃落ちというのはなんなんスか？」

ずっと口を閉ざして機械を弄り、モニターを覗き込んでいた浦原が話を進めろ、と言わんばかりに顔を上げた。

「十刃落ちは、「元・十刃だつた者」たちの事だ」

「「元」？」

耳ざとく冬獅郎が説明を促す。

「後からあがつてきた者達に負け、十刃を追われた者達。数字は三桁に落とされ、従属官を持つ権利も剥奪される。って言つても、実力は十刃級だ」

言いながら、一護は手に持つ黒のマーカーで「十刃落ち」と書いて、続いて残つた線の下に「葬討部隊」と殴り書いた。

「で、こっちは「葬討部隊」。隊員全員感じ悪い。以上」

「待て待て待て！」

恋次がストップをかける。一護はこれ見よがしに顔を顰めた。

・・・なにかというと、突つかかってくんna。

「なんだ？」

「「なんだ？」じゃねえ！！全部テメエの独断偏見じゃねーかつ！」

！」

「俺だけじゃねえ。あれ見りや十人中十人同じ」と言つだらうぜ」「ぜ」

「そうじやなくて、もつと正確な情報をわたせつて言つてんだ！！」「わたせだと？俺は渡してもかまわない程度の情報を渡すとは言つたが、それをいちいち分かりやすく説明してやるとは言つてねえぜ、赤パイン」

「んどー！？」

「やろうつてんのか！」

睨みあう二人を止めたのはルキアの一喝と一撃。

「やめんか、このたわけどもがつ……」

「つきつ！？」

「がつ……」

一護と恋次は脳天を押さえて蹲る。腰に手をあて、ルキアは一人を糾弾した。

「なにをやつておるか！特に恋次！一護にはかなりの無理をやつてもらつている事に気づかんのかつ！？」

「でもよ、」

「言ひ訳無用！……」

蹴り倒され、ぐづぐづと踵で背中を攻撃するルキア。一護は不憫な恋次に合掌した。

バンッ！ 大理石のテーブルが碎けるか、と錯覚するほどの中音。

「ちょっと、それどういう事よつ！！？」

ルベルゼの鬼気迫る表情にも、ウルキオラは無表情を崩さない。

「どうもなにも、そのままの意味だが。お前の耳は飾り物か」「何気に毒を吐きながら、ウルキオラは無機質な翡翠の瞳を向ける。その先に居るのはいまだ主のとばっちりを受け、謹慎中の従属官……いや、彼らを従属官と呼んでいいものか。彼らの主は十刃ではないのだから。

「・・・確かなのか」

セロが左右色彩が違うオッドアイでウルキオラを睨みつける。

「一護の靈圧が全く感知できないというのはー、」

「今言つたとおりだ。この三日、残留靈子もどう動いたのかの情報すらない。なんらかの事情で靈圧を消しているか。あるいは

「・・・その身に何かあつたか」

「冗談じゃないわ！セロ、なにアンタまで不吉な事言つてんのよー？一護ちゃんなら大丈夫って、アンタもそつ言つたじやない！」

「・・・この世に、絶対は存在しない」

「黙らつしゃい！！」

論理的なセロと感情的なルベルゼが激突するのは、今に始まつたことじやない。

しかし、今日は両者共ヒートアップしそぎてゐる。

近くで恐る恐る話を聞いていたネル・ペッシュ・ドンドチャッカの三人集があわてて飛び出し、二人を羽交い絞めにして引き離す。

「まーまー一人とも」

「落ち着くでヤンス」

「これが落ち着いていられるもんですか！だから幾つになろうとも、一人歩きなんてさせたくないって言つたのよ」

「・・それは前々回の話し合いで可決された。今更蒸し返すな」

「・・・つて、二人ともいつごの事で会議なんとしてたんスか！？」初耳だ、とネルは驚愕に目と口を開ける限界まで開いた。

ペッシュ・ドンドチャッカは知つていたのか、咳払いと共に目をかなたへそらす。

ウルキオラは部屋の出口に足を向けた。

「現在一護は捜索中だ。しかし、見つかる見込みは今のところない」「・・責任は感じてないのかしら。仮にも一護ちゃんにこの任務を回したのはアンタでしょうに」

ルベルゼの口調は明らかに責めるものだ。けれどもウルキオラは足を止める事はない。

「あいつが自分で選んだ事だ。それで死んだら、それまでの奴だったというだけの事」

「なにをつ・・・！」

ウルキオラに掴みかかるとしたルベルゼを、ドンドチャッカが全身全霊の力を持つてとめる。

「なにすんのよ！」

「頭を冷やすでヤンス」

「ルベルゼつ・・・なら、いつごならきっと大丈夫つスよ！だか

見た目幼いネルに必死に言われた事で頭に上っていた血が下がったのか、ルベルゼは大きく深呼吸をして体の力を抜く。

「何時までさわってんのっ！」

「つぎやーー！」

肘をドンドチャッカの顔にめり込ませてから。

「ウルキオラ」

セロに名を呼ばれ、ウルキオラは初めて足を止めた。

「・・俺達の謹慎期間の残りは」

「あと二日・・・だつたと思うが」

「一護の居場所を突き止めるには、何日かかる？」

「さあな。なにせ手がかりも情報もない。あと七日して何も掴めなかつたら、捜索は打ち切りだ」

今は大事なときだ。いくら一護が腕利きだとはいっても貴重な時間を一破面のためだけにそこまでさけはしない。むしろ、失踪してから十日も捜索してくれるほうが珍しい。それどころか特例といってもいいぐらいだ。

「・・七日後。もし一護が見つからなければ、俺達全員の現世行きの許可を藍染様に取つてもらいたい」

ウルキオラが振り向く。見つめ返すセロの目には強い光があつた。

「俺達が、一護を探しに行く」

## 武拾參 情報（後書き）

今回はちゅうとじがんばって早めに書を上げました。

そのせいでどうかおかしなところが文中にあるかもしれません。お気づきになられましたら、教えてください。内容や表現が変、というのはもう作者の頭の問題なので、指摘してくださらないとありがたいです。

勿論、皆様の「」感想もお待ちしております。「続きを読む」「」などのコメントをいただけると、読んでくださっている方が居てくれてるんだな、と実感できて、出筆のはげみとなっています。

年内にもう一話書きたいと思つていますが、間に合わなかつたときのために言つておきます。

メリークリスマス！そして、よいお年を！

武鉄四 十産（前書き）

頑張つたら、年内にもう一話いました！

「・・・じうだ、浦原」

冬獅郎は一護が立ち去ったのを確認して、浦原に訪ねた。  
浦原はモニターに釘付けだった顔を上げる。

「はい。靈圧遮断義骸でも靈圧を感知できる」の優れもの機械で  
ずっとみていましたが、一護サンの靈圧は一切乱れず、終始同じ波  
長でした。嘘は言つていなかと。

あ、ちなみにこの機械はアタシの発明っスよ

「それはどうでもいい」

一蹴され、床にのの字を書く浦原。

「なんじや。氣味が悪いぞ、喜助」

廊下からするりと黒猫姿の夜一が入ってきた。

「いい年をしたおっさんがなにをやつておるんじや」  
鼻で笑つた様子がありありと分かる。猫の顔なのに。

幼馴染のあんまりな言い草の浦原はふてくされた風に夜一を顧みる。  
「夜一サンつてばもう。アタシ、泣いちゃいますよ」

「勝手に泣き喚くがいいわ」

やはり、彼女はどこままでいっても浦原に冷たい。

「で、どうするのじや」

「なにがっスか？」

夜一は苛ついたように尻尾で床を、たしつと呶く。

「これから、に決まっておるつ

崩玉の事、破面の事、十刃の事、藍染の事、そして、一護の  
事。

「・・・ビーもこーも、どうにかしていくしかないでしょう  
ほん、と機械の電源を切りながら、浦原はそう締めくくつた。  
皆、一様に緊張した面持ちで頷く。

夜一はちらり、と自分が入ってきた廊下に視線をやつた。

皆、気が付かなかつた。

廊下で息を気配を殺し、もれ出る靈圧が完全にかんじさせなくなつた者がそつと全てを盗み聞きしていた、など。

廊下から入つてきた、夜一以外。

自分に宛がわれている部屋に戻つた一護は、ずつとつめていた息を大きく吐いた。そのまま、一、二度深呼吸。

「・・・なるほど。そういうわけだつたのか」

浦原達の話を聞いて納得した。納得できた。

怒りはない。むしろ、敵に対して当然の処置だらう。

自分の体を調べるように眺めながら、独り言をぼそつと呟く。

「この義骸、まだなんか仕掛けがあるかもしけねーな

気に入つていたのに。残念だ。

そう思い、一護は義骸を脱ぎ捨てようとした瞬間、気が付いた。

靈体へ 戻れない。

一護はオレンジ色の髪をかきむしり、大きく舌打ちしながら布団の上に胡坐をかく。

思い返せば、どうやって義骸から出るかなんて、一度も言われなかつた。

なので、てっきり抜けようと思えば簡単に抜けれるものだと思い込んでいたのだ。

「あー、くそ」

これじゃ無自覚の、とはいえ立派な捕虜じやないか。捕虜に立派があるのかは知らないが。

そういうえば、雨に殴りかかられ、大刀を求めたときルキアに言われた。「自覚を持って」と。

その意味が今……否。今更分かつた。

「本当、鈍いな俺……」

「ほすん、と仰向けに倒れこむ。

頭に散々一護の事を「鈍い」と言っていた紫の髪の破面が浮かび上がる。

「……ルベルゼが知つたら、なんて言つだろ」「

笑うか、それともそら見たことが、と呆れるか。

案外、何も言わず刀を持ってこれを作った浦原に切りかかるかもしれない。

一護は自分の想像をネタに笑おつとし、片頬を引きつらせて失敗した。

・・・一番最後が一番簡単に想像できる。

本当、笑えない。色んな意味で笑えない。

「おや、おつたか」

足音も立てず夜一が先程と同じ黒猫姿のまま現れた。一護は上半身を起こす。

「てっきり逃げ出したかと思いつつたが

「へえ、何でだ?」

「わし等の魂胆を知り、これ以上関わりたく無くなつたのではない

か?」

「いや、別に」

思いがけない一護の即答に夜一は金の瞳を細めた。

「なにゆえじや」

「いや、だつてあいつ等は何にも間違つてねえだろ?俺は破面でルキア達は死神だ。

警戒するのは当たり前だ。・・・けど」

身動きした一護の顔に影が落ちる。

「やっぱ、俺は利用はされても信用はされないんだな、って思つとちょっと悔しい」

「信用しないわしらが憎い、と？」

「いや、そうじゃなくて」

一護は心臓の位置で手を握り締めた。靈体でも鼓動は一応あるらしい。

とくとくとくとくと一護の速さで脈打つ心臓。穴は無い。心もある。

「・・・一緒にいても、信用おけないって思われる自分が、悔しい」

「・・・そうか」

夜一はふむふむと頷く。そのたびに尾が左右にゆらゆらと揺れた。しぐさを見たところは、猫そのもの。だがこれが、褐色の肌の女性の仮の姿だとは。誰も夢にも思つまい。

「一護。わしはおぬしをただの莫迦だと思つとつたが・・・違つたよめ言葉じやのやじやの」

少年にしては長めの睫毛を瞬かせた一護を見据え、夜一は断言する。

「おぬしは本物の大莫迦者じや」

「・・なんだそりや。ほめてんのか？それともけなしてんのか」

「ほめ言葉じや。一応、の」

そっぽを向く黒猫。怪しい。怪しそう。

「ウソだろ。十割中十割けなす氣しかねえだろ」

「被害妄想の激しい奴じやな。ほめてると言つたらほめてるわ。人の好意はありがたくうけとつておくものじやぞ？」

「人じやなくて猫だろ。むしろ化け猫」

ぼそり、と一護の呟いた言葉に夜一の耳がぴくりと動く。

「なんぞ言つたか」

「い、いいえ、いつも通り素敵なお並みです」

一護は、咄嗟にビロードのような光沢をもつ夜一のお並みをほめる。

「・・ふむ。当然じやな」

そつは言いつつも、夜一の機嫌は幾分か上昇したようで、つり気味の猫目がどこか優しい。

「ところで。先程も言つたが本当にほめておるだ

「・・・バカつてほめ言葉になるんだな」

まるつきり皮肉だった。しかし、夜一は涼しい顔をくすぐらない。

「つむ。覚えておくといこ」

「・・・はい」

夜一は「よいか」と教師のように話し出す。

「おぬしは莫迦じや。大莫迦者じや。だからいざとこいつ時、賢く振舞おうとするな」

「・・・はい?」

一護が意味が分からず聞き返すと、途端夜一の眼光が強まる。

「返事つー」

小さな体から、ライオンすら睨みで屈服するようなオーラが滲む。  
「は、はーっ!」

大きな声につられて背筋を伸ばし、正座する。そんな一護を見て、  
夜一は田元を和ませた。

「本当に、おぬしは愛い奴じやの?」

夜一は正座する一護の膝の上に飛び乗ると、丸くなる。完全なる寝前体勢だ。

「つと、待つてくれー」

このままでは、そのつづ足がしごれてしまつ。

一護は夜一を抱き上げ、足をくずし楽な体勢で座りなおす。  
そして、夜一を下へ下ろすと、彼女は寝心地の良い位置を探しあはし動いていたが、やがて太腿の辺りでとまつた。どうやら、おけつどこの場所を見つけたらしこ。

「・・・て、なんでこんなとこひで寝ようとしてんだけ?」

「子供体温じやの〜、おぬし。ぬくいぞ」

ジーンズの上から肉瘤でふにふにと押される感覚が気持ちいいやらくすぐつたいやら。

一護はやめさせる意も込めて夜一の喉を撫でる。『ぐりぐり』と気持ち良さげに夜一は喉を鳴らした。やつしてこのひつわに、一護はふと疑問がわきあがる。

「なあ、夜一さん」

「ん？」

「なんで、あの時俺が聞いてるって言わなかつたんだ？」

その内容はつい先程のこと。

立ち去つたと見せかけ、一護は廊下で彼らにぎりぎりまで近づき聞き耳を立てていた。

そんな時、夜一は気配を完全に殺して一護の足元をするつと通り抜けたのだ。

「丁寧に、一度振り返り一警をくれてから。

「言つ必要があつたかの？」

夜一はそう言い切つた。一護はしばしあつけにとられ夜一を見つめた。

「いや、だつて……」

「その義骸が靈圧遮断性のものだとおぬしが知つて、それで何かができるというわけでもあるまい」  
うん、正論だ。だが、だからといって破面が盗み聞きしているのはたしてほつといていいものなのか。

「・・・いいのか？ それで」

「おぬしも大概しつこい奴じゃな。第一、そんな事よりも自分の心配でせんか。

わしは、「おぬしは逃げられん」と明言したようなものじゃぞ」

「いや、もう無理だろうな～って思つてたし」

「諦めとつたのか」

呆れ口調の黒猫は、大きく欠伸をし尻尾をぱたりと振つて目を閉じた。

その様子を見ていた一護もつられてかみ殺しきれない欠伸をする。

欠伸は伝染する、と昔から言うが一体何故だろ？

一護はそんなことを思いながら後ろの壁にもたれかかった。

「あらり・・・夜一サンツてば」

一つの寝息が聞こえてきた頃、よつやく浦原は独り言を呟いた。夜一はおそらく途中から浦原が居た事に気が付いていたのだろう。現に今も、わざとらしい寝息をたて、一護の傍に居る。「今は余計な事はするな」という意思表示である。

「そんなにうれしかったんねえ」

しみじみとした様子で意味深にそう言い、浦原は懐からカメラと携帯電話を取り出した。

「さて、あの人へのお土産がまた一つ増えましたね」

パシャリ カシャ その場に一度シャッター音が響いた。

鏡に映った自分の姿を一目見て氣に入つた乱菊は店員に微笑みかけた。

「じゃあ、これも貰おうかしら」

「ありがとうございます」

それほど大きな店ではないが、店長のしつけが行き届いているのか、店員は丁寧な態度で接客してくる。服もデザインは決して華美ではなく、しかしさりげなくおしゃれなものばかり。実にいい店だ。試着室から着替えて出てきた乱菊の手にある商品を「お預かりします」と言ってきた店員に渡し、乱菊はぐう・・とのびをした。そして、時計を探して、ぐるりと店内を見渡す。

「あり、これもいいわね」

その拍子にみつけたワンピースに駆け寄る。店員はにつこつと笑っている。その笑顔と反対に米神につたつた冷や汗は、店員の後ろにつまれた洋服の山がその全てを物語つている。

「すいませ～ん！ これも試着いいですか？」

「どうぞ」

乱菊は任務資金の入った財布を握り締めた。

「いや～、買った買った」

喫茶店にてアイスコーヒーを注文した乱菊は横に詰まれた紙袋の山を満足そうに見た。

本当は酒がいいのだが、さすがに真昼間からどうなのか、という考えから変更した。

なら、任務中に暢気にショッピングとティータイムを楽しむのもどうなのか、という考えは彼女の中には無い。

「現世つて本当に何でもあるわねー」

その全てを経費で落としたとしれれば、そく上司の雷の叱責が下る。のだが、乱菊はそれをものともしないのだから意味がない。（まつたく、冬獅郎隊長殿には同情する）

「あとで女性死神協会の皆さんお土産買ってあげないとね。あと、ギンにも、と言おうとして、乱菊は口を紡ぐ。

「そうだ。彼は、もう。」

「・・・ぬけないわね、私も」

はああ・・・と重いため息をつき、乱菊はマジックをまわした。

「どうして、こうなってしまったんだ？・・・？」

藍染惣右介。護廷十三隊五番隊隊長で、誰もが認める人格者。

そんな彼が世界に反旗を翻したのは、突然の事であった。

騒ぎの始まりは、藍染惣右介の惨殺からだった。

彼の「遺体」は無残に高い壁に貼り付けにされ、見つかった。

藍染を心酔していた、五番隊副隊長・雛森桃は錯乱にも近い状態で常日頃藍染と衝突していた三番隊隊長・市丸ギンに斬りかかった。

それを抜刀することで受け止めた三番隊副隊長・吉良イヅルと共に彼女は投獄されて。

一方、護廷内では犯人探しに躍起になっていた。情報がまともに流れていらない一般隊士達は少しでも挙動不審の者が居るとひとつとらえ。

拳句、普段から仲の悪い隊の隊士同士が道中で睨み合い、「犯人はお前等の隊の者だ!」「お前方だ!」と言い合う始末。

護廷は、混乱に陥った。死神同士の同士討ちに発展しかけないところまできて、ようやく隊長・副隊長が直々に動くので心配するな、ということが大体的に発表され、騒ぎはようやく落ち着いた。

そんな時、夜一が尸魂界に姿を見せた。隠密機動総司令官及び同第一分隊「刑軍」総括軍団長にして元二番隊隊長。そして、罪人の逃走帮助をし、永久除籍を受けた四法院家の姫君。

その隊長格と同等の実力の面から藍染殺しの疑いがかかり、彼女の捕縛命令が下った。

実は、彼女はほどぼりがさめた今頃を見計らい、崩玉の存在を知らせにきたそうだ。

来たタイミングが悪かつた。後に夜一は苦々しくそう言った。

いや、それさえも「彼」は読んでいたのかもしれない。

夜一が逃げ回っている間、四十六室からは、彼女の捕縛についての命令が幾度も下った。

それを疑つたのは、日番谷冬獅郎、八番隊隊長・京楽春水、十三番隊隊長・浮竹十四郎、そして六番隊隊長・朽木白哉だつた。

「命令絶対」の白哉がこれを疑つたというのは、後で昔から馴染みの全員が首を捻つた。

浮竹と京楽は面識のある夜一の保護に。白哉は義妹のルキアと副官の恋次をつけ、藍染殺しの真犯人の捜索へ。冬獅郎は乱菊をつれ、近頃様子のおかしい四十六室へと。

そして、そこにいた中央四十六室は、全員事切れていた。

あの時の衝撃は今なお忘れる事はない、と乱菊は思う。殺されてから随分と時間がたっているようで、壁に床に机に飛び散る血は赤黒くなり。

司法を司る賢者や裁判官達は、物言わぬ骸と化していた。

そこに現れたのは、投獄されていたはずの吉良。意味深な事を言い、ついて来いといわんばかりの彼に冬獅郎と乱菊は迷わず後を追つた。

今思えば、その行動をもつと疑うべきだった。  
過ぎた事だとは、思う。けれど、終わった事ではない。  
その短慮による傷跡は、今も彼女、離森の体と心に深く残つて  
いるのだから。

そう。少なくとも敬愛した上司から、直接瀕死の重症を負わされるなどとこう事は、回避できたのかもしれないのだから。

本性を現した藍染は、そのまま異変を察知し戻ってきた冬獅郎に深手を負わせ、彼の遺体に違和感を覚えた四番隊隊長・卯ノ花烈の前で全てを語つた。

能力・目的・・・信じていたその人柄さえも偽り。耳を疑いたくなる内容だった。

冷笑をうかべた藍染は付き従うギンと、乱菊の幼馴染とともに双へと移動した。

そこで合流した九番隊隊長・東仙要と共に、夜一+護廷十二隊の隊長・副隊長の面々に刀を突きつけられた。  
乱菊自身も、ギンの拘束をしていた。

終わり、になるはず だった。

『すまない。時間だ』

余裕に藍染が言い切つた直後、「離れる!」と怒鳴つた夜一に体は素直に従つた。

それが、乱菊の本心だつたからなのかもしれない。

その瞬間、藍染たちは光の柱に包まれた。

大虚ネガシオンが同属を助ける際に放つ光

、反膜。

祖に光に包まれたが最後、外と内とは干渉不可能。隔絶され、触る事すらできないといつ。

藍染は、虚と手を結んで 、否。従えていたのだ。

『よしやく、崩玉も扱えるようになつた・・・。これで、私の側に駒は揃つた』

思えば、夜一がこの台詞にやけに過敏に反応していたが、乱菊はそれよりも共に天に昇つていく幼馴染しか見ていなかつた。光に包まれた時の、彼の言葉。

『あーあ。もうちょっと捕まつといても、よかつたんやけどな

『はじめんな、乱菊』

なんで、そんなこと。そんなこと言つぐらいなら、戻つてきて。そう、言えなかつた。もう元に戻る事はできないのだ、と唐突に理解してしまつた。

『私が 天に立つ』

死神たちは空の黒い裂け目に消えていく、三人の離反者たちを、

三人の元仲間の後姿をなす術も無く見送った。

カラソツ グラスに入っている氷がたてた音が、乱菊を現実に呼び戻した。

「やーね。私ったら・・・」

もう、あんなバカの事なんて、割り切つたと思っていたのに。  
自嘲しながら、アイスコーヒーを一気に飲み干す。そろそろ帰らないと、冬獅郎にどやされる。彼の憤怒の雷と凍てつくブリザードはそれはまあ恐ろしい。

テーブルの端に置かれた伝票を手に、立ち上がる。  
そこに書かれた数字は、勿論経費で払われるのだ。

何の特徴もない電子音のアラーム。男はそれが自身の携帯の着信音だと気づき、テーブルの上に置かれた赤と黒の一いつのうち、黒い方を手に取った。

画面に表示された「メール」の文字。黒いほうの携帯の番号を知っている人物となると随分と送り人は限られてくる。

一番可能性のありそうな胡散臭い店主の顔を思い浮かべながら受信履歴を見てみれば、やっぱりそう。一体なんなのだ、と思いながらメールを開封した。

次の瞬間、画面に広がるのはひざの上に猫をのせ、眠るオレンジの髪の少年。

数秒後フリーーズした思考を再起動させ、画面を下にスクロールさせる。

そこには絵文字を多様した文章で「寝顔を激写！今度手土産にもつともつて行きますね」と書かれていて。

やぱり盗撮か、とかこれって一応犯罪だよな、とか色々と思ふ。ひとはあつたが取り合えずメールを保存し返信を選ぶ。そこは、ちょっと迷つてから「いつ文字を打つた。

『土産話も待つて』

武拾四 十産（後書き）

今回は、いのお話での「界編」の事をはつきり書いておいたと思つて急遽書いたお話です。藍染の手紙で雛森が冬獅郎に襲い掛かる部分なんかはカット致しました。

書くと文のリズムが崩れちゃつたので・・・。「めんなさい」。誤字脱字がありましたら、教えてください。直します。  
感想もお待ちしております。皆様、良いお年を。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5315w/>

---

夜明けの太陽

2011年12月27日20時07分発行